財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室 活動報告 第１集

平成22年度 ひろしまの遺跡を語る

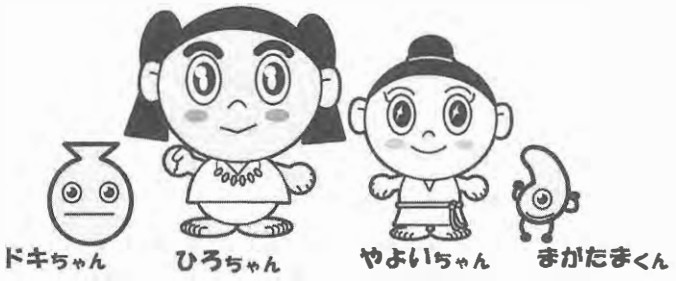
古墳時代の暮らしと心
記録集

平成23(2011)年
財団法人広島県教育事業団

財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室 活動報告 第１集

平成22年度 ひろしまの遺跡を語る

古墳時代の暮らしと心
記録集



平成23(2011)年
財団法人広島県教育事業団

刊行にあたって

今ではすっかり恒例となった「ひろしまの遺跡を語る」は，昭和62（1987）年７月に，（財）広島県埋蔵文化財調査センターの設立10周年を記念して開催されたのが始まりです。

この時は，センターの理事で広島大学名誉教授の潮見浩先生に「広島県の考古学」と題して記念講演をお願いし，そのあと７名の調査研究員が発掘調査成果報告を行っています。会場は，まだ新しい光町の県立社会教育センターでした。

以来，発掘調査成果報告会として毎年実施するようになり，平成９年度からは学界の著名な研究者を招聘した基調講演や特別講演を組込み，参加者から好評をいただきました。また平成17年度からの３年間は，広島市・東広島市・安芸高田市の財団と４法人合同企画として，統一テーマによる報告と基調講演，シンポジウムを行い，斬新な取り組みを行いました。

平成20年度からは，また当事業団単独開催とし，基調講演と報告の平成９年以来の形に戻りましたが，平成22年度はかつて４法人合同で企画・開催した統一テーマによる研究報告と基調講演，シンポジウムの形で開催しました。

このように足掛け20年を超える「ひろしまの遺跡を語る」は，その時々に開催形式や内容に工夫を加えながら，広島の考古学ファンのみなさまに支えられて今日にいたっています。

しかしながら，こうした企画は時とともにその感動や記憶が薄れて，いつしか消えていくのが宿命です。これまで「ひろしまの遺跡を語る」の内容をまとめて刊行したものはありませんでしたが，このたび，昨年度の「ひろしまの遺跡を語る」の記録集を刊行することとしました。この記録集が，多くのみなさまの広島の歴史探訪や古代史への興味に，少しでも資するところがあれば幸いです。

最後になりましたが，講演後の原稿校閲や校正などに，ご多忙の中ご協力いただきました松木武彦先生，古瀬清秀先生に心から感謝申し上げます。

平成23年12月

財団法人広島県教育事業団
埋蔵文化財調査室長
伊藤　　実

目　　次

刊行にあたって
開会ごあいさつ ……（1）
研究発表Ⅰ「鉄が語るムラ」　主任調査研究員　岩本芳幸……（2）
研究発表Ⅱ「ものに託す願い」　調 査 研 究 員　山田繁樹……（19）
研究発表Ⅲ「土器副葬と死後観」　主任調査研究員　梅本健治……（30）
基 調 講 演「安芸・備後の古墳と古代国家形成」
岡山大学大学院教授　松木武彦さん……（38）
シンポジウム「古墳時代の暮らしと心」
コーディネーター　広島大学大学院教授　古瀬清秀さん……（56）
閉会あいさつ……（69）

平成22年度 ひろしまの遺跡を語る「古墳時代の暮らしと心」

【日程】平成23年１月８日（土）　10：00～16：00
【会場】広島県民文化センター　多目的ホール　広島市中区大手町１－５－３
【内容】

10：00～10：10　開会行事
10：10～12：10　研究発表Ⅰ「鉄が語るムラ」　主任調査研究員　岩本芳幸
研究発表Ⅱ「ものに託す願い」　調 査 研 究 員　山田繁樹
研究発表Ⅲ「土器副葬と死後観」　主任調査研究員　梅本健治

13：00～14：30　基調講演「安芸・備後の古墳と古代国家形成」
岡山大学大学院教授　松木武彦さん

14：40～15：50　シンポジウム「古墳時代の暮らしと心」
コーディネーター　広島大学大学院教授　古瀬清秀さん
パネラー　松木武彦さん，岩本芳幸，山田繁樹，梅本健治

15：50～16：00　閉会行事
全体司会　調査研究員　山澤直樹

※関係出土品を会場のロビーで展示

＜主催＞　財団法人広島県教育事業団
＜後援＞　広島県教育委員会，広島市教育委員会，中国新聞社，ＮＨＫ広島放送局

（表紙写真は，北広島町・岡の段Ｃ地点遺跡の祭祀遺構出土の土器群）

開会ごあいさつ

財団法人広島県教育事業団

理事長　山田　穂積

皆さんおはようございます。新春早々にもかかわりませず「平成22年度ひろしまの遺跡を語る」に，多くの皆さんにご出席いただきましてありがとうございます。

この「ひろしまの遺跡を語る」という会は，私ども広島県教育事業団が発掘調査を通じて得られた出土遺物・遺跡からひろしまの歴史を探る試みとして，昭和62年から毎年欠かさず開催させていただいております。今ではすっかり新春を飾る行事として定着したと自負しているところでございます。

今年はご案内のとおり，「古墳時代の暮らしと心」というテーマを設定いたしました。岡山大学大学院教授の松木武彦先生と，広島大学大学院教授の古瀬清秀先生をお招きいたすとともに，教育事業団職員によるこれまでの調査研究成果の発表，さらには古瀬先生のコーディネーターによるシンポジウムというふうに，考古学ファン，とりわけ安芸・備後の考古学に興味・関心がおありの方にとりましては，斬新でおもしろい話がうかがえる企画になっているのではなかろうかと思っております。

基調講演をしていただく松木先生は，ご専門は日本考古学ということですが，科学としての歴史学の再検証・再構築を目指され，多くの非常に意欲的なご著書がございます。本日ご講演のテーマは「安芸・備後の古墳と古代国家形成」ということでございます。古代人が土器に何を願い，なぜ巨大な古墳を造ったのか。血縁で結ばれた集団がどのようにして古代国家の時代へと進んでいったのか。私たちが持つそんな疑問をきょうは進化考古学の視点から鮮やかに解明していただけるのではないでしょうか。皆さんどうか期待していただきたいと思います。

松木先生，古瀬先生にはお忙しい中をおいでいただき，ほんとうにありがとうございます。私ども教育事業団は，今日のような「ひろしまの遺跡を語る会」であるとか，現地におけるさまざまな遺跡見学会や報告会等を通じて，発掘成果の公開に務めております。そうしたことによりまして，郷土ひろしまを足元から見直す契機になればと祈念しているところです。今後も教育事業団は埋蔵文化財の調査・保存・継承への取り組みを続けて参りますけれども，どうかご理解ご支援をお願いいたしまして，開会のごあいさつとさせていただきます。本日はどうかよろしくお願いいたします。

平成23年１月８日

研究発表Ⅰ「鉄が語るムラ」

主任調査研究員　　岩本　芳幸

1　はじめに

（1）備後北部とは

本日は「鉄が語るムラ」というテーマで発表をさせていただきますが，広島県全体ではなく備後北部（備北）地域，つまり三次市と庄原市の遺跡を中心としたお話になります。

備北地域は，古代から近世まで多くの鉄を生産していました。そのことは，奈良時代の都・平城宮跡から出土した木簡に，備後国三上郡信敷（しのう）郷から天平18（746）年に調という税として鍬を10口納めたことなどが記されていることからも分かります。三上郡というのは，古代から明治31（1898）年に郡が統合されて比婆郡になるまでの，現在の庄原市東部の郡の名前です。信敷郷というのは，現在の中国自動車道庄原インターの周辺です。また，備北地域で近世にはいわゆるたたら製鉄が盛んで，近世後半（江戸時代後半）には国内で生産される鉄の約９割を中国山地で生産していました。

近年では，備北地域において，灰塚ダムや国営備北丘陵公園，中国横断自動車道尾道松江線の建設などに伴って，遺跡の大規模調査が行われ，古墳時代の集落の調査例も増加しています。

ところで，備北地域のうち庄原市東城町の川は高梁川水系で瀬戸内海（岡山県）に注ぎますが，それ以外の川は江の川水系で日本海（島根県）に注いでいます。そのため，古代から出雲・石見や，本日の資料には書いていませんが伯耆の影響も受けています。こうした日本海文化の影響を強く受けた地域ということが言えます。この日本海文化ですが，出雲を中心としておりますので，この後の話の中では，まとめて出雲文化と言わせていただきます。

（2）備北地域の集落

福山市神辺町に御領遺跡という弥生時代から古墳時代を中心とする集落があり，周囲に濠を廻らせた環濠集落として知られています。神辺のように平地が広ければ平地に集落を作ります。しかし，備北地域は平地が少ないため，水田耕作には不便な丘陵を利用して集落を形成しました。比較的平坦な丘陵頂部・尾根上に住居を作ればいいと思われるかも知れませんが，ここには遺構があまりありません。丘陵頂部・尾根上は風当たりがきついということもあると思います。斜面をカットして平坦面を作り出し，竪穴住居や掘立柱建物を建てます。

竪穴住居跡は，規模の違いによって大中小の３つに分類されることがよくあります。規模によって用途の違いがあったようです。竪穴住居は生活の場だけではなく，作業場（工房）として使用されたものもあります。斜面に立地するため，雨が降れば，水や土が流れ込んできます。それを防ぐため，背後に半円形などの排水溝を作った住居跡も確認されています。

段状遺構というのは，斜面をカットして削りだした平坦面のことです。柱穴の有無による分類ができ，掘立柱建物が建つものや，簡単な構造の建物があったものもあります。建物を伴うものは作業小屋，倉庫などとして，建物を伴わないものは資材置き場，広場などとして利用されたようです。掘立柱建物跡のうち高床式のものは倉庫，平地式のものは倉庫・作業小屋・住

居などに使用されたと考えられます。大型の掘立柱建物跡に排水溝を伴うものが多いようです。また，炉跡を持つ掘立柱建物跡にも排水溝があり，防湿効果（湿気を防ぐ）に配慮したものと思われます。

2　鉄・鉄器生産と製鉄関連遺跡

（1）鉄・鉄器生産の工程（概略）

資料の図（第１図）はあくまでも概略であって，実際はもっと複雑な工程となります。まず原料となる鉄鉱石や砂鉄を採取します。それと並行して燃料となる木炭を焼きます。次に製鉄炉（製錬炉）を築き，そこに原料となる鉄鉱石または砂鉄，そして木炭を入れ，加熱・還元し，鉄塊を作ります。還元というのは，鉄鉱石や砂鉄といった原料から酸素を取り除くことです。木炭は燃料としてだけではなく，還元剤という重要な役割を果たしました。近代（明治時代）以降の洋式高炉では木炭に代わって石炭から作ったコークスを使うようになりました。製鉄炉で出来た鉄塊はそのままでは使えませんので，不純物を取り除いて鉄素材を作る精錬鍛冶を行います。いわゆる大鍛冶です。鉄を作ることも製錬と言いますが，精錬鍛冶とは「せい」という字が違います。精錬鍛冶によって出来た鉄素材から鉄製品を作るのが鍛錬鍛冶で，いわゆる小鍛冶です。昔は村に鍛冶屋さんがいて，鉄製品を作ったり，修理したりしていましたが，鍛錬鍛冶（小鍛冶）がこれにあたります。

採鉱（原料の鉄鉱石・砂鉄採取）　製炭（燃料・還元剤となる木炭を作る）
↓　↓
製錬（製鉄炉（製錬炉）に，原料・木炭を入れ，加熱・還元し，鉄塊を作る）
↓
精錬鍛冶（鉄塊から不純物を除去して鉄素材を作る。いわゆる大鍛冶）
↓
鍛錬鍛冶（鉄製品を作る。いわゆる小鍛冶）

第１図　鉄・鉄器生産の工程

（2）鍛冶遺跡（製鉄関連集落）

鍛冶遺跡（製鉄関連集落）というのは，鍛冶炉が検出されたり，鉄滓，鉄鉱石，鍛冶道具である鉄鉗（かなはし）・鉄槌・鉄床・砥石・鑢（やすり）などが出土したりする集落遺跡です。鍛冶炉は，竪穴住居跡・段状遺構の中に設けられる場合がほとんどです。資料に載せているすべての遺跡から鍛冶炉が検出されているわけではなく，鍛冶を行っていた可能性が高い遺跡も含まれます。13～17頁に各遺跡の概要，そして12頁に遺跡分布図を載せていますので，参考にしていただければと思います。時間の関係で個々の遺跡について触れることはできませんが，本格的な鉄生産の開始に伴い６世紀後半の遺跡が多いのが特徴です。庄原市の大成遺跡は５世紀中葉から６世紀初頭の遺跡で，このなかでは古い例としてあげられます。集落内で１～２基程度の鍛冶炉が検出される例が多いのですが，庄原市の則清１号遺跡では７基もの鍛冶炉が検出されており，鍛冶専業集落であった可能性があります。なお，三次市の下本谷遺跡ですが，この遺跡は三次郡衙跡や旧石器出土地としても知られています。ここでも鍛冶炉が見つかっていますが，集落ではなく官衙に伴うものです。

それから，こうした製鉄関連集落から製塩土器が出土することが多いのも特徴です。

（３）製鉄遺跡

製鉄炉は集落内に作られるのではなく，集落から離れた場所に作られています。製鉄遺跡として世羅郡世羅町にあるカナクロ谷遺跡をあげていますが，備北地域ではありません。しかし，ここは分水嶺に近く，江の川支流の最上流部に隣接しています。庄原市の小和田遺跡では４基の製鉄炉が確認されています。備北地域の古代製鉄炉は隅丸方形や円形のものが多く，規模は炉底の内法が40～50㎝程度と推測される小さいものがほとんどです。中国山地の製鉄といえば，砂鉄を使用した製鉄を思い浮かべる方が多いと思いますが，古代においては製鉄原料として鉄鉱石も利用されていました。庄原市の戸の丸山製鉄遺跡・三次市三良坂町の白ヶ迫製鉄遺跡は砂鉄，庄原市の小和田遺跡・岡山Ａ地点遺跡は鉄鉱石，庄原市の西山遺跡・世羅町のカナクロ谷遺跡は砂鉄と鉄鉱石を併用していたことが明らかになっています。ただし砂鉄使用でも鉄鉱石使用でも，製鉄炉の形や構造の違いは特に見受けられません。

（４）炭窯跡

次に炭窯ですが，炭窯も集落から離れた場所で見つかっています。炭窯についても個々の遺跡名は省略させていただきます。古代の炭窯は，横口付炭窯が主流で，細長い窯体の横に８つくらい孔があることから，別名「八つ目うなぎ」とも呼ばれます。この横口付炭窯の源流は朝鮮半島にあり，製鉄技術とともに朝鮮半島から伝えられたと考えられます。昨年，三次市教育委員会が調査した南山遺跡はほぼ完全な形で見つかったということですが，その横口は６か所です。

３　鍛冶遺跡の発掘調査の実例

（１）最近の発掘調査から

当埋蔵文化財調査室が最近調査した鉄・鉄器生産と関係する遺跡について，スライドを使って簡単に説明します。まず，庄原市西城町にある常納原遺跡です。【スライド１】は常納原（つねのうばら）遺跡の空中写真です。丘陵全体が遺跡で，総面積約76,000㎡の広大な遺跡です。大正の終わりから昭和の初めにかけて開墾が行われ，現在は大部分が水田になっています。ほ場整備に伴って，遺跡の一部を昨年度と今年度，２次にわたり調査を実施しました。その結果，縄文時代から古墳時代までの集落を確認しました。【スライド２】は１次調査Ａ区の全景です。１次調査では古墳時代の竪穴住居跡８軒，掘立柱建物跡２棟などを検出しました。ＳＢ５は方形の竪穴住居跡で，一辺が６ｍと大型のもので，中央に大型の土坑があります。【スライド３】はＳＢ５中央の土坑です。長さ2.4m，幅1.4m，深さ0.5mで，底壁際に焼土が広がり，その内側に炭化した穀物（蕎麦？）を敷詰めていまし

【スライド１】常納原（つねのうばら）遺跡（庄原市西城町）
遺跡全景（空中写真）

【スライド２】常納原遺跡（庄原市西城町）
Ａ区　全景

【スライド３】常納原遺跡（庄原市西城町）
ＳＢ５　炉跡

【スライド４】常納原遺跡（庄原市西城町）
ＳＸ１　調査風景

【スライド５】常納原遺跡（庄原市西城町）
ＳＸ１出土鉄鉱石

【スライド６】八鳥塚谷横穴群（庄原市西城町）

【スライド７】三重１号遺跡（三次市四拾貫町）
遺跡全景（空中写真）

た。火熱を受けて赤変した石も２点出土しています。何に使われたかはわかりませんが，炉と考えられます。【スライド４】はＳＸ１の調査風景です。６世紀後半の大型土坑で，５ｍ×５ｍ以上の規模で，深さ0.7ｍです。元々は作業場だったものが，後にごみ捨て穴として使われるようになったようです。この遺構から土器の他，砥石・鉄鏃・鉄滓とともに鉄鉱石が出土しました。【スライド５】はＳＸ１から出土した鉄鉱石の写真です。鉄鉱石は12点，総重量約7.5kgが出土しました。遠くから運んだとは考えられないので，かつては中国山地でも鉄鉱石が産出したようです。この常納原遺跡あるいは近くの遺跡で鉄鉱石を使用した鉄生産が行われていたことが考えられます。砂鉄を使用する製鉄が行われるようになり，使わなくなった鉄鉱石が廃棄された可能性もあります。【スライド６】は常納原遺跡の周辺には多くの横穴墓があります。写真はその一つ県史跡八鳥塚谷横穴群で，６基の横穴墓からなります。

次に三次市四拾貫町にあります三重１号遺跡です。【スライド７】は三重１号遺跡の空中写真です。中国横断自動車道尾道松江線の建設に伴って調査を実施しました。５世紀中頃～７世紀初頭の集落跡で，竪穴住居跡24軒，掘立柱建物跡２棟などを検出しました。【スライド８】は先ほど水や土の流れ込みを防ぐために排水溝を作った竪穴住居跡があると説明しましたが，三重１号遺跡でも斜面の高い方に排水溝を作った住居跡が確認されています。【スライド９】は竪穴住居跡ＳＢ13ではＬ字形カマド，いわゆるオンドル状遺構を検出しました。【スライド10】はＬ字

【スライド８】三重１号遺跡（三次市四拾貫町）
竪穴住居跡の排水溝

【スライド９】三重１号遺跡（三次市四拾貫町）
ＳＢ13　全景

【スライド10】三重１号遺跡（三次市四拾貫町）
ＳＢ13　Ｌ字形カマド跡

【スライド11】三重１号遺跡（三次市四拾貫町）
ＳＢ16　炭化物・焼土検出状況

【スライド12】三重１号遺跡（三次市四拾貫町）
ＳＢ16　小鉄塊集中部

【スライド13】善正平（ぜんしょうびら）１・２号遺跡（三次市甲奴町）
遺跡全景（空中写真）

形カマドを横から写した写真です。現在も朝鮮半島でオンドルが使われていますが，その起源となるものといわれています。Ｌ字形カマドは県内では初めて確認されましたが，朝鮮半島（渡来人）との関係が考えられます。【スライド11】は竪穴住居跡ＳＢ16では，多量の炭化物と焼土が出土しました。【スライド12】は掘り下げると床面炉跡付近に小鉄塊が広がる部分がありました。鍛冶を行っていた可能性が高いようです。なお，遺跡から鉄滓・製塩土器が出土しています。さらに，祭祀に使用されたと考えられる遺物も遺跡内から出土しており，注目されます。

最後に三次市甲奴町にあります善正平（ぜんしょうびら）２号遺跡です。【スライド13】は善正平１・２号遺跡の空中写真です。この遺跡も尾道松江線の建設に伴って，昨年度調査を実施した遺跡です。遺跡はさらに北東斜面に続いており，かなり大規模な集落であったと考えられます。【スライド14】は善正平２号遺跡の調査前近景です。竪穴住居跡や段状遺構が完全に埋まりきらず，窪んだ状態で残っていました。【スライド15】は調査風景です。かなり急な斜面で調査をしているのが分かっていただけると思います。【スライド16】は遺構検出状況です。７世紀～８世紀初

【スライド14】善正平２号遺跡（三次市甲奴町）
調査前近景

【スライド15】善正平２号遺跡（三次市甲奴町）
調査風景

【スライド16】善正平２号遺跡（三次市甲奴町）
遺構検出状況

頭の集落跡で，竪穴住居跡10軒，掘立柱建物跡７棟，建物を伴わない段状遺構などを検出しました。【スライド17】は段状遺構に伴うＳＢ17という建物跡から２基の鍛冶炉を検出しました。鉄床石と考えられる花崗岩がいくつか見られます。【スライド18】はこの遺構から多量の鉄滓，鞴（ふいご）の羽口が２点出土しました。鞴というのは製鉄や鍛冶の際，炉に風を送る装置で，その送風管が羽口です。ここから出土した鉄滓は精錬鍛冶滓と考えられ，精錬鍛冶が行われていたようです。

【スライド17】善正平２号遺跡（三次市甲奴町）
ＳＢ17　全景

【スライド18】善正平２号遺跡（三次市甲奴町）
ＳＢ17　鉄滓　鞴の羽口出土状況

（２）道ヶ曽根遺跡の調査研究成果

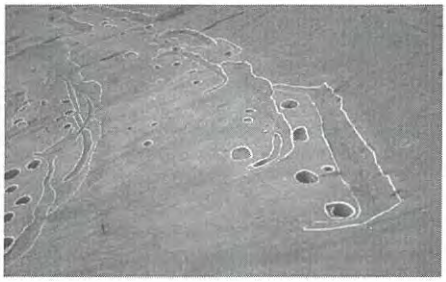
道ヶ曽根遺跡は三次市三良坂町にあります。灰塚ダム建設に伴い，平成３（1991）年から４（1992）年にかけて発掘調査を行いました。８頁に周辺遺跡分布図（第２図）というのがありますのでご覧ください。１が道ヶ曽根遺跡で，南東から北西方向に向けて延びる丘陵の南西向き斜面に立地しています。この丘陵の北東側には２の見尾東遺跡と３の見尾西遺跡があります。道ヶ曽根遺跡と谷を挟んだ西側には７の杉谷Ｂ地点遺跡，８の杉谷Ｃ地点遺跡などがあります。

それではスライドをご覧ください。【スライド19】は道ヶ曽根遺跡の空中写真です。【スライド20】は遠景です。南北約280m，東西約190m，面積20,600㎡の広い遺跡です。【スライド21】は近景です。斜度20～30°の急斜面に作られた６世紀末～８世紀前葉の集落で，竪穴住居跡64軒，掘立柱建物跡76棟，鍛冶炉などを検出しました。【スライド22】は鍛冶炉が見つかった第５建物群です。鍛冶炉は１間×２間の掘立柱建物跡から検出しました。【スライド23】は鍛冶炉

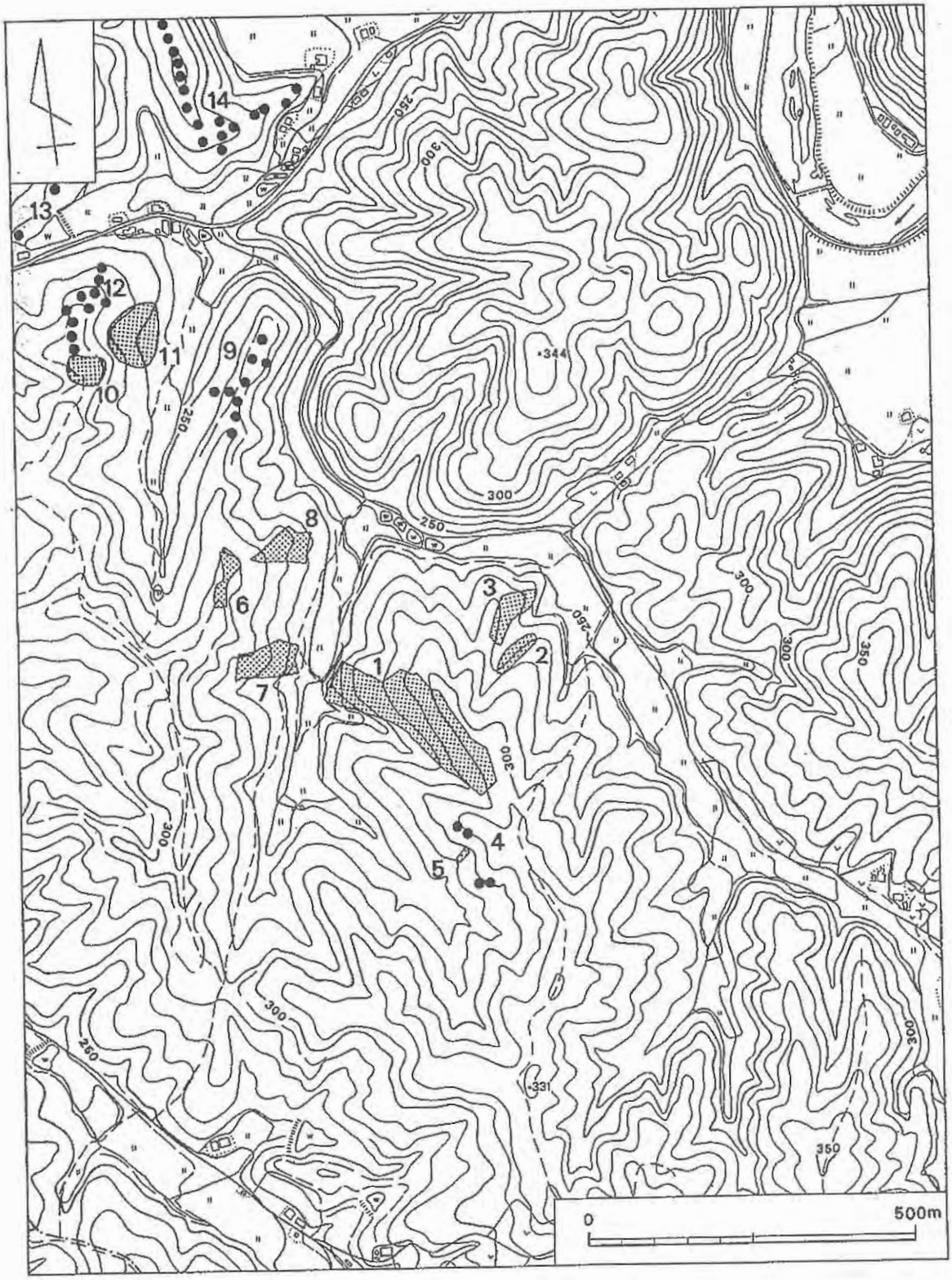
【スライド19】道ヶ曽根（みちがそね）遺跡（三次市三良坂町）
遺跡全景（空中写真）

【スライド20】道ヶ曽根遺跡（三次市三良坂町）
遺跡全景

【スライド21】道ヶ曽根遺跡（三次市三良坂町）
遺跡近景



【スライド22】道ヶ曽根遺跡（三次市三良坂町）
第５建物群

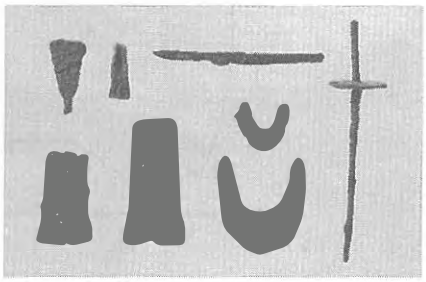


第２図　道ヶ曽根遺跡周辺遺跡分布図

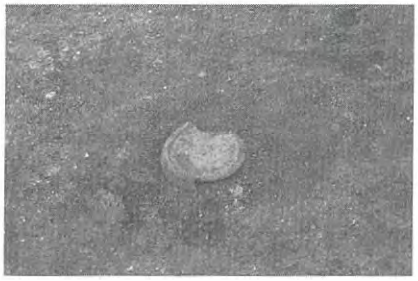
1　道ヶ曽根遺跡	2　見尾東遺跡	3　見尾西遺跡	4　見尾山古墳群
5　見尾山遺跡	6　杉谷Ａ地点遺跡	7　杉谷Ｂ地点遺跡	8　杉谷Ｃ地点遺跡
9　杉谷古墳群	10　野竹Ａ地点遺跡	11　野竹Ｂ地点遺跡	12　野竹古墳群
13　横谷古墳群	14　寺山古墳群		

の写真です。長軸72cm，短軸50cmの楕円形で，炉の底部が残存していました。炉の周囲は熱により赤褐色に変色していました。この建物跡から鉇（やりがんな）・砥石が出土しました。これ以外にも遺跡から鍛冶炉の可能性がある遺構が５～６基見つかっています。【スライド24】はこの遺跡から多量の鉄製品が出土しており，武器（鉄鏃・鉄刀），農具（鍬先・鋤先・摘鎌），工具（斧・鉇・刀子・鑿（のみ）），紡錘車，釘，未製品などがあります。こうした出土遺物から当時の人々の生活を読み取ることができると思います。出土した鉄滓を分析した結果，２種類の砂鉄が使用されていたことが明らかになりました。砂鉄の産地が違うということです。【スライド25】は竪穴住居跡から見つかった円面硯です。円面硯が７点と須恵器杯Ｂが多く出土しています。須恵器杯Ｂというのは，高台の付く身とつまみの付く蓋がセットになるものです。硯を利用して字を書いていたようですから，一般的な集落ではなく，役所的な性格を持ち，近辺で生産された鉄を集めて選別し，製品や素材に加工し，都に税として運んだ可能性が考えられます。以上でスライドは終わりです。

【スライド23】道ヶ曽根遺跡（三次市三良坂町）
ＳＢ27　鍛冶炉

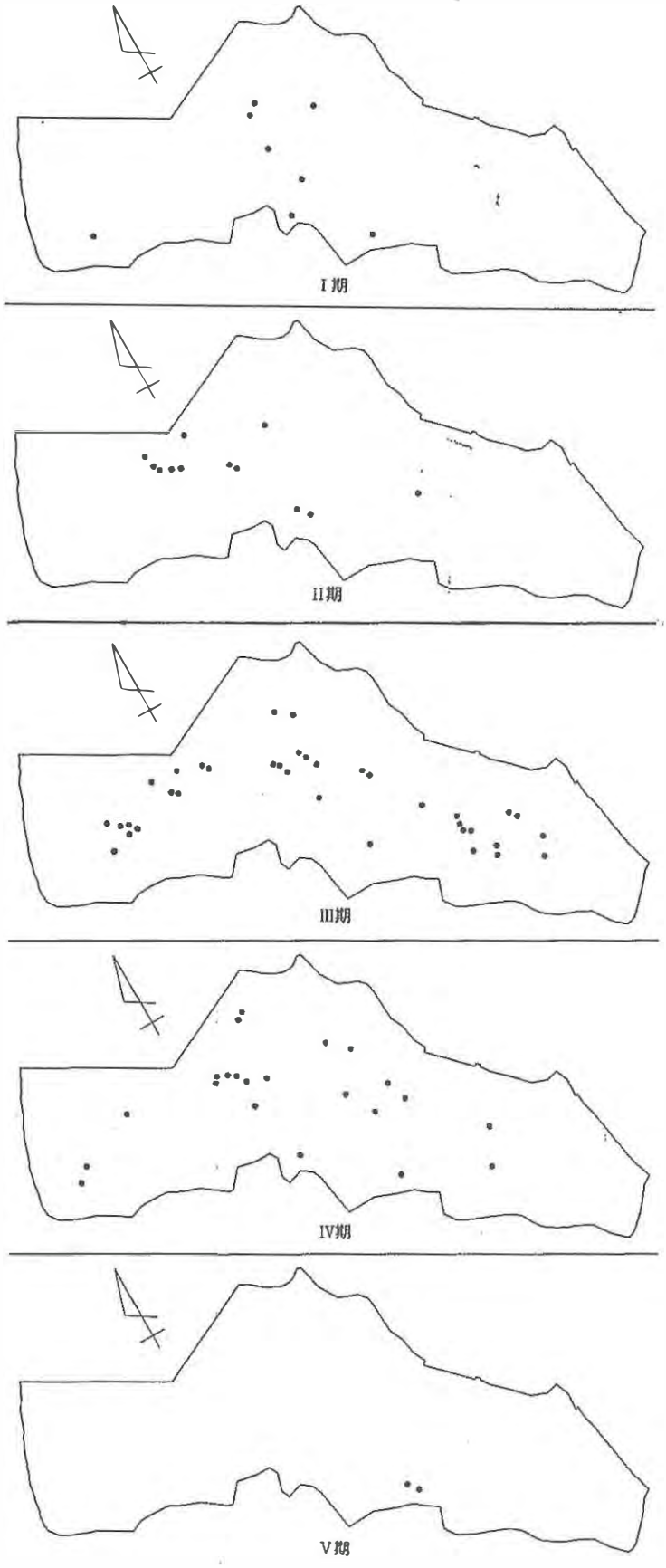


【スライド24】道ヶ曽根遺跡（三次市三良坂町）
鉄器



【スライド25】道ヶ曽根遺跡（三次市三良坂町）
ＳＢ26出土　円面硯

次に10頁の集落変遷図（第３図）をご覧ください。Ⅰ～Ⅴ期と書いてありますが，これは奈良時代より前の土器の編年で飛鳥Ⅰ～Ⅴというのがあり，ほぼこれに相当します。大まかに言うと，Ⅰは７世紀第１四半紀，Ⅱは７世紀第２四半紀，Ⅲは７世紀第３四半紀，Ⅳは７世紀第４四半紀，Ⅴは７世紀末から８世紀初めということになります。元は丘陵北東斜面にあった見尾西遺跡・見尾東遺跡という集落が，６世紀末に道ヶ曽根遺跡に移転した可能性があります。鍛冶作業に携わる集落として形成され，７世紀前半に集落規模が拡大し，専業的傾向を強めていきます。７世紀後半，大規模な集落となります。製鉄は行っていませんので，一貫した鉄生産の体制はみられませんが，より専業的になります。律令体制下に組み込まれ，この地域における鉄器生産に携わる拠点的集落となったようです。しかし，８世紀になると急速に規模が縮小し，８世紀前葉に消滅したようです。道ヶ曽根遺跡と周辺の見尾西遺跡，見尾東遺跡，杉谷Ｂ・Ｃ地点遺跡は相互に関連していたようです。杉谷Ｂ・Ｃ地点遺跡は一時期，道ヶ曽根遺跡とともに存在していましたが，７世紀後半に道ヶ曽根遺跡の規模の拡大とともに集落としての機能を終えたようです。そして，見尾西遺跡は，７世紀後半から横穴墓や蔵骨器を伴う墳墓などが作られ，墓地として利用されるようになりました。



第３図　道ヶ曽根遺跡集落変遷図

4　おわりに

中国山地には良質の砂鉄という鉄原料・森林資源が豊富にあります。備北地域の古代から近世までの主要産業は，鉄・鉄器生産及びそれに付随する炭生産だったということが言えます。近世たたらの立地条件として，「小鉄(こがね)七里に炭三里」という言葉があります。１里は約４kmですから，砂鉄は約28km，炭は約12kmが輸送限界距離，それ以上の距離だと採算が合わないということです。製鉄には大量の炭を必要としましたが，軽いがかさばる炭を遠くから運ぶと経済的でないので，必然的に平野部ではなく山間部に製鉄関連遺跡が作られたということになります。

古代の備北地域の製鉄では，原料として，①鉄鉱石を使用，②砂鉄を使用，③鉄鉱石と砂鉄の併用，という３つのパターンがありました。６世紀後半には鉄鉱石を使用した製鉄だけではなく，砂鉄を使用した製鉄も始まったようです。庄原市の小和田遺跡では７世紀中頃以降になっても鉄鉱石が使用されています。鉄鉱石から砂鉄へと単純に変遷したわけではありません。しかし，鉄鉱石の埋蔵量にも限りがありますので，次第に砂鉄のみが使用されるようになったようです。

遺跡の調査において，出土した鉄滓の科学的分析を行うことが重要です。それによりどのような原料が使用されていたか，どの工程でできた鉄滓かなどが分かります。原料は砂鉄か鉄鉱石はもちろん，砂鉄であればどこで産出した砂鉄かということまで分かる場合があります。また，遺跡単独で考えるのではなく，周囲の遺跡との関係を考えることが必要です。先ほど説明した道ヶ曽根遺跡がよい例です。しかし，実際には１つの遺跡にしても遺跡全体が調査されることは少なく，遺跡の一部のみが調査されるケースがほとんどで，周辺の遺跡を含めて調査されることは稀です。

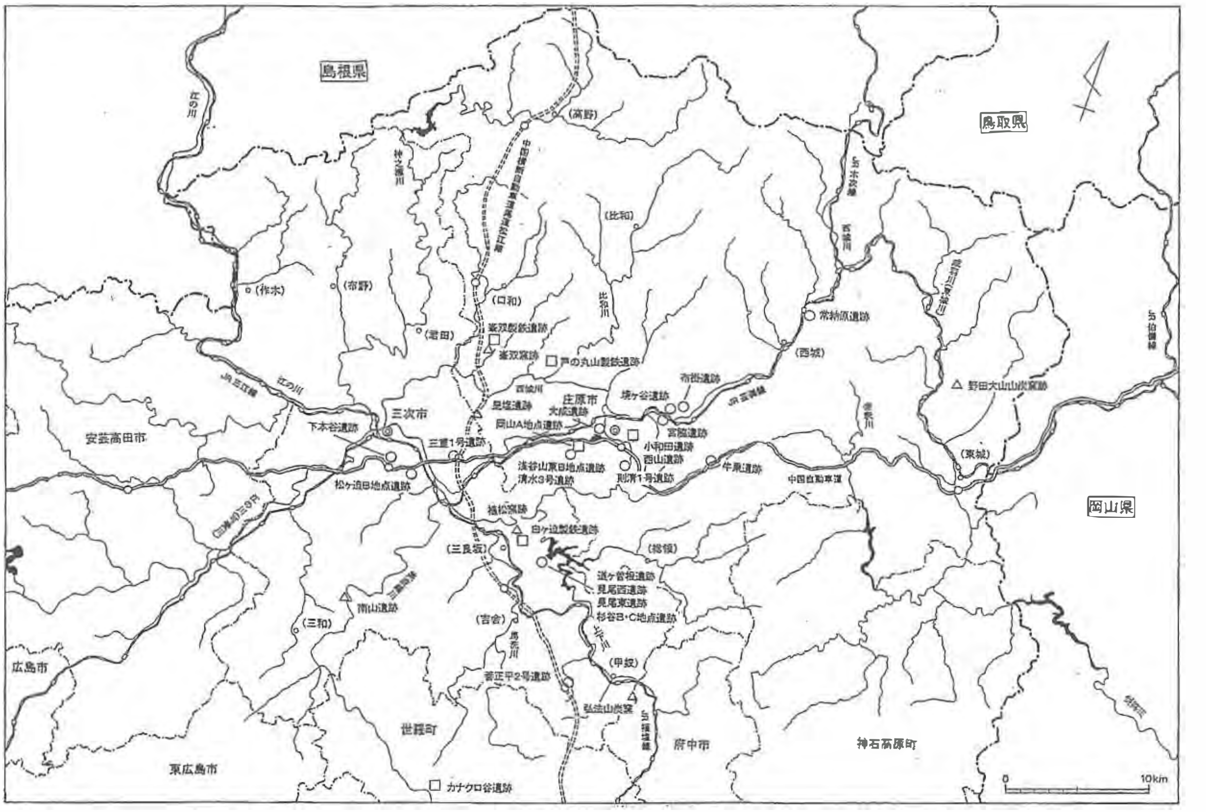
文化は水系との関わりが深く，備北地域は弥生時代まで出雲文化の影響を強く受けますが，吉備国に組み込まれて以降，吉備の政治的影響を受けるようになります。弥生時代末から古墳時代の土器を見ると，吉備系の土器や畿内系の土器も見られるようになります。岡山県になりますが，備中南部では古墳時代中期（５世紀）に鍛冶の技術をもった渡来人が定住しており，その後鉄鉱石を使用した製鉄が盛んに行われるようになったようです。岡山県総社市あたりでは大規模な製鉄遺跡が見つかっています。これに対し，出雲では鉄鉱石を使用した製鉄遺跡は確認されていないことから，備北地域の鉄鉱石を原料とする製鉄は，吉備南部の影響を受けて成立したものと思われます。ただ，吉備南部とは製鉄炉の形が違います。それでは，出雲との関係がまったく無くなったかといえば，そうではありません。18頁に備北地域の横穴墓所在地を載せていますのでご覧ください。横穴墓の分布は製鉄関連遺跡の分布と重なっています。例えば，鉄鉱石が多く見つかった常納原遺跡がある庄原市西城町八鳥(はっとり)には13基の横穴墓があります。製鉄炉や炭窯が見つかった庄原市口和町常定(つねさだ)には８基の横穴墓があります。さらに，製鉄炉が見つかった庄原市新庄町の小和田遺跡・西山遺跡，炭窯が見つかった庄原市水越町の皇塩(おおじお)遺跡近くの馬ヶ段遺跡，鍛冶炉が見つかった三次市三良坂町の見尾西遺跡でも横穴墓が確認されています。しかも，鉄生産が本格化した６世紀後半から７世紀前半に多くの横穴墓は作られています。これまで横穴墓は山陰との関わりが深いことが指摘されていましたが，一歩踏み込んで言及すれば，出雲から移住し，鉄・鉄器生産に関わった人々が横穴墓を作った可能性があると言えるのではないでしょうか。こうした横穴墓は，江の川水系だけではなく，高梁川水系の庄原市東城町や神石郡神石高原町，その隣の岡山県新見市哲西町・神郷町でも確認されています。文化圏が違う所に横穴墓が作られているということは，自然の流れではなく，政治的な

力が働いていると思われます。なお，庄原市西城町の矢内迫横穴群から幼児の骨が見つかっていることからも，横穴墓は家族墓の性格が強いようです。

古代の集落の変遷は，原料の砂鉄とともに炭の原料となる木材の採取，律令国家体制の確立とも関わりがあります。6世紀後半，製鉄または鍛冶を行う小規模な集落が成立します。備北地域でも6世紀後半から鉄生産が本格化し，鉄を背景とした地域豪族と畿内政権の結びつきが強まります。7世紀前半になると，製鉄関連集落で次第に専業的傾向が強まります。そして，645年，いわゆる大化の改新以後急速に律令国家体制が確立すると，7世紀後半以降，製鉄から鍛冶までを一貫して行う集落が出現します。これは国家が原料から製品までを掌握した官営工房といえます。このシステムは，律令体制の地方への波及により確立しました。備北地域では，製鉄から鍛冶まで一貫して行う官営工房は見られませんが，7世紀代の専業的製鉄関連集落は備北地域でも南部で見られます。三次市三良坂町の道ヶ曽根遺跡や三次市甲奴町の善正平2号遺跡がこれにあたると思われます。製鉄遺跡が周辺に存在し，製品・素材の搬入・搬出に好都合な場所に形成されたようです。備後国府は現在の府中市にありましたが，その交通を考えると備北地域の北部ではなく南部に大規模な製鉄関連集落が形成されたものと考えられます。

以上，「鉄が語るムラ」というテーマでお話ししましたが，当時の人々がどのような生活を送っていたかというところまで十分に踏み込んでお話しすることはできませんでした。また，古墳時代前期から中期のことは触れずに，古墳時代後期の話が中心となってしまいました。しかし，6世紀後半以降，備北地域では鉄・鉄器生産が本格化し，それ以降，この地域の主要産業になったことが分かっていただければ幸いです。

これで，発表を終わります。ありがとうございました。



第4図　備北地域製鉄関連遺跡分布図（○：鍛冶遺跡，□：製鉄遺跡，△：炭窯跡）

第１表－１　Ａ　鍛冶遺跡（製鉄関連集落）－１

１　常納原遺跡（庄原市西城町八鳥）

遺跡の年代　３世紀後半から６世紀（１次調査）

遺構の概要　総面積約76,000㎡で，周辺には県史跡八鳥塚谷横穴群など多くの横穴墓が分布する。当調査室が実施した2009年の発掘調査で，竪穴住居跡８軒，掘立柱建物跡２棟などを検出した。６世紀後半の大型土坑（ＳＸ１）から砥石，鉄鏃，鉄滓，鉄鉱石（12点，総重量約7.5kg）などが出土した。

その他　平成21（2009）・22（2010）年，財団法人広島県教育事業団発掘調査実施。平成21（2009）年，庄原市教育委員会発掘調査実施。

２　牛乗遺跡（庄原市本村町）

遺跡の年代　６世紀後半～８世紀

遺構の概要　竪穴住居跡13軒などを検出した。第５号住居跡から鞴の羽口・鉄滓などが出土した。また，別の住居跡から転用硯として使用された須恵器杯身や銅印などが出土している。

文　献　広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（１）』1978年

３　布掛遺跡（庄原市川西町）

遺跡の年代　古墳時代中・後期

遺構の概要　２次にわたる調査で，弥生時代中期から古墳時代後期の竪穴住居跡56軒，掘立柱建物跡27棟などを検出した。このうち古墳時代中・後期の竪穴住居跡は８軒で，その多くから鉄滓，鉄器（鉄鏃・鉄鎌など），砥石，敲石，被熱により赤変した台石などが出土した。また，段状遺構の多くから鉄滓が出土し，鞴の羽口を伴うものも見られる。遺跡から製塩土器が出土している。

文　献　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『布掛遺跡・大仙１号遺跡・大仙２号遺跡発掘調査報告書』2003年，財団法人広島県教育事業団『布掛遺跡・大槙神遺跡』2007年

４　境ヶ谷遺跡（庄原市川西町）

遺跡の年代　６世紀初頭～中葉

遺構の概要　竪穴住居跡29軒・掘立柱建物跡１棟，斜面下方で屋外炉と推定される２基の鍛冶炉を検出した。遺跡から鉄器（斧，鎌，鉄鏃，刀子など），鉄滓，鞴の羽口，砂鉄が出土し，製塩土器が多数出土した。鍛冶炉付近から鞴の羽口・鉄滓が多量に出土している。

鉄滓分析結果　砂鉄を原料とした鍛冶滓と推定される。

文　献　広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『境ヶ谷遺跡群－庄原養鶏団地造成に係る埋蔵文化財の調査－』1983年

５　宮脇遺跡（庄原市高町）

遺跡の年代　７世紀代

遺構の概要　傾斜が15～20°の斜面に立地し，竪穴住居跡，掘立柱建物跡，段状遺構，鍛冶炉などを検出した。古墳時代後期～終末期の竪穴住居跡４軒のうち３軒は鍛冶関連遺構と考えられ，段状遺構に立地するＳＢ04で円形の炉跡を複数検出し，鉄床石・鞴の羽口・砥石・鉄滓・木炭・鍛造剥片が出土した。また，ＳＸ16から３基の鍛冶炉が重複して検出された。

鉄滓分析結果　砂鉄原料の精錬鍛冶滓。含鉄鉄滓には水冷痕跡が認められるものもあり，水冷処理が鍛冶作業の中で一般的に行われていたことを示唆する。

文　献　財団法人広島県教育事業団『宮脇遺跡発掘調査報告書』2004年

６　則清１号遺跡（庄原市是松町）

遺跡の年代　６世紀後半～７世紀初頭

遺構の概要　竪穴住居跡９軒，掘立柱建物跡１棟，段状遺構13基，鍛冶炉７基などを検出した。鍛冶炉は竪穴住居跡４軒及び段状遺構２基で検出し，平面形は楕円形３基，円形３基，船形１基である。炉跡焼土に鍛造剥片や砥石，使用痕を持つ礫などが混入していた。段状遺構から鉄鉱石が６点出土している。

鉄滓分析結果　鉱石系鍛冶滓で精錬鍛冶滓が多いが，鍛錬鍛冶滓も一部認められた。

文　献　庄原市教育委員会『則清１・２号遺跡』1993年

第１表－２　Ａ　鍛冶遺跡（製鉄関連集落）－２

７　大成遺跡（庄原市三日市町）

遺跡の年代　５世紀中葉から６世紀初頭

遺構の概要　1975年の調査で５世紀中葉の８棟の竪穴住居跡，掘立柱建物跡２棟などを検出した。住居跡床面に長方形の大型土坑を伴うものが多い。さらに，多数の砥石・鉄滓・鞴の羽口が出土しており，鉄器生産の最終段階である「研」を行った工房の可能性が指摘されている。1987年の調査で６世紀初頭の竪穴住居跡４軒，掘立柱建物跡１棟，段状遺構24などを検出した。住居跡に長方形の大型土坑を伴うものがあり，段状遺構から鉄滓・鞴の羽口が出土した。製塩土器も出土している。

鉄滓分析結果　鉄鉱石を原料として用いた精錬鍛冶滓。

文　献　大成遺跡調査団『庄原市大成遺跡の発掘調査』1986年，財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『大成遺跡－庄原市三日市町所在遺跡の発掘調査－』1989年

８　岡山Ａ地点遺跡（庄原市上原町）

遺跡の年代　古墳時代後期～終末

遺構の概要　1992年の調査で，古墳時代前期のものを含め竪穴住居跡13軒，掘立柱建物跡１棟などを検出し，鉄滓や鑿，楔，砥石，鉄器の原材料などが出土した。竪穴住居跡は工房的性格を持つと推定される。1996・1997年調査で，竪穴住居跡12軒，掘立柱建物跡６棟，製鉄炉１基などを検出した。集落の約15m下方で検出した製鉄炉は，長さ68cm，幅48cm，深さ約30cmの長円形の地下施設をもち，鉄鉱石や鉄滓・炉壁が出土した。竪穴住居跡の大半から鉄滓が出土し，鉄粉やガラス質滓が出土したものもある。

鉄滓分析結果　磁鉄鉱石を原料にした製錬炉であり，その鉄を用いた精錬鍛冶，及び砂鉄を原料にした精錬鍛冶が行われていたことが確認された。

文　献　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『岡山Ａ地点遺跡』1994年，財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『国営備北丘陵公園整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書　岡山Ａ地点遺跡・清水４号遺跡・清水６号遺跡』1999年

９　浅谷山東Ｂ地点遺跡（庄原市上原町・七塚町）

遺跡の年代　６世紀後半

遺構の概要　1990年調査で，竪穴住居跡７軒，掘立柱建物跡３棟などを検出。大半の竪穴住居跡から数点～10数点の鉄滓が出土した。また，遺跡から鉄鏃，砥石，敲石，炉壁片も出土した。1995年調査で，竪穴住居跡３軒，掘立柱建物跡４棟などを検出した。谷を挟んだ丘陵上に岡山Ａ地点遺跡が位置する。

鉄滓分析結果　鉱石系精錬鍛冶滓。炉壁は鍛冶用炉材と推定される。

文　献　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『浅谷山東Ｂ地点遺跡』1992年，財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『浅谷山東Ｂ地点遺跡・清水３号遺跡』1998年

10　清水３号遺跡（庄原市上原町）

遺跡の年代　７世紀

遺構の概要　浅谷山東Ｂ地点遺跡の約300m南に位置する。竪穴住居跡７軒，掘立柱建物跡４棟などを検出した。竪穴住居跡ＳＢ３は床面壁際に焼土・炭化物を多く含む楕円形土坑があり，鉄滓が出土したことから鍛冶に関連した作業場的性格が考えられている。遺跡から鉄鉱石が１点確認されている。

鉄滓分析結果　砂鉄原料の製錬滓や精錬鍛冶滓のほか，製錬炉の炉壁が確認されている。

文　献　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『浅谷山東Ｂ地点遺跡・清水３号遺跡』1998年

11　三重１号遺跡（三次市四拾貫町）

遺跡の年代　５世紀中頃～７世紀初頭

遺構の概要　竪穴住居跡24軒，掘立柱建物跡２棟などを検出した。竪穴住居跡ＳＢ13でカマドの袖部の片側がＬ字状に屈曲するＬ字形カマド（オンドル状遺構）が確認された。竪穴住居跡ＳＢ16は床面炉跡付近に小鉄塊が広がり，鍛冶作業を行った可能性が高い。遺跡から各種の祭祀遺物が出土している。

その他　平成20（2008）・21（2009）年，財団法人広島県教育事業団発掘調査実施。

12　松ヶ迫Ｂ地点遺跡（三次市東酒屋町）

遺跡の年代　６世紀末～７世紀初頭

遺構の概要　傾斜が15～30°の斜面に立地し，竪穴住居跡33軒，掘立柱建物跡２棟，建物状遺構25などを検出した。ＳＢ58から鍛冶炉と考えられる粘土塊が検出されている。また，竪穴住居跡やその周辺から，鉄器（鋤先・鍬先），砥石，金床石，鞴の羽口，鉄滓などが出土している。

鉄滓分析結果　砂鉄を原料とする鍛冶滓。

文　献　広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告－三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査－』1981年

第１表－３　Ａ　鍛冶遺跡（製鉄関連集落）－３

13　下本谷遺跡（県史跡）（三次市西酒屋町）
遺跡の年代　７世紀
遺構の概要　第６次調査で，三次郡衙跡庁院部の北150ｍ付近にトレンチを設定したところ，北方官衙群を確認した。掘立柱建物跡ＳＢ8402は２間×３間以上で，建物の北西半から須恵器・鉄滓・鍛造剥片・鞴の羽口・砥石が多数出土した。鍛造剥片には板状と球状の２種がある。
文　献　広島県立埋蔵文化財センター『下本谷遺跡第６次発掘調査概報』1985年

14　道ヶ曽根遺跡（三次市三良坂町灰塚）
遺跡の年代　６世紀末～８世紀前葉
遺構の概要　竪穴住居跡64軒，掘立柱建物跡76棟，鍛冶炉などを検出した。鍛冶炉は１間×２間の掘立柱建物跡ＳＢ27で検出し，建物跡から鉈，砥石が出土している。その他，遺跡内で鍛冶炉の可能性がある遺構が５～６基確認されている。遺跡内から多量の鉄製品，鉄滓が出土している。さらに，円面硯が７点出土していることなどから，鉄生産に携わる拠点的集落であった可能性が高い。
鉄滓分析結果　鍛冶原料となる荒鉄の選別段階で残された廃滓（砂鉄製錬滓と鉄塊系遺物）が中心である。大部分はチタン分の低い酸性砂鉄が大部分であったが，１点のみ高チタン含有塩基性砂鉄が原料となった製鉄滓が確認されており，２種類の砂鉄の使用が考えられる。
文　献　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅱ）』1998年

15　見尾西遺跡（三次市三良坂町灰塚）
遺跡の年代　６世紀後半～７世紀前葉
遺構の概要　竪穴住居跡35軒，掘立柱建物跡44棟，鍛冶炉３基などを検出した。遺跡から鞴の羽口，鉄滓が出土している。鉄滓の出土が最も多かったＳＢ37では上層で鍛冶炉１基，下層で鍛冶炉２基を検出し，鍛冶炉から鍛造剥片と粒状滓が出土した。同時期の竪穴住居跡は検出されていないため，生活の拠点は谷を挟んだ反対斜面に位置する見尾東遺跡であった可能性が高い。７世紀後半から８世紀後半にかけては，古墳・横穴墓など墓地として利用しており，道ヶ曽根遺跡との関わりが想定される。
鉄滓分析結果　チタン含有量の少ない酸性砂鉄（真砂系）を原料とした製錬滓，精錬鍛冶滓，鍛錬鍛冶滓が確認された。
文　献　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅲ）』1998年

16　見尾東遺跡（三次市三良坂町灰塚）
遺跡の年代　６世紀後半～７世紀前葉
遺構の概要　見尾西遺跡とは谷部を挟んで反対側の斜面上にある。竪穴住居跡６軒，掘立柱建物跡３棟，平坦面（段状遺構）３基などを検出した。竪穴住居跡ＳＢ３から鍛冶炉１基を検出した。鍛冶炉の近くから鉄滓及び大量の鍛造剥片を含んだ再結合滓が出土している。
鉄滓分析結果　塩基性砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓と鉱石製錬滓２種の鉄滓が出土しており，供給源が複数あったことを示している。なお，鉄塊系遺物に水冷痕跡が確認された。
文　献　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅲ）』1998年

17　杉谷Ｂ・Ｃ地点遺跡（三次市三良坂町灰塚）
遺跡の年代　６世紀後半～７世紀前半
遺構の概要　弥生時代中期のものを含め竪穴住居跡18軒，掘立柱建物跡20棟などを検出した。鉄滓が多く出土することから，鉄生産との関わりが考えられる。谷を挟んだ東側に位置する道ヶ曽根遺跡と同時に存在していたが，７世紀後半に道ヶ曽根遺跡の規模の拡大とともに集落としての機能を終える。
鉄滓分析結果　始発原料はチタン含有量の少ない砂鉄と鉱石の可能性が指摘されている。平面形が円形に復元できる炉底塊や，粗く板状に成型した段階の鉄素材が確認された。
文　献　三良坂町教育委員会『杉谷遺跡群』2003年

18　善正平２号遺跡（三次市甲奴町宇賀）
遺跡の年代　７世紀～８世紀初頭
遺構の概要　竪穴住居跡10軒，掘立柱建物跡７棟，建物を伴わない段状遺構14基などを検出した。掘立柱建物跡は，大規模な段状遺構に伴う。掘立柱建物跡ＳＢ17の床面で２基の鍛冶炉を検出した。周囲には鉄床石と考えられる花崗岩が数点あり，多量の鉄滓と鞴の羽口２点が出土した。
その他　平成21（2009）年，財団法人広島県教育事業団発掘調査実施。

第１表－４　Ｂ　製鉄遺跡

１　戸の丸山製鉄遺跡（庄原市濁川町）
遺跡の年代　７世紀前後
遺構の概要　約25°の斜面を削平して造り出した平坦面奥で製鉄炉を検出した。炉の大きさは70×50cm程度の隅丸方形の炉と推定される。炉内残留滓など鉄滓や炉壁などが出土している。炉跡の下に横口付炭窯が存在した可能性もある。
鉄滓分析結果　砂鉄を原料とした製錬滓と推定される。
文　献　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『戸の丸山製鉄遺跡発掘調査報告書』1987年

２　小和田遺跡（庄原市新庄町）
遺跡の年代　６世紀後半～７世紀後半
遺構の概要　1981年の調査では，竪穴住居跡７軒などを検出した。第３号住居跡から鉄滓が出土し，熱で赤変した２基の土坑を伴う。1999・2000年の調査では，竪穴住居跡，段状遺構の他，７世紀中頃以降の製鉄炉を段状遺構Ｄ７で１基，Ｄ８で３基検出した。炉の平面形は円形のものと隅丸方形のものがある。竪穴住居跡ＳＢ13から鉄滓が出土している。また，近くに３基からなる小和田横穴墓群がある。
鉄滓分析結果　２種類の鉄鉱石を原料として使用していたことが確認されている。
文　献　広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『西山・小和田・永宗－国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』1982年，庄原市教育委員会『庄原市上野総合公園遺跡群Ⅱ　小和田遺跡』2009年

３　西山遺跡（庄原市新庄町）
遺跡の年代　古墳時代後期
遺構の概要　小和田遺跡の約70m西，谷を挟んで向かい合う斜面に立地する。2000年の調査で，製鉄炉１基，横穴墓２基などを検出した。製鉄炉から鉄鉱石と砂鉄製錬滓が出土している。
文献・その他　広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『西山・小和田・永宗－国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』1982年，平成12（2000）年，庄原市教育委員会発掘調査実施。

４　岡山Ａ地点遺跡（庄原市上原町）（Ａ８に記載）

５　峯双製鉄遺跡（庄原市口和町常定）
遺跡の年代　古墳時代～古代（炉の形態などから）
遺構の概要　斜面を削平して平坦面を造りだし，２基の製鉄炉を形成している。炉Ａは長径1.1m，短径0.9m，深さ0.2m，炉Ｂは円形で径0.65m，深さ0.15mである。内部に木片などが堆積していた。遺構の年代を決定する遺物は出土していない。
文　献　広島県教育委員会「常定峯双遺跡群の発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第７集　1967年，広島大学文学部考古学研究室編『中国地方製鉄遺跡の研究』渓水社　1993年

６　白ヶ迫製鉄遺跡（三次市三良坂町三良坂）
遺跡の年代　６世紀後半
遺構の概要　排滓溝をもつ製鉄炉２基が重なって検出された。炉１は円形で直径40cm，深さ30cm，炉２は径80×60cm，深さ約40cmである。炉跡から砂鉄が採集された。製鉄炉から約15m離れて竪穴住居跡１軒が存在する。道ヶ曽根遺跡から約1.5km離れ，谷を挟んだ丘陵斜面で植松炭窯が確認されている。
鉄滓分析結果　低チタンの真砂砂鉄を原料とする。
文　献　三良坂町教育委員会『白ヶ迫製鉄遺跡』1995年

７　カナクロ谷遺跡（県史跡）（世羅郡世羅町黒渕）
遺跡の年代　６世紀後半～７世紀初め
遺構の概要　２基の製錬炉が検出され，ともに炉底下に防湿の施設がみられる。斜面下手は鉄滓・炉壁などの捨場になっている。
鉄滓分析結果　二酸化チタンの含有から３グループに分けられる。製鉄の原料として砂鉄と鉄鉱石を併用していたことが明らかになった。鉄鉱石はマンガンを多く含む磁鉄鉱を中心とする。
文献・その他　昭和55（1980）・56（1981）年，発掘調査実施。広島大学文学部考古学研究室編『中国地方製鉄遺跡の研究』渓水社　1993年

第１表－５　Ｃ　炭窯跡

１　峯双窯跡（庄原市口和町常定）

遺跡の年代　７世紀初頭以前

遺構の概要　峯双２号横穴構築の際に一部壊されており，焼成室から続く煙道，煙出しのみ原形を保つ。横口付炭窯で，残存長4.2m，幅0.8mである。多量の木炭が出土した。窯体構築方法は地下式である。

文　献　広島県教育委員会「常定峯双遺跡群の発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第７集　1967年，広島大学文学部考古学研究室編『中国地方製鉄遺跡の研究』渓水社 1993年

２　皇塩遺跡（庄原市水越町）

遺跡の年代　６世紀後半～８世紀前半の可能性（遺構の特徴から）。

遺構の概要　横口付炭窯跡２基を検出した。窯体の南側に横口を付け，横口の前面には前庭部と呼ばれる平坦面を造成している。２号炭窯跡の大半を壊して１号炭窯跡が造られている。１号炭窯跡は，燃焼部の長さ約８m，床面幅約0.8mで，前庭部の長さ8.4m，最大幅3.8mである。横口は８か所ある。１号炭窯跡の窯体構築方法は，地山を掘り下げて窯体を作り，それに粘土で天井を掛けた半地下式である。明確に遺構に伴う遺物はない。約70m離れて，７世紀の集落である馬ヶ段遺跡（竪穴住居跡４軒，掘立柱建物跡４棟，横穴墓２基検出。砥石，鉄滓出土。）がある。

その他　平成20(2008)年，財団法人広島県教育事業団発掘調査実施。

３　植松窯跡（三次市三良坂町皆瀬）

遺跡の年代　７世紀中葉（残留磁気測定による）

遺構の概要　窯跡は一部削平されており，残存規模は長さ約4.3m，幅0.8mである。地表面を溝状に掘り窪めて築く半地下式の構造である。西側に燃焼部があり，山側の壁はほぼ垂直に立ち上がり，高さは約0.5mである。谷側の壁には，0.6～0.7m間隔で並ぶ横口が６か所残存していた。横口は楕円形で，大きさは0.3～0.4mである。床面は焚口から煙道にかけて緩く登っており，傾斜角度は５°30′である。横口の前面には平坦部を構築している。窯跡から木炭粒以外に遺物は出土していない。

文　献　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『植松遺跡群－植松第２号・３号・４号古墳・植松窯跡－』1987年

４　南山遺跡（三次市有原町）

遺跡の年代　７世紀後半～８世紀（炭窯），８世紀後半～９世紀（製鉄関連遺構）

遺構の概要　２基の横口付炭窯が天井部を除き，全体の形がわかる状態で検出された。炭窯１は全長10.7m，幅0.7～1.2mで，横口が４か所あり，窯跡２は全長8.0m，幅0.7～1.2mで，横口が６か所ある。炭窯の近くの土坑から鉄滓・炉壁破片が出土しており，遺跡内に製鉄炉があったものと考えられている。

その他　平成22（2010）年，三次市教育委員会調査実施。

５　弘法山炭窯跡（三次市甲奴町本郷）

遺跡の年代　古墳時代か？

遺構の概要　窯の長さ6.5mで，横口が４か所確認された。煙道部の幅0.75m，高さ0.85mである。

文　献　甲奴町誌編纂委員会『甲奴町誌』1994年

６　野田大山山炭窯跡（庄原市東城町竹森）

遺跡の年代　奈良時代前後

遺構の概要　焚口付近は工事により破壊されているが，燃焼室の残存規模は長さ約3.3m，幅約0.9～1.1mで，奥壁に煙出しの穴がない窖窯の形式をとる。地下式の横口付炭窯で，横口は３か所残存していた。

文献・その他　昭和63（1988）年発掘調査実施。広島大学文学部考古学研究室編『中国地方製鉄遺跡の研究』渓水社　1993年

第２表　備北地域の横穴墓

（遺跡名称は，基本的に広島県教育委員会『広島県遺跡地図』による）

１　庄原市

①西城町（22基）

大平ヶ丸横穴群　（大屋）２基
有田沖横穴　（中野）
栃畑横穴　（入江）
矢内迫横穴群　（八鳥）２基，1989年発掘調査実施
内堀迫横穴　（八鳥）
八鳥塚谷横穴群　（八鳥）６基，県史跡
軒塁横穴群　（八鳥）２基
黒岩横穴群　（八鳥）２基
額恩寺山横穴群　（大佐）２基
下段横穴　（大佐）
勝負迫横穴　（大佐）
栃の木谷山横穴　（平子）

②口和町（16基）

下日南横穴　（向泉）
明正寺裏横穴群　（湯木）７基
常定横穴群　（常定）２基，1959年発掘調査実施
峯双横穴群　（常定）６基，1963年発掘調査実施

③旧庄原市（10基）

小和田横穴墓群　（新庄町）３基，2000年発掘調査実施
西山遺跡　（新庄町）２基，2000年発掘調査実施
段田山横穴　（峰田町）
元実横穴墓　（峰田町）
本郷横穴墓　（本郷町）
馬ヶ段遺跡　（水越町）２基，2008年発掘調査実施

④東城町（10基）

保田横穴　（保田）
十文字池横穴　（福代）
比奈横穴　（川西）
横手下横穴群　（帝釈始終）４基，1974年発掘調査実施
福田大仙山横穴群（帝釈山中）２基
帝釈小学校横穴　（帝釈未渡）

※　**高野町，比和町，総領町**では，確認されていない。

２　三次市

①旧三次市（２基）

大坪谷横穴　（西河内町）
大坪谷東横穴　（西河内町）

②三和町（２基）

紺屋皮横穴　（羽出庭）
猟師岩山横穴　（敷名）

③布野町（１基）

石貝横穴墓　（横谷）

④三良坂町（１基）

見尾西遺跡　（灰塚）1992年発掘調査実施

※　**作木町，君田町**では，かつて横穴墓の存在が報告されていたが，広島県教育委員会『広島県遺跡地図Ⅷ（甲奴郡・双三郡）』2002　には記載されていない。

※　**吉舎町，甲奴町**では，確認されていない。

研究発表Ⅱ「ものに託す願い」

調査研究員　山田　繁樹

調査研究員の山田です。今回の「ひろしまの遺跡を語る」のテーマである「古墳時代の暮らしと心」の中の「ものに託す願い」を担当しました。「暮らしとこころ」の「こころ」を担当したわけです。簡単に言えば祭祀のことです。

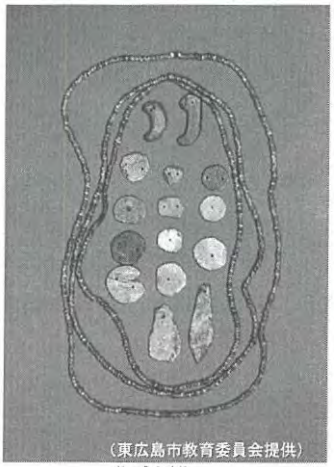
ここで，祭祀とは何かを『広辞苑』でみてみます，「神や祖先をまつること。まつり。祭典。」とありました。また，祭祀遺跡の項を読むと「神を祭った遺跡とみなされるもの。遠くに円錐形の山を望み，あるいは巨石などのあるものがあり，石製模造品・子持勾玉・土馬・土師器など，祭祀関係の遺物が出土する。」とあります。

祭祀といえば，学生時代の２回生の頃，滋賀県での発掘に参加したとき，住居跡の造りつけのカマドの中から須恵器の甑（はそう）が立った状態で出土しました。この甑が焼けていないことから，先輩が何らかの祭祀が行なわれたのだろう，いい経験だから１／５で実測図を書くようにいわれ，四苦八苦した覚えがあります。

１　祭祀遺物の実例

遺跡の発掘調査を行う仕事について20年以上が過ぎましたが，出土する遺物の中にはどう考えても普段，使わないだろう。使うとしても「何」に使うのだろうかと疑問に思う遺物が出土することがあります。例えば，住居跡の中から，有孔円板や，土を捏ねて作った鏡とか勾玉などが出土したことがあります。こういう場合は，何らかの祭祀的行為を行なった道具，或いは行なわれていた場所と記述していました。

【スライド１】石製模造品と土製模造品
（左下は参考の青銅製鏡）



【スライド２】浄福寺（じょうふくじ）遺跡（東広島市）
石製模造品

このような遺物は，石で何かをまねて作ったものを「石製模造品」，粘土を捏ねて作ったものを「土製模造品」と呼んでいます【スライド１】。代表的な遺物を写真でみて見ましょう。

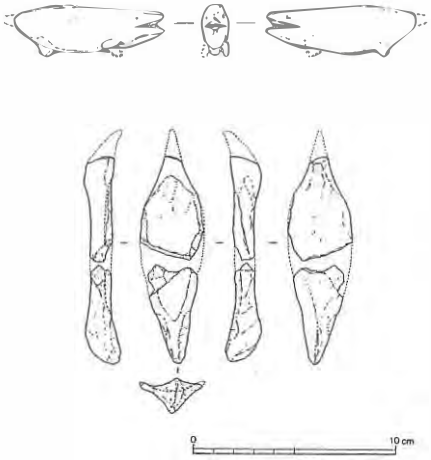
東広島市の浄福寺遺跡から出土した「石製模造品」です【スライド２】。浄福寺遺跡は，現在松賀中学のある尾根上にありました。石製模造品の代表的な遺物が出土しています。

ネックレスみたいに繋げているのは小玉で1050点，真ん中の右下にあるのが「剣」，左がおそらく剣の「未製品」です。上にあるのは，勾玉です。丸くて穴が１・２個開いているのは，有孔円板です。石製模造品は「滑石」

と呼ばれている「加工しやすい軟らかい石」が使われています。実用には不向きということですね。滑石は，中世では「土鍋」として使われています。現在でも身近なところでは「ビビンバ」容器にも使われていたり，最近では炊飯器の鍋にも使われています。

次は，土製模造品をみてみましょう。北広島町の岡の段C地点遺跡から出土した鏡と勾玉の土製品です【スライド３】。岡の段C地点遺跡は現在，浜田道の大朝インターチェンジにあった遺跡です。次は粘土を捏ねてお椀にした手捏ね土器です【スライド４】。宇山遺跡から出土した土製模造品は種類が多く，鏡・勾玉以外にも機織具や短甲なども出土しています【スライド５】。その他に，安芸高田市の新宮遺跡群からは土製模造品ではありませんがアヒルのような鳥形土器【スライド６】や福山市の神辺町大宮遺跡からは馬を模した土製品（27頁第５図）が出土しています。

写真で紹介できなかったのですが，土製模造品は他に，20頁の第１図に示した東広島市御薗宇の古市２号遺跡から出土した船形土製品や広島市安芸区矢野町の岡谷遺跡の動物形土製品もあります。古代の人達が願いを託する「もの」とは，このような石製模造品であり土製模造品だったと考えられます。



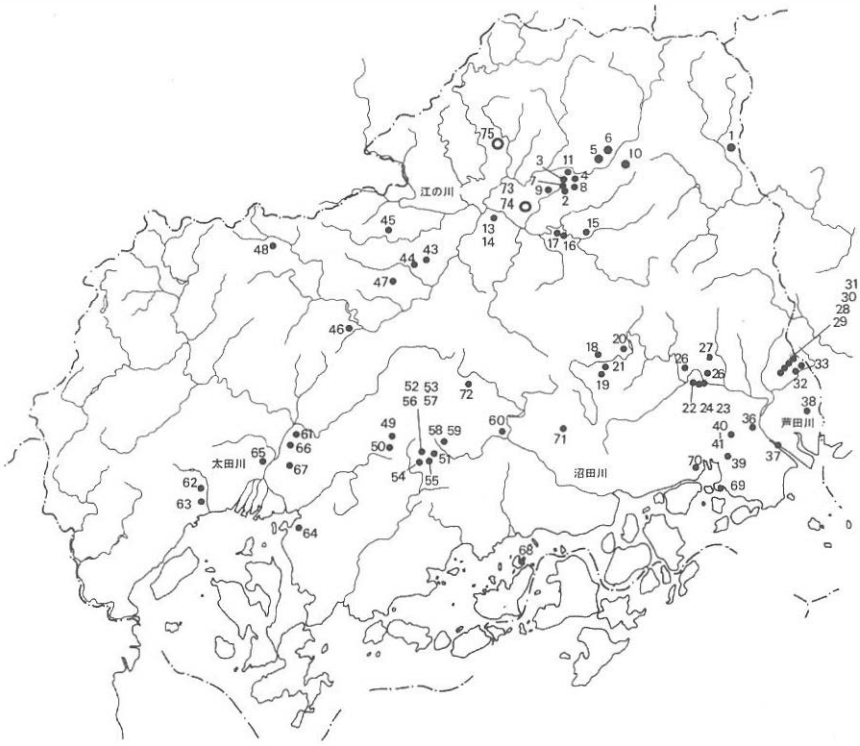
第１図　動物形（上）・船形（下）土製品
【上：岡谷遺跡，下：古市２号遺跡】

【スライド３】岡の段（おかだん）C地点遺跡（北広島町）
土製模造品

【スライド４】岡の段C地点遺跡（北広島町）
須恵器（後方）と手捏ね土器（手前）

【スライド５】宇山（うやま）祭祀遺跡（世羅町）
土製模造品

【スライド６】新宮（しんぐう）遺跡群（安芸高田市）
鳥形土器



第２図　古墳時代の祭祀関連遺物出土遺跡分布図

第１表－１　古墳時代の祭祀関連遺物出土遺跡

番号	桑原1993	遺跡名	所在地1	所在地2	出土遺構	時期	出土遺物	共伴遺物	文献
1	1	川東遺跡	庄原市	東城町川東	竪穴住居跡	中期	手捏ね土器	土師器	1
2	2	熊野遺跡	庄原市	上原町熊野	一括	中期	小型土器	土師器	2
3	3	大成遺跡（1975年度）	庄原市	三日市町大成	竪穴住居跡	中期	土馬１	土師器	3
		大成遺跡（1987年度）	庄原市	三日市町大成	竪穴住居跡	中期	土製模造品（鏡）１，手捏ね土器	土師器・須恵器	4
4	4	小和田遺跡	庄原市	新庄町小和田	土坑	後期	手捏ね土器	甑形土器	5
5	5	境ヶ谷遺跡	庄原市	川西町境ヶ谷	竪穴住居跡	後期	石製模造品（小玉）	土師器・須恵器	6
					段状遺構	後期	土製模造品（勾玉２），手捏ね土器		
6		布掛遺跡	庄原市	川西町布掛	竪穴住居跡	中期	石製模造品（有孔円板１），手捏ね土器	土師器・不明鉄器	7
7		岡山Ａ地点遺跡	庄原市	上原町岡山	竪穴住居跡	前期	土製模造品（丸玉１）	土師器	8
8		則清１号遺跡	庄原市	是松町則清	段状遺構	後期	手捏ね土器	土師器・須恵器	9
9		竜王堂遺跡	庄原市	平和町竜王堂	竪穴住居跡	前期	土製模造品（筒型１，円板状１）	土師器	10
10	6	駅羅比古神社参道付近	庄原市	本村町鍬寄			土馬１		11
11		割谷遺跡	庄原市	掛田町割谷	段状遺構（埋土）	前期？	石製模造品（有孔円板１），手捏ね土器１	土師器	12
12	7	勇免第４号古墳	三次市	大田幸町	古墳	後期	土馬１	土師器	13
13	8	松ヶ迫Ａ地点遺跡	三次市	南畑敷町	竪穴住居跡	後期	土製模造品（管玉１）	土師器	14
					広場？		石製紡錘車１，小型鉄製鋤先１	須恵器	
14	9	松ヶ迫Ｆ地点遺跡	三次市	東酒屋町	テラス状遺構	後期	石製模造品（有孔円板１）	土師器・須恵器・製塩土器	14
15		清替屋遺跡	三次市	三良坂町大谷	祭祀遺構		手捏ね土器２	土師器	15
16		油免遺跡	三次市	三良坂町灰塚	竪穴住居跡	中期	石製模造品（勾玉１，小玉２）	土師器・台石・砥石，鉄器（鎌・鋤先・鉄鏃・釘）	16
					竪穴住居跡	中期	石製模造品（小玉16）	土師器・須恵器	
					竪穴住居跡	中期	石製模造品（小玉２）	土師器・須恵器	
					土坑		石製模造品（小玉１）		
17		土濃遺跡	三次市	三良坂町灰塚	調査区内		石製模造品（勾玉１）		17
18	10	宇山祭祀遺跡	世羅郡	世羅町寺町		後期	土製模造品（人形・動物・鏡・勾玉・丸玉・管玉・短甲・刀杼・綜棒・梭・中筒・坩・鉢）手捏ね土器		18
									19
19	11	東神崎遺跡	世羅郡	世羅町東神崎		後期	子持勾玉１		20
									21
20		近森遺跡	世羅郡	世羅町伊尾	竪穴住居跡	前期	土製模造品（勾玉１）	土師器	22

第１表－２　古墳時代の祭祀関連遺物出土遺跡

21		土居丸遺跡（第１・２次）	世羅郡	世羅町本郷	調査区内		土製模造品（勾玉１）		23
22	12	前原遺跡	府中市	父石町前原		奈良	土馬２		24 25
23	13	長迫遺跡	府中市	土生町瀬戸			土師器		26
24	14	登路茂遺跡	府中市	栗柄町登路茂			子持勾玉１		26 27
25	15	三室山遺跡	府中市	出口町三室山			土師器		26
26	16	備後国府跡（第４次）	府中市	元町	溝		鏡片		28
27	17	宮脇品治神社境内遺跡	福山市	新市町常			手捏ね土器		26
28	18	亀山遺跡（第５・６次）	福山市	神辺町道上	溝		鏡片	土師器・須恵器	29
29	19	宮ケ峠遺跡	福山市	神辺町宮ケ峠	包含層		石製模造品（有孔円板２）		30
30	20	小山池祭祀遺跡	福山市	神辺町西中条	並んで出土	中期～後期	須恵器９		31
31	21	前田遺跡	福山市	神辺町湯田			子持勾玉１		26 27
32	22	大宮遺跡　兼代地区Ⅱ	福山市	神辺町湯野	包含層	後期	土馬１	土師器・須恵器	32
33	23	御領遺跡	福山市	神辺町御領		中期	手捏ね土器	須恵器	33
	23		福山市	神辺町御領	溝	前期	鏡片（獣帯鏡）１	土師器	34
34	23	丹花遺跡	福山市	神辺町上御領			石製模造品（勾玉２）		35
35	23	中島遺跡	福山市	神辺町上御領			石製模造品（有孔円板１）		35
36	24	ザブ遺跡	福山市	津ノ郷町坂部	包含層		土製模造品（鏡）１，手捏ね土器		36
37	25	草戸千軒町遺跡	福山市	草戸町			石製模造品（勾玉１）		37
38	26	春日遺跡	福山市	春日町小松			子持勾玉１		26
39	27	天津磐境平岩神社	福山市	金江町蔵江			土師器		38
40	28	大野ヶ原窯跡	福山市	神村町大野ヶ原			土馬３		26 39
41	29	大野ヶ原遺跡	福山市	神村町大野ヶ原			子持勾玉１		30
42	30	本郷窯跡	福山市	本郷町			土馬１		26
43	31	寸志名遺跡	安芸高田市	高宮町房後	竪穴住居跡	中期	石製模造品（勾玉１）・手捏ね土器	土師器	40
44	32	矢賀迫第２号窯跡周辺	安芸高田市	高宮町原田		飛鳥	土馬１		40
45	33	後谷遺跡	安芸高田市	高宮町後谷		後期	石製模造品（剣１）・手捏ね土器	須恵器	41
46		新宮遺跡群	安芸高田市	八千代町勝田	土坑	後期	鳥形土器		42
47		上里遺跡	安芸高田市	美土里町横田	溝	前期	円板状土製品（鏡？）	土師器	43
48	34	岡の段Ｃ地点遺跡	山県郡	北広島町新庄	祭祀遺構	中期	土製模造品（勾玉28，鏡29，丸玉４，管玉４），石製模造品（小玉２）手捏ね土器180	土師器・須恵器	44
49	35	徳政遺跡	東広島市	八本松町米満	竪穴住居跡	中期	手捏ね土器	土師器・鉄製品	45
50		原１号遺跡	東広島市	八本松町原	竪穴住居跡	前期	土製模造品（勾玉２）	土師器	46
51	36	浄福寺遺跡	東広島市	西条町助実	祭祀遺構	中期～後期	石製模造品（勾玉２，有孔円板13，剣１，未製品，小玉1050），手捏ね土器	土師器・須恵器・鉄鏃	47
52	37	助平２号遺跡	東広島市	西条町下見	包含層		石製模造品（有孔円板２，勾玉）		48
53					祭祀遺構	中期	手捏ね土器	土師器・須恵器	49
54	38	平木池遺跡	東広島市	西条町下見	竪穴住居跡	後期	手捏ね土器	土師器・須恵器	50
55	39	道照遺跡	東広島市	西条町御薗宇	溝		手捏ね土器	土師器・須恵器	51
56	40	古市２号遺跡	東広島市	西条町御薗宇	竪穴住居跡	中期	土製模造品（鏡２，舟形１，管玉２，不明１），手捏ね土器	土師器	52
57	41	助平３号遺跡	東広島市	西条町御薗宇	自然流路	中期	石製模造品（有孔円板６，勾玉１，小玉45），土製模造品（勾玉１），手捏ね土器	土師器・須恵器・鉄鏃・製塩土器	53
58	42	胡麻２号遺跡	東広島市	高屋町杵原	祭祀遺構	中期	石製模造品（剣１，有孔円板５，未製品２），手捏ね土器46以上	土師器	54
59	43	浄福寺２号遺跡	東広島市	高屋町高屋堀	竪穴住居跡	中期	土製模造品（鏡１）	土師器・須恵器	55
60	44	山居遺跡	東広島市	河内町中河内	竪穴住居跡	前期	手捏ね土器		56
61	45	山手Ｂ地点遺跡	広島市	安佐北区高陽町		前期	手捏ね土器		57
62	46	利松遺跡	広島市	佐伯区五日市町			石製模造品（有孔円板１）	須恵器	36
63	47	円明寺（延命寺）遺跡	広島市	佐伯区五日市町			石製模造品（有孔円板２）		58
64		岡谷遺跡	広島市	安芸区矢野町	竪穴住居跡	前期	土製模造品？（四脚獣）	土師器・砥石	59
65		大谷遺跡	広島市	安佐南区祇園町	調査区内		土製模造品（勾玉２）		60
66		大明地遺跡	広島市	安佐北区口田	調査区内		土製模造品（勾玉１）		61
67		畝谷遺跡	広島市	東区上温品	土坑		土製模造品（勾玉１）		62
68	48	榎迫遺跡	豊田郡	大崎上島町東野	包含層		土製模造品（勾玉１，丸玉１）	製塩土器	63
69	49	満越遺跡	尾道市	浦崎町満越	祭祀遺構	前期？	石製模造品（不明１）	土師器	64
					包含層	後期	手捏ね土器	須恵器・製塩土器	
70		天満原遺跡（1996年度）	尾道市	高須町天満原			石製模造品（有孔円板１）		65
71		熊ヶ迫第４号窯跡	三原市	久井町小林	窯跡	古代	陶馬片		66
72		中屋遺跡Ｂ地点	東広島市	豊栄町安宿	竪穴住居跡	前期	土製模造品（舟形１），手捏ね土器	土師器	67
73		和知白鳥遺跡	三次市	和知町白鳥	竪穴住居跡	中期	石製模造品（有孔円板）	土師器・須恵器	68
74		三重１号遺跡	三次市	四拾貫町三重	竪穴住居跡	中期	石製模造品（有孔円板・剣）	土師器・須恵器	69
					竪穴住居跡	中期	石製模造品（皿玉３）	土師器・須恵器	
75		原畑遺跡	庄原市	口和町大月	祭祀遺構？	中期？	石製模造品（円板形・剣）手捏ね土器	土師器・須恵器	70

第２表　古墳時代の祭祀関連遺物出土遺跡文献

番号	掲　載　書　名	発　行　機　関	発行年
1	中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）	広島県教育委員会	1979年
2	向田裕始「庄原市上原町熊野遺跡出土の土師器」『芸備』第2集	芸備友の会	1974年
3	大成遺跡の発掘調査	大成遺跡調査団	1986年
4	大成遺跡	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1989年
5	西山・小和田・永宗	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1982年
6	境ヶ谷遺跡群	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1983年
7	布掛遺跡・大仙１号遺跡・大仙２号遺跡発掘調査報告書	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	2003年
8	岡山Ａ地点遺跡	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1994年
9	則清１・２号遺跡	庄原市教育委員会	1993年
10	竜王堂遺跡	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1994年
11	庄原市の文化財	庄原市文化財保護委員会	1971年
12	割谷遺跡発掘調査報告書	庄原市教育委員会	2002年
13	広島県双三郡三次市資料総覧第５篇	広島県双三郡三次市資料総覧編集委員会	1974年
14	松ヶ迫遺跡群発掘調査報告	広島県教育委員会	1981年
15	灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅴ）	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	2003年
16	灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅳ）	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	2003年
17	灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅶ）	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	2003年
18	向田裕始「出土品にみる県北の古代史」12　『げいびグラフ』32号	菁文社	1983年
19	是光吉基「広島県世羅出土の祭祀遺物」『考古学ジャーナル』５	ニューサイエンス社	1969年
20	波田一夫「子持勾玉の出土」『芸備地方史研究』第24集	芸備地地方史研究会	1958年
21	波田一夫・是光吉基「広島県世羅郡東神崎出土の子持勾玉」『考古学ジャーナル』34	ニューサイエンス社	1969年
22	近森遺跡	（財）広島県教育事業団	2008年
23	土居丸遺跡Ⅰ	世羅町教育委員会	1994年
24	豊元国「土馬」『学校博物館絵はがき』第７	府中高等学校生徒会地歴部	1962年
25	向田裕始「広島県」『瀬戸内海地方祭祀遺跡地名表』1978年	（瀬戸内海歴史民俗資料館）	1978年
26	豊元国「備後祭祀関係遺物発見地名表」「広島県の考古学基本調査・府高学報１」	府中高等学校生徒会地歴部	1954年
27	大場磐雄「子持勾玉私考」『上代文化』第15	上代文化研究会	1937年
28	備後国府跡-推定値にかかる第４次調査	広島県立埋蔵文化財センター	1986年
29	亀山遺跡-５・６次調査発掘概報	広島県立埋蔵文化財センター	1986年
30	広島県埋蔵文化財包含地地名表	広島県教育委員会	1961年
31	小山池廃寺発掘調査概報　第３次	広島県教育委員会	1979年
27	大場磐雄「子持勾玉私考」『上代文化』第15	上代文化研究会	1937年
32	大宮遺跡発掘調査報告書　兼代地区Ⅱ	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1986年
33	神辺御領遺跡	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1981年
34	神辺御領遺跡	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1980年
35	国成古墳	神辺町教育委員会	1965年
36	山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告	広島県教育委員会	1973年
37	小都隆「草戸千軒町遺跡第21次調査区出土の勾玉模造品」『草戸千軒』70	草戸千軒町遺跡調査研究所	1979年
38	村上正名「福山市埋蔵文化財地名表其の２－松永地区－」『福山市遺跡調査総合記録集』	福山市文化財協会	1973年
39	大場磐雄「上代馬形遺物に就いて」『考古学雑誌』第27巻第４号	日本考古学会	1937年
40	中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）	広島県教育委員会	1979年
41	向田裕始「高田郡高宮町後谷遺跡出土の祭祀遺物」『芸備』第２集	芸備友の会	1974年
42	新宮遺跡群発掘調査報告書	八千代町教育委員会	2000年
43	上里遺跡・央垣内城跡発掘調査概報	上里遺跡・央垣内城跡発掘調査団	1979年
44	中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅳ）	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1994年
45	徳政遺跡発掘調査報告書	東広島市教育委員会	1982年
46	原１号遺跡発掘調査報告書	東広島市教育委員会	1994年
47	浄福寺遺跡発掘調査報告書	東広島市教育委員会	1984年
48	西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅰ）	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1983年
49	西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅱ）	東広島市教育委員会	1993年
50	平木池遺跡発掘調査報告	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1982年
51	道照遺跡	広島県教育委員会	1982年
52	西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）	東広島市教育委員会	1992年
53	西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅱ）	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1993年
54	東広島ニュータウン遺跡群Ⅰ（本文編・図版編）	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1990年
55	東広島ニュータウン遺跡群Ⅱ（本文編・図版編）	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1993年
56	山居遺跡	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1991年
57	高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告	広島県教育委員会	1977年
58	円明寺（延命寺）遺跡発掘調査報告	広島県教育委員会	1971年
59	岡谷遺跡・狐が城古墳発掘調査報告	広島市教育委員会	1985年
60	広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告	広島市教育委員会	1984年
61	山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅳ）	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1987年
62	広島県文化財調査報告第14集	広島県教育委員会	1983年
63	柴村敬次郎「島嶼部の埋蔵文化財を調査して－呉・安芸・豊田の島々について－」『広島県文化財ニュース』第10号	広島県文化財協会	1961年
64	満越遺跡-製塩遺跡発掘調査概要	尾道市教育委員会	1983年
65	天満原遺跡Ⅱ	尾道文化財協会	1997年
66	県営かんがい排水事業（三河地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告（２）	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	2002年
67	中屋遺跡Ｂ地点発掘調査報告Ⅱ	（財）広島県埋蔵文化財調査センター	1999年
68	和知白鳥遺跡見学会資料	財団法人広島県教育事業団・三次市教育委員会	2006年
69	三瓶１号遺跡見学会資料	財団法人広島県教育事業団・三次市教育委員会	2009年
70	番久遺跡・原畑遺跡見学会資料	財団法人広島県教育事業団・庄原市教育委員会	2008年

2　分布状況

さて，今日の発表は，先ほど紹介したような，祭祀関係の遺跡・遺物の集成を行い，その中から，何が見えてくるかを探ってみたいと思います。

21～22頁の第１表は桑原隆博さんが1993年に，第２回東日本埋蔵文化財研究会で開催された「古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物」テーマの研究会で「広島県における古墳時代の祭祀」と題して発表された時の資料に，その後に出土した資料が報告されているものを追加したものです。表の左側の項目に桑原1993とあるのは，この時に使われた番号です。この表は，広島県備後北部から東部，芸北地域から南部の順に集成してあります。ただ，表72～74番は，作成後に追加したので各地域のグループに入っていません。基本的に古墳からの出土例を除いて，集落遺跡からの出土に限定しています。また，時期については前期を４世紀代，中期を５世紀代，後期６世紀代としています。

今回は桑原1993集成表の番号を生かして，1993年以降の遺跡を桑原1993集成表番号の間に追加した状況になっているので，どの地域で増えたのかがお分かりかと思います。

古墳時代の石製模造品・土製模造品が出土した遺跡は1993年の49遺跡から26遺跡増えて75遺跡になっています。21頁の第２図の分布図をご覧下さい。73・74・75番は未報告なので○で示しています。次に先ほど紹介した，石製模造品や土製模造品が出土した遺跡を広島県内の図に落としたのが第２図の分布状況になります。この図の番号は，表の番号になります。

県北の江の川流域，東部の芦田川流域，南部中央沼田川流域，西部の太田川流域に黒い点が集中しています。この状況は弥生時代の遺跡や古墳時代の遺跡の分布とも当然重なっています。現在までに，発掘調査が行われた遺跡は，かなりの数になると思われますが，調査した全ての遺跡から出土していることでは無く，75遺跡という限定された遺跡から出土していることがわかります。

3　石製模造品の出土遺跡と時期，分布の傾向

次に21～22頁の第１表をもとに製品別に，様子をみてみたいと思います。

石製模造品が出土した遺跡は24遺跡（土製模造品と共伴出土している遺跡を含む）あります。石製模造品のうち，有孔円板が最も多く14遺跡から出土しています。ほとんどの遺跡は，１点ないし２点の出土ですが，先ほど紹介した表51の東広島市浄福寺遺跡からは，県内で最多の13点出土し，他に勾玉が２点，剣１点，未製品，小玉1050点と手捏ね土器が出土しています。同じ表57の東広島市助平３号遺跡からは，有孔円板６点，勾玉１点，小玉45点が出土しています。

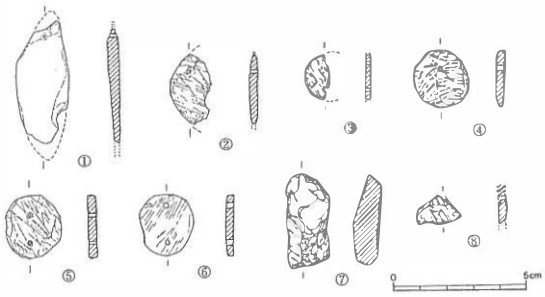
時期がわかっている遺跡を古い順にみてみましょう。その前に表の時期の項目で，前期？と時期の後に？とあるのは，報告では時期が示されているのですが明確でないものを示しています。ですから，時期の項目で？と空欄は除いた数値となります。

中期は表６番の布掛遺跡，表57番の助平３号遺跡，表58番の胡麻２号遺跡・表73番の和知白鳥遺跡と74番の三重遺跡の５遺跡です。胡麻２号遺跡の石製模造品は25頁の第３図で紹介してあります。１番が剣・２番から６が有孔円板で，７・８は未製品です。

中～後期は表51番の浄福寺遺跡，後期は表14番の松ケ迫Ｆ地点遺跡の２遺跡となっています。このように有孔円板は，中期に多く確認されて，後期に入ると減少している傾向がうかがえます。

次いで石製模造品で出土量が多いのは勾玉で８遺跡から出土しています。勾玉も有孔円板と

同様に各遺跡とも１点ないし２点が出土しています。時期は，中期が表16番の油免遺跡，表43番の寸志名遺跡，表57番の助平３号遺跡の３遺跡となっています。中～後期は表51番の浄福寺遺跡の１遺跡です。勾玉も有孔円板と時期的に同じように後期に入って減少している傾向が見いだせます。次の３遺跡，浄福寺遺跡と助平３号遺跡，時期不明ですが表52番の助平２号遺跡は有孔円板と勾玉が一緒に出土しています。



第３図　胡麻２号遺跡の石製品

三番目には６遺跡から出土した小玉（臼玉）があげられます。先にあげた浄福寺遺跡・助平３号遺跡以外に，表48番の岡の段Ｃ地点遺跡からは，大量の土製模造品とともに小玉が２点出土しています。また，表16番の油免遺跡からは，３軒の住居跡と土坑内から出土し，内１軒の住居跡から16点出土しています。

時期をみると中期が表16番の油免遺跡・表48番岡の段Ｃ地点遺跡・表57番助平３号遺跡・表74番三重１号遺跡の４遺跡で，中～後期は浄福寺遺跡で1050点出土しています。後期は表５番の境ヶ谷遺跡となっています。

次は剣で４遺跡から出土しています。時期は中期の表74番三重遺跡，中～後期は表51番浄福寺遺跡・表58番の胡麻２号遺跡，後期の表45番の後谷遺跡の４遺跡です。中期の可能性のある表75番の原畑遺跡を加えると５遺跡となります。剣そのものの出土が少ないので時期的な傾向はよくわかりません。

ここで，よく遺跡名が上がった浄福寺遺跡・胡麻２号遺跡は，出土遺構の項目を見ていただくと祭祀遺構となっています。納得の感じがします。

他の石製模造品で子持勾玉は古墳の副葬品からの出土例が多いイメージですが，意外に少なく大久保古墳の１点のみで，遺跡からの例が多く５遺跡から出土しています。出土した遺構は不明で東神崎遺跡（世羅郡世羅町）の後期以外は，時期は不明となっています。

もう一度，石製模造品が出土した遺跡の分布状況を時期的にみると，前期では，「？」がついているので参考例なのですが，備北で１遺跡，表11番の割谷遺跡「有孔円板」，備南にあたる表69番の尾道市の満越遺跡「不明品」の２遺跡です。

中期は８遺跡あり，そのうち５遺跡が備北で，表６番の布掛遺跡「有孔円板」・表16番の油免遺跡「勾玉・小玉」，表73番の和知白鳥遺跡「有孔円板」，表74番の三重１号遺跡「臼玉・剣」です。芸北と芸南から各２遺跡から出土しており，表43番の寸志名遺跡「勾玉」，表48番岡の段Ｃ地点遺跡「小玉」，表57番助平３号遺跡で「有孔円板・勾玉・小玉」，表58番胡麻２号遺跡「有孔円板・剣」の４遺跡となっています。中～後期は芸南の表51番浄福寺遺跡「有孔円板・勾玉・剣・小玉」です。後期は３遺跡で備北の表５番境ヶ谷遺跡「小玉」，表14番の松ケ迫Ｆ地点遺跡「有孔円板」，芸北では表45番の後谷遺跡（剣）です。

石製模造品が出土しながら時期不明は９遺跡あります。ほとんどが有孔円板や勾玉の単独出土ですが，助平２号遺跡で有孔円板と勾玉が出土しています。

こうしてみると，石製模造品は有孔円板と勾玉が出土例の中心で，中期を最盛期としているようです。地域としては，備北・芸北・芸南が中心となっているようですが，しかし，時期不明の遺跡のうち５遺跡が備南地域となっているので，ほぼ全域に分布しているようです。

4　土製模造品の出土遺跡と時期，分布の傾向

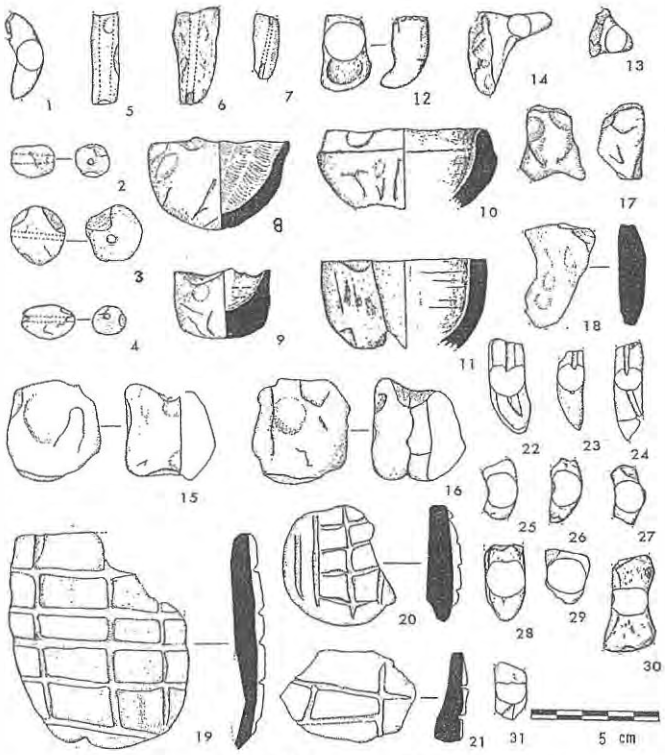
次に土製模造品をみてみましょう。土製模造品が出土した遺跡は29遺跡（石製模造品と共伴している遺跡と土馬・鳥形を含む）あります。土製模造品のうち勾玉が10遺跡から出土して，最も多いのですが，各遺跡とも１点ないし２点出土しているなかで，表48番の岡の段Ｃ地点遺跡からは28点出土しているのが特筆されます。時期が明確な遺跡で前期は，表20番の近森遺跡，表50番の原１号遺跡，中期は表48番の岡の段Ｃ地点遺跡，表52番の助平３号遺跡があります。後期は表５番の庄原市境ヶ谷遺跡，表18番の世羅町の宇山遺跡があります。前・中・後期とも各２遺跡となっています。

鏡は７遺跡から出土しており，勾玉の出土と同様に各遺跡から１点，あるいは２点程度の出土点数ですが，勾玉と同様に表48番の岡の段Ｃ地点遺跡からの29点が突出しています。時期は明確なもので前期が表47の上里遺跡（鏡ではないかもしれない），中期は表３番の大成遺跡，岡の段Ｃ地点遺跡，表56番古市２号遺跡，表59番の浄福寺２号遺跡，後期は表18番の宇山遺跡となっています。宇山遺跡は最初に写真【スライド５】でご覧頂いたように色々な土製品が100点以上出土しています。26頁の第４図はその一部を載せています。

土製模造品として出土の少ない20頁の第１図の舟形は，表72番の中屋遺跡Ｂ地点遺跡が前期，表56番の古市２号遺跡は中期となっています。

次に厳密な意味で祭祀遺物かどうか判断が難しいのですが，手捏ね土器は大半が他の遺物と同一に出土する例が多く28遺跡から出土しています。時期は前期３遺跡，中期11遺跡，中期～後期１遺跡，後期７遺跡で，手捏ね土器のみが出土した遺跡が12遺跡あります。

土製模造品が出土した遺跡の分布状況を，時期的にみると前期は７遺跡あり備北２：備南１：芸北１：芸南３で，中期は５遺跡で備北１：芸北１：芸南３，後期は３遺跡で備北２：備南１，時期不明は６遺跡で備南２：芸南４となっています。



第４図　宇山祭祀遺跡の土製品

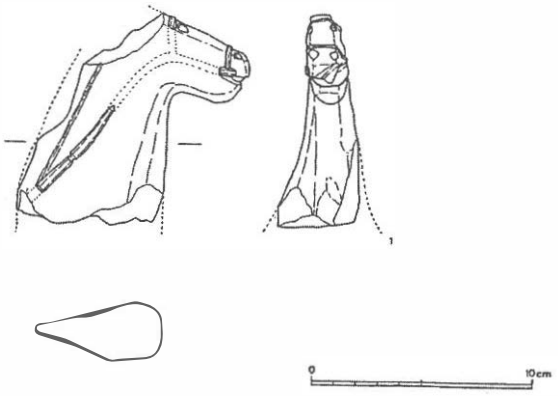
土製模造品は石製模造品と違い，前期から徐々に遺跡数が減少している傾向がみられるようです。勾玉は前・中・後期とも出土しているのですが，鏡は中期から出現しているようです。

地域性としては，備南地域が時期不明の遺跡を含め４遺跡しかなく，土製模造品の出土が少ない傾向があると思われます。

土製模造品の内，27頁の第５図の土馬は古墳時代後期（２遺跡）以降の時代に多く出土している模造品です。県内で出土した12点の内８点が備南地域からの出土であることと，石製模造品や土製模造品以外に鏡片が備後国府跡・亀山遺跡・神辺御領遺跡（獣帯鏡）から各１点づつ溝内

から出土していることに，何らかの関連をみることができるかもしれないと思います。

それでは，今まで述べた石製模造品や土製模造品が出土した遺跡の時期をみると，前期は10遺跡で土製品のみの出土。中期は18遺跡，中～後期２遺跡，後期13遺跡で，中期・中～後期が最盛期で後期を過ぎると次第に少なくなっていると言えると思います。なかでも，石製模造品は有孔円板，土製模造品は勾玉が「何かを願う」時の中心の遺物になっていたと現在は考えています。



第５図　大宮遺跡兼代地区の土馬

５　出土遺物からみた祭祀の内容

最後に，古墳時代の人々は石製模造品や土製模造品をもちいて「何」を願ったのでしょうか。

このことをここで具体的に述べることは難しい話なのですが，これらの模造品が出土した遺構の内容は，竪穴住居跡内が20遺跡，段状遺構（テラス状遺構を含みます）が４遺跡，溝が５遺跡，包含層（調査区内）が11遺跡，自然流路と土坑内が１遺跡となっています。住居内からの出土例が圧倒的に多いようです。古墳という特定の場所から出土したものとは違い，出土した場所によって「何かを願う」行為に違いがみられる可能性はあると思われます。

ここで可能性のひとつとして，三次市の和知白鳥遺跡（表73番）の例をあげてみます。遺跡は古墳時代中期後半から後期の中頃にかけての集落跡で，竪穴住居跡48軒・掘立柱建物跡４棟・土坑33基・溝８条がみつかっています。一番古い住居の床面の貼床から有孔円板が出土しています。この住居跡からは，須恵器・土師器以外に製塩土器が出土しています。その他，全体の住居跡の約１／４にあたる12軒からも製塩土器が出土しています。この和知白鳥遺跡の谷の反対の丘陵（北東側）で中国自動車道の建設に伴って上四拾貫古墳群が調査されています。古墳が築造された時期が和知白鳥遺跡と重複していることから，この古墳群は和知白鳥遺跡に住んだ人たちの墓ではないかと考えています。古墳群の報告書では墳丘内から鉄滓が出土しているので，鉄の生産に関わりのある人々の墓の可能性が述べられています。和知白鳥遺跡に住んでいた人たちが鉄生産に係りのある人たちの集落であるとするなら，製塩土器の出土も補強の材料となると思います。このことから，技術をもつ集団（鉄生産）が丘陵を開墾後，住み始めの儀式で有孔円板を使用したのでは…，と今は考えています。

また，有孔円板は「鏡」を模したという説もあります。遺跡内から土製模造品の鏡が出土している例として，庄原市の大成遺跡（表３番）は，中期を中心とする集落跡で集落の性格を鉄器生産の最終段階である「研ぎ」を行っていた工房跡と考えられています。ここでも，「鏡」…有孔円板を使った「何か」が行われた可能性が考えられます。

一例しか述べられませんでしたが，石製模造品や土製模造品であっても，墓の副葬品である鏡や勾玉・剣というのは，当時の人にとって重要な道具であったと思われます。

6　遺跡の立地からみた祭祀の内容

報告書で祭祀遺跡或いは遺構とされているのは表15番の清替屋遺跡，表48番の岡の段Ｃ地点遺跡，表51番の浄福寺遺跡，表53番の助平２号遺跡，表58番の胡麻２号遺跡，表69番の満越遺跡の６遺跡です。祭祀の内容が述べられている遺跡のうち，岡の段Ｃ地点遺跡は土製模造品が中心で，遺物の出土量とその内容から大規模（広範囲）な農耕祭祀・集落の開村にかかわる祭祀的なものを想定されています。

浄福寺遺跡は石製模造品が中心で，周辺が見渡せる丘陵上に立地していることから，農耕儀礼にかかわるものと推測したうえで，場所自体が信仰の対象地，祭りの場所ではないか，または，祭祀に使用した遺物の廃棄場を想定されています。

胡麻２号遺跡は石製模造品に手捏ね土器46点以上が出土しています。谷の反対側にある礫群を含めた祭祀の場・谷部にある道に面していることから，交通路上の地境にかかわる祭祀を想定されていいます。

また，表18番の宇山祭祀遺跡は世羅郡世羅町にあり，最初に写真【スライド５】や26頁の第４図で紹介しているように約100点の土製模造品が道路の工事中に発見・採集されています。遺跡が谷頭に立地していることから，峠の祭祀が考えられています。

ここで，岡の段Ｃ地点遺跡と胡麻２号遺跡を写真で，立地状況と出土状況をみてみましょう。

まず，岡の段Ｃ地点遺跡の空中写真です【スライド７】。このように周辺を山に囲まれて，谷に面している状況がおわかりになると思います。次の写真は，みつかった遺跡の全景を上から撮っています【スライド８】。丸い囲みが今回紹介した祭祀遺構です。岡の段Ｃ地点遺跡は弥生時代前期から古代にわたって断続的営まれた遺跡で，弥生時代前期は主に墓域，後期は集落として使用され，古墳時代も集落として再び使用され始めています。祭祀遺構は古墳時代の一番古い時期にあたり，矢印の３軒の住居跡と同時期になります。集落の端にあたり丘陵の先端に立地している状況がお解かりかと思います。次は，遺物の出土状況の写真です【スライド９】。次は手捏ね土器が入子の状況で，一箇所に集中している様子がわかります【スライド10】。

【スライド７】岡の段Ｃ地点遺跡（北広島町）
空中写真

【スライド８】岡の段Ｃ地点遺跡（北広島町）
空中写真

続いて胡麻２号遺跡の写真です【スライド11】。遺物は３箇所に分かれて出土しています。出土地点は谷の道沿いの斜面に沿っています。反対側はこのように礫が露頭しています【スライド12】。

最後になりましたが，このように，祭祀遺跡の場合は立地が祭祀的行為を考える上

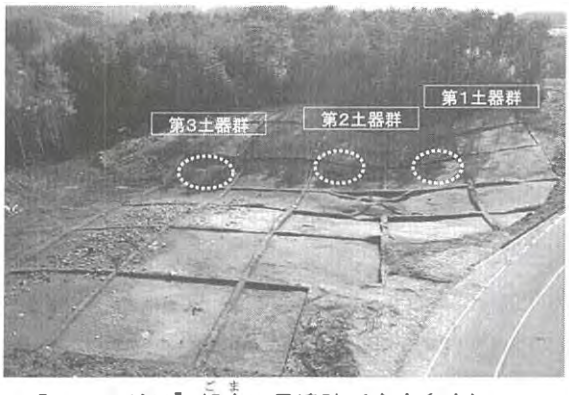
で重要な要素となっているようです。「もの」に「何」を託して「何を」願ったのかについては，具体的にはわかりませんが，この行為をおこなうことによって，村人の結束につながった。境界を示す。神聖な場所。安全を願うといったことが思い浮かびます。

以上で私の発表を終わります。ありがとうございました。

（掲載の図は第２表の文献から転載しました。）

【スライド９】岡の段Ｃ地点遺跡（北広島町）
遺物出土状況

【スライド10】岡の段Ｃ地点遺跡（北広島町）
手捏ね土器出土状況

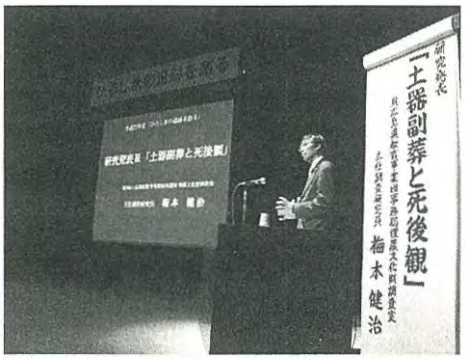


【スライド11】胡麻（ごま）２号遺跡（東広島市）
全景写真

【スライド12】胡麻２号遺跡（東広島市）
自然石の露頭

研究発表Ⅲ「土器副葬と死後観」

主任調査研究員　梅本　健治



こんにちは，埋蔵文化財調査室の梅本です。よろしくお願いします。これから，古墳時代の墓に土器を納めるということが当時の人々のどのような死後観を反映しているのか，ということについて，すこし掘り下げて考えてみようと思います。なお，「死後観」という言葉は耳慣れない言葉で，ふつうには「死生観」あるいは「他界観」といった言葉が使われると思います。これらの言葉を辞書で調べてみますと，「死生観」とは「死」を通して「生」を考えるということで，「人生観」と似た意味合いに用いられることが多く，「他界観」とは「他界」つまり「死後の世界」についてどう考えるかということで，死後の世界の存在を前提にして使われるようです。古代の日本人が，死後の世界が存在すると考えたかどうかが私の話の要点ですので，ここでは死後の世界の存否を含めて死後のことに関する人間の思いを表す言葉として，「死後観」という言葉を使わせていただこうかと思います。

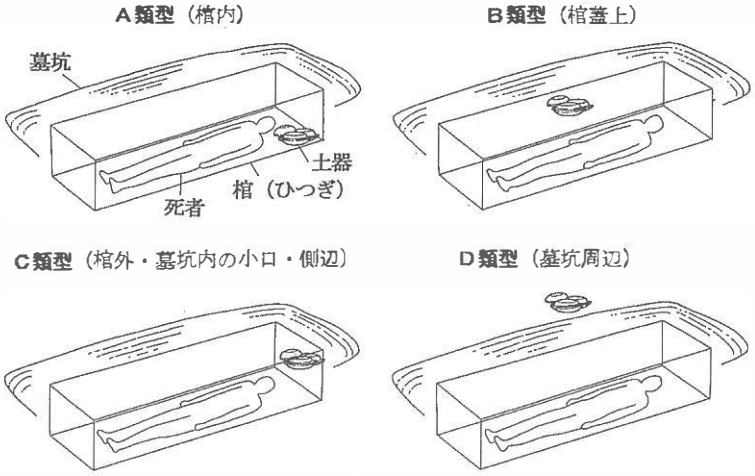
1　古代日本人の死後観

ところで，現在の私たちの多くは，死後の世界，つまり「あの世」のことについては認識していると思います。極楽，地獄，輪廻転生，いずれも「死後の世界」の存在を前提としていますが，これらはいずれも仏教思想に基づくものです。仏教が日本に公的に伝わったのは６世紀半ばと言われていますが，当時の仏教を講じる寺院は天皇や貴族など一部の上流階級の人々に独占された学問研究機関として，今で言えば一種の大学のような存在で，宗教としてその思想が多くの日本人に根付くのは，平安時代の終わりから鎌倉時代にかけて以降だと言われています。では，このような仏教的な死後観に色づけされる以前の古代の日本人は，人間の死や死後に人はどうなるのかといったことについて，どう考えていたのでしょうか。

結論から先に言いますと，日本人は死を肉体から魂が抜け出ることと捉え，その魂は深い山の奥などこの世の一隅に留まると考えました。人が死ぬとしばらくはその死という現実を受け止めることが出来ず，ひたすら死者の再生を願い，遺骸の腐乱が始まることでようやく「死」という厳然たる事実を受け止めることになります。認めるや否や，今度は魂の抜け出た肉体すなわち遺骸を放置したりしたようです。その様子は，例えば「餓鬼草紙」という古代の絵巻物の墓地の場面に，放置された遺骸を獣などが食い散らかす凄惨な情景として描かれています。古代においては，天皇や貴族・高僧など権力者や高位の人々を除いて，一般には死んでも墓に葬られることは稀で，例えば京都では右京の「賽の河原」に死体は放置されたと記録されています。古来，日本人は精神性が強く，霊魂を重視し，肉体（遺骸）を軽視する傾向が強かったがために，一般的には薄葬が奨励され，祖先祭祀もそれほど厚くは行いませんでした。日本の現代社会において自然葬や直葬が増えてきている根底には，このような日本人古来の死に対する考えがあり，それへの一種の回帰といえるかも知れません。

2　土器副葬と死後観

古代の日本人にとって，死後は「闇（やみ）」，すなわち「黄泉（よみ）」に他ならず，この世と別の世界（「死後の世界」）が存在するとは想像さえできないことでした。このことは，古代の人々が死者を葬るとき，死後の世界に死者が赴くための何らの準備も施した形跡が墓の中にみられないことからも窺えます。つまり，死者が死後の世界で暮らすための器などの道具が，古墳時代前期（４世紀）以前の墓にはほとんど納められていないのです。



第１図　土器副葬状況模式図

わが国で棺に土器を副葬する例は，５世紀以降に現れるようになります。奈良県の後出（うしろで）古墳群や野山古墳群などの畿内地域の古墳で，５世紀半ば頃のものです。ここで31頁の第１図をみていただきたいと思います。土器の副葬状況の類型を少しでも分かりやすくと思い，模式図で表してみました。土器を棺近くに副葬するあり方としては，この模式図のように，Ａ～Ｄ類型の大きく４通りあります。Ａ類型が棺内，Ｂ～Ｄ類型はいずれも棺外の近くに器を置くもので，Ｂ類型は棺の直上（蓋上），Ｃ類型は棺と墓坑の間（側辺や小口部分），Ｄ類型は墓坑の周辺にそれぞれ器を置くものです。なかでも，棺内の死者に副わせるように土器を置くＡ類型のあり方が最も積極的に死後の世界の存在を容認した表れだと考えます。

広島県では，この畿内地域の例に半世紀から１世紀ほど遅れた６世紀前半～中葉頃にようやく古墳の竪穴系の埋葬施設に土器を副葬する例がみられます。墓に副葬する土器としては，深い皿に似た「杯」の蓋と身のセットが多いようです。ここで32頁の第１表と31頁の第２図をご覧になってください。このような古墳の竪穴系の墓に土器を副葬する例は，三次市・庄原市・広島市など５市２町で20例がみつかっています。棺内に器を副葬するＡ類型は明確な例がなく，棺外の近辺に副葬するＢ・Ｃ・Ｄ類型がほとんどです。

第２図　広島県内の主な須恵器副葬古墳分布図

なお，県内例の土器副葬の埋葬施設では，須恵器以外の副葬品はあまりみられないのですが，刀子が20例中７例の

墓からみつかっています。これらの刀子は武器というよりは工具・文房具的な性格で，多くが棺内から出土しています。また，刀子は鉄鏃を始めとする武器類や鎌・鋤（鍬）・斧・鉋といった農工具類及び玉類を伴う傾向がややみられるようです。

第１表　広島県内の主な須恵器副葬古墳（横穴式石室古墳は除く）

No.	所在地	古墳名	古墳名（よみ）	時期	埋葬施設 内容	埋葬施設 名称	出土須恵器 類型*	出土位置	器種・数 杯蓋	器種・数 杯身	器種・数 その他
1	三次市	大番奥池第２号古墳	おおばんおくいけ	６世紀前半	土坑（木棺）	ＳＫ２	B	棺蓋上（中央）		1	
							C	棺外＝墓坑上層（側辺・小口）	1	2	
2	三次市	大番奥池第３号古墳	おおばんおくいけ		土坑（木棺）	ＳＫ１	B	棺蓋上（中央）	1	1	
					土坑（木棺）	ＳＫ２	B	棺蓋上（中央）	1	1	
3	三次市	燎東古墳	かがりひがし	６世紀前半	土坑（木棺）	ＳＫ２	D	墓坑上面（小口）	1	3	
4	三次市	寺津第１号古墳	てらつ	６世紀中葉	土坑（木棺）		C	棺外＝墓坑底面（小口）	2	2	
							D	墓坑上面（側辺）	1	1	
5	三次市	寺津第２号古墳	てらつ	６世紀前葉	土坑（木棺）		C	棺外＝墓坑底面（側辺）	2	2	高杯蓋１
								棺外＝墓坑中層（小口）			高杯２・はそう１
6	三次市	大坂第６号古墳	だいさか	６世紀中葉	土坑（木棺）	第２主体部	C	棺外＝墓坑底面（両小口）	7	7	坩蓋１・坩１・提瓶１
7	三次市	植松第１号古墳	うえまつ	６世紀前半	土坑	Ｂ主体	C	土坑底面（小口）	1	1	はそう１
8	庄原市	一の谷第６号古墳	いちのたに	６世紀中葉	土坑（木棺）		A？	墓坑底面付近（中央）	1	1	
9	庄原市	犬塚第３号古墳	いぬづか	６世紀中葉	石蓋土坑		B	小口蓋石横（上段墓坑内）	1	1	
10	庄原市	犬塚第４号古墳	いぬづか	６世紀中葉	土坑		C	坑内底面（側壁際中央）	1	1	
11	庄原市	川東大仙山第11号古墳	かわひがしだいせんやま	６世紀前半	土坑		B	被覆粘土内	1	1	
12	福山市	吹越第２号古墳	ふきごし	６世紀前半	土坑（木棺）		D	棺外＝墓坑上面（西小口）	4	1	
								棺外＝墓坑上面（北側辺東端）	1	1	高杯１
13	安芸高田市	向井古墳	むかい	６世紀前半	箱式石棺		Bか	石室埋土面上か	3	2	
14	安芸高田市	宮谷古墳	みやのたに	６世紀中葉	箱式石棺		B	蓋石横（北小口東側壁上面）		2	椀１
15	北広島町	古保利第44号古墳	こぼり	６世紀初頭	箱式石棺		D	石室外＝掘方上面（西小口）	9	9	高杯１・坩蓋１・坩１・はそう１
16	広島市	池の内第３号古墳	いけのうち	４世紀末～５世紀初	竪穴式石室（割竹形木棺）	Ａ主体	B	主体部上面10cm			把手付短頸壺（加耶系陶質土器）１
17	広島市	諸木古墳	もろき	５世紀中葉	土坑（木槨）	第１主体部	B	掘方上面（木槨蓋上か）			はそう１
18	広島市	弘住第４号古墳	こうずみ	６世紀前半	箱式石棺		B	棺外＝蓋石下・側石上面	1		
19	海田町	上安井古墳	かみやすい	６世紀前半	土坑（木棺）	埋葬施設３	B	棺上（小口）	2	1	

＊「類型」の凡例；棺内Ａ，棺外（棺上面）Ｂ，棺外（側辺～小口裏込め部分，墓坑内）Ｃ，墓坑周辺Ｄ。

（スライド映写）

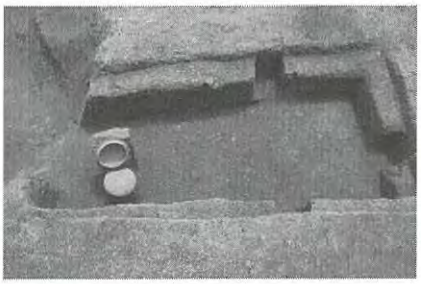
（スライド映写の説明）

ここで，広島県の土器副葬の例のスライドを９枚見ていただこうと思います。先ず，広島県内の例で唯一，棺の中に須恵器が置かれていた可能性のある，庄原市・一の谷第６号古墳の例です【スライド１】。木棺を直接墓坑に納めた木棺墓の可能性のある埋葬施設のほぼ中央から須恵器の杯蓋と杯身のセットが出ています。元々は棺の蓋の上に置かれていたものが，棺の腐朽に伴って棺内に落ち込んだもので，本来Ｂ類型であると考えられます。時期は６世紀半ばです。

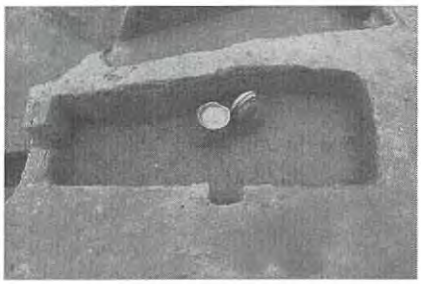
次からの３枚は三次市吉舎町の大番奥池第２・３号古墳の例です。いずれも６世紀前半の木棺墓です。まず第２号古墳のＳＫ２は棺

【スライド１】一の谷（いちのたに）第６号古墳（庄原市市町）
木棺墓

【スライド２】大番奥池（おおばんおくいけ）第２号古墳（三次市吉舎町）
ＳＫ２　木棺墓



【スライド３】大番奥池第３号古墳（三次市吉舎町）
ＳＫ１　木棺墓



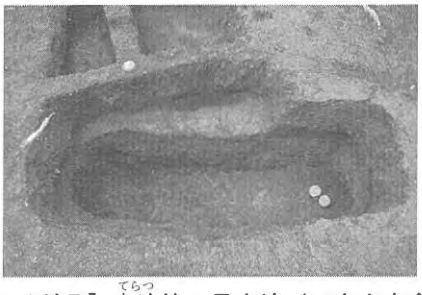
【スライド４】大番奥池第３号古墳（三次市吉舎町）
ＳＫ２　木棺墓

【スライド５】犬塚（いぬづか）第３号古墳（庄原市東城町）
石蓋土坑

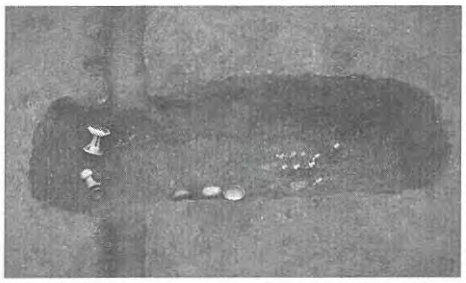
【スライド６】犬塚第４号古墳（庄原市東城町）
土坑

の蓋の上に杯身を，小口部分の棺と墓坑の間の上層には杯身を各１点，頭の右横の側辺の位置には杯蓋をそれぞれ置いています。Ｂ類型の棺蓋上の杯身は割れた状態ですが，あとの小口と側辺の棺と墓坑の隙間に入れ込まれた杯蓋・杯身はいずれも口縁を棺の方向に向けて横に立てた状態でみつかっています【スライド２】。次の２枚は第３号古墳のＳＫ１・２で，いずれも棺蓋上に杯蓋と杯身のセットを置いたＢ類型の例です【スライド３・４】。

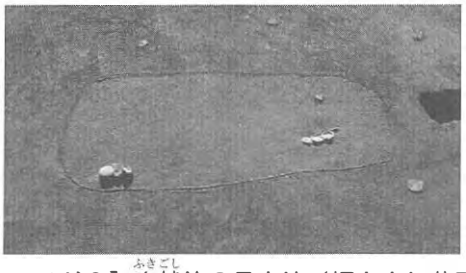
次の２枚は庄原市東城町の犬塚古墳群の例で，最初は第３号古墳の石蓋土坑で，小口側の蓋石の横に杯蓋・杯身のセットを置いたもので，Ｂ類型です【スライド５】。次の第４号古墳は，土坑の側壁際中央の底面に杯蓋・杯身のセットを置いており，Ｃ類型です【スラ



【スライド７】寺津（てらつ）第１号古墳（三次市吉舎町）
木棺墓



【スライド８】寺津第２号古墳（三次市吉舎町）
木棺墓



【スライド９】吹越（ふきごし）第２号古墳（福山市加茂町）
木棺墓

イド６】。これらはいずれも６世紀中葉のものと考えられています。

次の２枚の写真は，三次市吉舎町の寺津古墳群のもので，最初は第１号古墳の木棺墓で，２か所から須恵器が出土しました。墓坑の西側辺上面には杯蓋・杯身のセットでＤ類型，墓坑北小口の底面には杯蓋・杯身２セット（Ｃ類型）が置かれていました。この木棺墓は６世紀中葉のものと考えられています【スライド７】。もう１枚は第２号古墳の木棺墓で，棺外の墓坑西小口（足側）の中層に高杯２点・はそう１点を，南側辺中央の底面には杯蓋・杯身２セットと高杯の蓋の計５点の須恵器が入れ込まれていました【スライド８】。これらはいずれもＣ類型です。側辺中央の５点はいずれも横に立てており，その出土状況が先にみました大番奥池第２号古墳ＳＫ２の例に似ています。この木棺墓の時期は６世紀前葉です。

最後の写真は福山市・吹越第２号古墳の木棺墓で，６世紀前半です。２段掘りの墓坑の上面の２か所でＤ類型の須恵器が出土しています【スライド９】。頭位側の西小口付近に杯蓋４点・杯身１点，足部側の北側辺では杯蓋・杯身のセットと高杯がみつかっています。

３　黄泉国思想の受容の背景

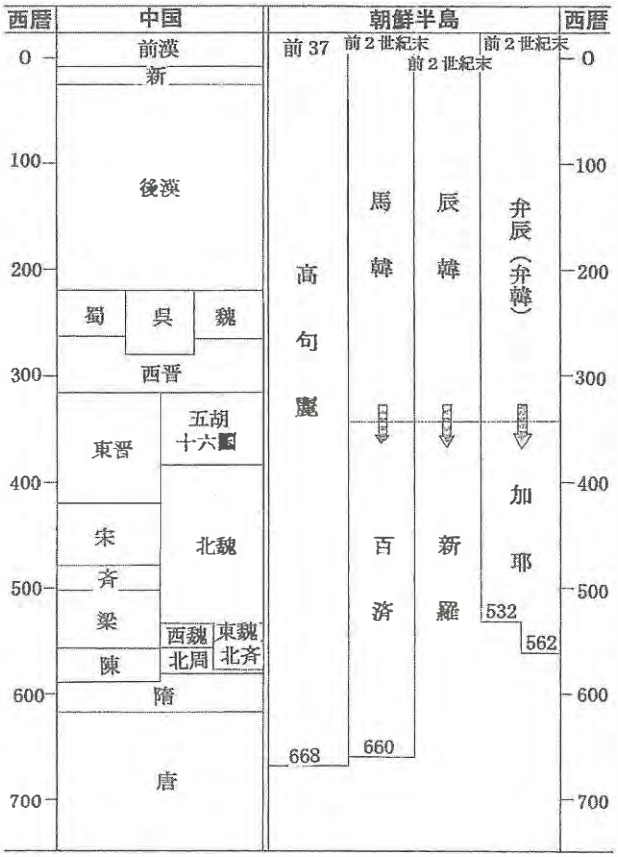
それでは，５世紀中葉～６世紀中葉にかけて，なぜ死後の世界の存在の受容を前提とする土器副葬の風習がわが国で一定度の定着をみていたのでしょうか。その背景についてこれから考えてみたいと思います。ここからの話では，34・35頁の第２・３表と36頁の第３図をご覧になって下さい。

ａ　中国・朝鮮半島の人々の死後観と墓制

結論を先にいえば，私はそれを中国や朝鮮半島の死後観の影響だと考えています。では，当時の中国や朝鮮半島の人々がどのような死後観をもっていたのでしょうか。

中国の死後観については，人の死後肉体から抜け出る自由霊（魂）のみならず，魂の抜け殻である身体にも身体霊（魄）が宿るとしてこれをも重視しました。その結果，遺骸が埋葬される土地（故郷）への愛着が深く，祖先祭祀を重視しました。死者は子孫によって篤く祀られてはじめて霊魂が「祖先」に昇格し，家族や子孫ほかの人々とも平和な関係を維持することができるが，子孫に弔われない霊魂は悪鬼になり，祟りをなすと信じていました。そのため，死後は現世と連続しており，死者はあの世でも現世と同じように生活していくのだと考えていたので，器類を始めとする多くの器財を墓に

第２表　中国・朝鮮半島の王朝の変遷（紀元前後～７世紀）



納めました。このような中国の人々の死後観の背景には，中国古来固有の民間信仰に由来する不老長寿を願う神仙思想があります。ところで，中国において，墓に土器が副葬される例は，すでに紀元前3,400～2,250年の良渚（リャンツー，りょうしょ）文化期以降みられるようになります。また，中国で墳丘墓の埋葬施設が竪穴系のものから横穴系のものに変わるのは紀元前３世紀末に建国される前漢代以降で，皇帝陵や王侯墓などから始まったとされています。副葬品もそれまでの礼楽器にかわって，鼎・豆（とう）（高杯）・耳杯などの祭祀のための器や死者が生前に日常用いていた器物を模倣した明器（めいき）が主体となるようです。このような変化の背景としては，それまで墳墓とは異なる場所で行われていた祖霊祭祀が，墳墓周辺や墓室内で行われるようになったことが挙げられます。

このように中国ではすでに紀元前の時期に人々に死後の世界の存在が受け入れられていたとみることができます。この中国で始まった墓への土器の副葬の風習と死後の世界（黄泉国）を具現化したといえる横穴系の埋葬施設は，中国北東部から朝鮮半島北部の高句麗を経て，６世紀前半から後半までには朝鮮半島南部の百済・加耶そして新羅まで普及して行きます。

一方，新羅や加耶地域の墓に土器が副葬されるようになるのは，少なくとも２世紀ごろ以降，４，５世紀頃には一般的であったとみられており，朝鮮半島南部への横穴系の墓の普及に400～500年ほど先行しています。例えば，慶州（キョンジュ）市・朝陽洞（チョヤンドン）遺跡の木槨墓には瓦質土器が納められており，２世紀後半～４世紀初頭頃とみられています。金海（キムヘ）郡・礼安里（イェアルリ）遺跡では４世紀代の墓に赤褐色軟質土器・瓦質土器や陶質土器を，４世紀後半～５世紀後半の釜山（プサン）市・福泉洞（ポクチョンドン）古墳群では木槨墓や竪穴式石室などに陶質土器を納めています。

このように，神仙思想（道教）の影響下に形成された中国大陸や朝鮮半島の人々の死後観は死後の世界の存在を容認するもので，そのことは墓への死後の世界で用いるための器類の副葬やのちには横穴系の埋葬施設の導入・普及として現れました。では，この中国や朝鮮半島の人々の死後観やそれを反映した墓への土器副葬及び横穴系の埋葬施設を含む葬制はどのようにして，相反する死後観をもつ倭国，つまり日本に伝わったのでしょうか。

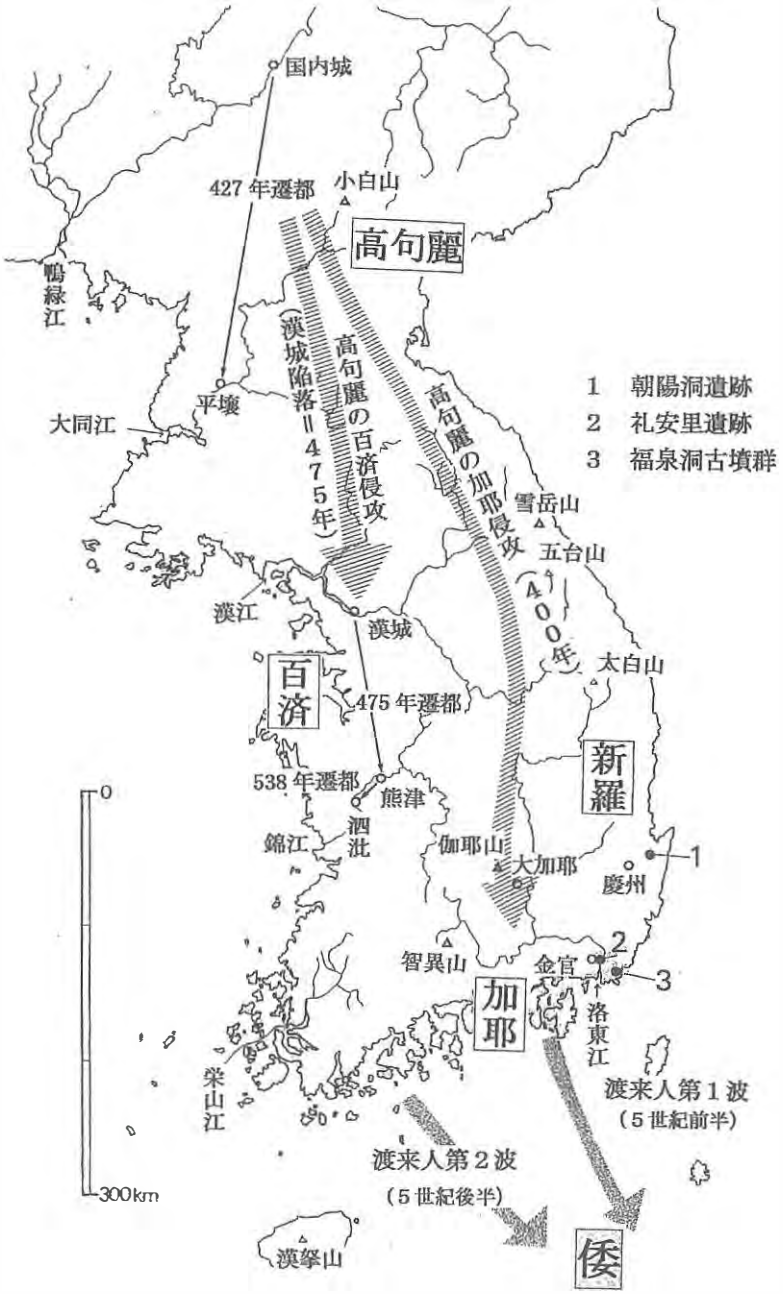
第３表　古代の朝鮮半島の情勢（年表・倭との関連）

紀元前後以降	鉄（鉄素材・鉄器）をめぐる加耶地域と倭との交易。当初の倭からの交換財は米・青銅製品（鏡・銅矛・銅戈）・石包丁など。のち，加耶東部（金官加耶）は新羅の支配下に入るため，加耶西部（大加耶）や百済から鉄を入手した。
２世紀～５世紀	加耶・辰韓（新羅）地域で，竪穴系埋葬施設（木槨墓・石槨墓・竪穴式石室）に土器（瓦質土器・赤褐色軟質土器・陶質土器）を副葬。
４世紀後半	倭王権主体の沖ノ島の航海神の祭祀が本格化（海上の半島ルートの確保）。
４世紀後半～末	加耶東部（金海・東萊）で，巴形銅器（盾の飾り）・短甲・碧玉製品などの倭系製品が流通する。
369年頃	百済，369年製作の七支刀を倭王に贈る（百済・倭の通交）。
369～407年	高句麗・百済間の40年戦争。
400年	高句麗，新羅救援のため南下し，金官加耶・安羅など加耶東部に侵攻。 **⇒朝鮮半島南部（主に加耶地域）からの技術者集団の倭への渡来（渡来人の第１波＝須恵器焼成技術などの将来）。**
５世紀代	加耶地域を中心に倭系甲冑がみられる（一部，高句麗と百済の係争地や新羅・百済の支配圏にも及ぶ）。
475年	高句麗，百済に侵攻（漢城陥落）。百済は都を南方，錦江流域の熊津に遷す。 **⇒朝鮮半島（主に百済地域）からの技術者集団・文物の倭への渡来（渡来人の第２波）。**
６世紀前半以降	百済・加耶・新羅で横穴式石室の普及。
532年	加耶東部（金官加耶など），新羅に降る。
562年	加耶西部（大加耶連盟），新羅に攻略され，加耶滅亡。以降，倭は百済との通交が密になる。

b　朝鮮半島と倭国の交流

中国・朝鮮の公的な記録や考古学的な遺構・遺物の存在から，朝鮮半島，特に加耶を主体とする南部地域と倭とは少なくとも紀元前後頃から対馬や壱岐を介してしきりに交易を行っていたと考えられています。こ

の交易で倭が特に欲したのは加耶の鉄資源で，この加耶の鉄素材（斧状鉄板，のちには鉄鋌）や鉄器を倭の米や青銅製品（鏡・戈・矛など）・碧玉製装飾品などと交換していたのです。この加耶と倭国の交易は，４世紀後半～５世紀にかけて，政権の強化を目指す倭国の中央政権の国家戦略のもとでより積極的に行われるようになります。そのために，４世紀後半以降，倭国から朝鮮半島への渡航ルート上にある沖ノ島における国家規模の航海神の祭祀が本格化する一方，百済からは倭国の王に369年製作の七支刀が贈られ，高句麗の南下に伴う圧力に苦しめられていた百済と倭国との通交が本格化します。この４世紀後半からの高句麗と百済の外交的な緊張状態はやがて400年の高句麗の新羅・加耶東部への侵攻となって現れ，この戦乱を避けて主に加耶東部地域から大量の人々が倭国へ渡来したとみられます（渡来人の第１波）。このとき渡来した技術者集団が中心になって倭国に須恵器を焼成する技術が伝えられます。次いで，475年には高句麗が百済に侵攻し，王都の漢城が陥落しますが，このときの戦乱を避けて多くの人々が倭国に渡来し，百済系の技術や文物を伝えたと考えられます（渡来人の第２波）。一方，４，５世紀には加耶を中心とする朝鮮半島南部地域で盾の飾りである巴形銅器をはじめ，甲冑・碧玉製品など倭系の製品が流通しており，倭国の人々あるいはその影響下にある人々の足跡がみられるようです。なお，これまで倭国の朝鮮半島の窓口となっていた加耶の東部地域は新羅の圧力によって５世紀になると衰退し，やがて６世紀半ばにはその西部地域ともども吸収されてしまいます。そして，この加耶にかわって６，７世紀には百済が倭国の朝鮮半島の窓口となり，これ以降倭国は様々な点で百済の影響を色濃く受けるようになります。



第３図　古代の朝鮮半島情勢（地図・倭との関連）

4　日本人の死後観の変容

このように，紀元前後以降，少なくとも数百年にわたる朝鮮半島南部との交易，特に４世紀後半～５世紀代を中心とする加耶や百済からの戦乱を避けての度重なる倭国への技術者集団を核とした人々の渡来や文物の伝来は，単に技術や文物といった物質的な伝播にとどまらないで，当然のことながら精神文化をも含むものであったと思われます。その結果，わが国の人々の社会生活，ひいては死後観にも大きな影響を与え，その変容を迫ったであろうことは想像に難くありません。この５世紀代を中心として，日本の人々の死後観は大きく変わり，死後の世界の存在を受容するに至ったとみられます。ただ，技術や物質文化に比べて，死後観といった人間の心に関わることはその受け入れに多くの葛藤や曲折が予想され，受容の時期や要した時間さらには受け入れの状況に地域差や温度差が存在したとみられます。このことが，当時の政権の中枢が置かれていた畿内地域では，すでに５世紀中葉の段階で棺の内部に須恵器を副葬し，新しい死後観の受容に積極的なさまを窺うことができるのに対して，都から遠く離れた安芸・備後地域では６世紀前半～中葉という横穴式石室導入の寸前に至っても，棺の蓋の上や棺と墓坑の間に須恵器を副葬するのがやっとの状況で，やや消極的な受容がみられるという温度差となって現れたのだと思います。

今までお話させていただきましたように，数百年にわたる朝鮮半島との密接な交流が日本人の死後観に変容を迫り，５～６世紀前半の頃にはほぼ日本人の死後観は死後の世界の存在を容認する状況になっていたと考えられます。このような素地があってはじめて，６世紀後半以降，横穴式石室の速やかな全国規模での普及が可能になったのではないかと考えています。

以上，意を十分尽くしたとは言えませんが，これで私の拙い報告を終わらせていただきたいと思います。

基調講演「安芸・備後の古墳と古代国家形成」

岡山大学大学院教授　松木　武彦

1　はじめに

みなさんこんにちは。岡山から参りました松木と申します。きょうは「平成22年度ひろしまの遺跡を語る」にお招きいただきましてありがとうございます。この催しの全体のタイトルは「古墳時代の暮らしと心」ということで，きょう午前中の３人のご報告のなかにも，祭祀とか死後観とかいう言葉が出てきました。

私が話す内容も，心のことを認知科学という形で考古学のなかに取り入れようとしているので，そういう話もいいかなと思ったのですが，あまり心とか暮らしとかいう話が続きますと，ちょっとソフトフォーカスになってしまうきらいがあるかもしれません。じゃあ暮らしや祈りがあった時期の安芸や備後の歴史はどうだったのかというオーソドックスなところに立ち返って，枠組みの話をちょっとした方がいいかなと思いまして，暮らしと心という全体のタイトルよりは少し固い，古代国家形成という話になってまいりますけれども，古墳を使って，４世紀から６世紀ごろの安芸や備後の様子がどうだったのか，日本の国家形成の歩みのなかで，安芸や備後はどのように位置づけることができるのか，というような話をしてみたいと思います。

きょうお手元にいろいろと私の資料を配布していますが，主に使う資料は，前のスクリーンに映しています39頁の第１図，41頁のカラーの第１表が，きょうの話の大きな両軸といいますか，基本的な資料になります。そのほかのものは補助資料として使いながら話していきたいと思います。第１図と第１表がどういう資料かといいますと，ちょっと煩雑ではありますが，最初に説明しておきたいと思います。

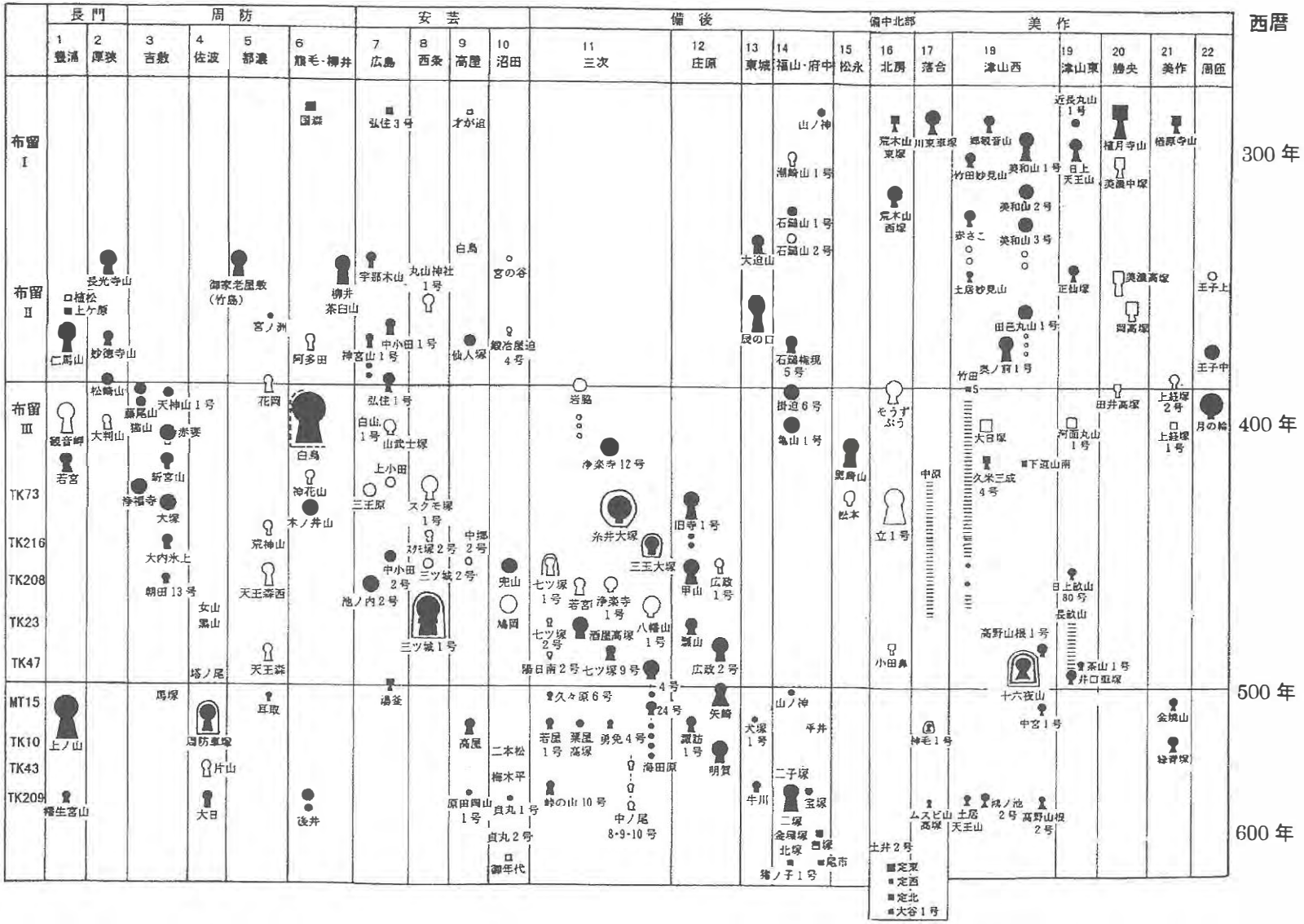
39頁の第１図は，安芸・備後と周辺における古墳の変遷ということで，地域を横軸にとりまして，三次，庄原，福山，府中，松永，安芸ですと広島，西条というふうに，地域で割り振っています。縦軸は右側に書いてある，300，400，500，600が西暦です。上から下へだんだん新しくなるということで，どの地域でどの時代にどんな形の古墳が築かれたかということを１枚の図にまとめたものです。三ッ城古墳だと西暦400年代の後半にあると分かるようにしています。真ん中に安芸と備後を入れていますが，右側には備後とつながりの深い備中北部，あるいは美作という山間部地域も入れていますし，左のほうは長門・周防という今日の山口県地域の状況もまとめて入れています。この図は全長が100mに近い古墳

まつぎ たけひこ
松木武彦

昭和36年愛媛県生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。岡山大学准教授を経て，平成22年度から現職。

戦争と平和について考古学的研究に取組む一方，吉備の巨大古墳の歴史的意義を研究。

近年は進化考古学・認知考古学という，考古学の新しい枠組みからの研究に挑む。著書に『人はなぜ戦うのか　考古学から見た戦争』（講談社），『日本列島の戦争と初期国家形成』（東京大学出版会），『全集日本の歴史第１巻　列島創世記』（小学館），『進化考古学の大冒険』（新潮社）などのほか，論文多数。



第１図　安芸・備後と周辺地域における古墳の変遷

から，20～30mの小さな円墳のようなものまで，データが分かっている主だった古墳は全部これに入れております。

次に41頁の第１表ですね，これは全国版といいますか，表の作り方を説明しますと，年代が左から右へ流れる，考古学でＩ期といっていますが，そこから右へ流れる。縦は古墳の大きさを示しています。西暦400年代のときにどれくらいの大きさのものが全国にあるのかということが，これを見れば分かります。文字の色分けは地方を表しています。黒が大和，紺が大和以外の畿内，あとは緑と赤と茶色がありますけれども，赤が吉備，きょうお話します備後は吉備の一部，赤で表したものの８割は今日の岡山県のものです。備後のものはそれに混じっていて，安芸の三ッ城古墳と備後の糸井大塚とか全国レベルのものがここに集まっていて，高校野球でいえば全国大会というようなものです。

２　前方後円墳の格を表す後円部径

全国大会出場の資格ですが，これが古墳の規模になってまいりまして，考古学では古墳の規模を前方後円墳の全長で表します。ですから日本最大の古墳は全長486mの仁徳陵であるとかいいます。それは意味がないことではありませんが，私はそうではなくて，実際には埋葬施設のある後円部の高さと径というのが，その古墳の格を最もよく表していると思います。ですから特に三次のあたりには，糸井大塚のように，大きな後円部に小さな前方部がついた帆立貝式古墳と呼ばれる古墳が発達します。帆立貝式だと前方部が短いから，全長で比べると前方後円墳に劣るように見えるのです。しかし50mの規模の円墳や帆立貝式古墳は埋葬施設や副葬品の内容を見ますと，長さ100mの前方後円墳とだいたい同じランクなのですね。全長でいうと100mと50mだから半分の規模になってしまい，なんとなくランクが低いように思えますが，実際には前方部は付属施設にすぎません。私は古墳の本来の格を表すのは後円部の大きさだと考えています。

ですからこの表の上にあるものほど規模が大きいわけですが，左のほうに300mとか250mとか200mとか書かれていて，一番下が50mです。これは墳丘の全体ではなくて，実は後円部の，あるいは円墳の場合は古墳自体の径を表していると考えていただいていいと思います。これは全国レベルの古墳の表ですが，ここには全国から後円部径が50mを超える前方後円墳が入っています。まれには前方後方墳があって，後方部の一辺が50mを超えるものがあります。要するに実際に埋葬のある本体差し渡しが50mを超えるものを選んで表に入れたわけです。

この全国大会に吉備，安芸を代表して出ているものがこの赤い字のもので，だいたい備前，備中のものですが，安芸から三ッ城古墳，備後から糸井大塚古墳が載っているということで，逆に言いますと，安芸の三ッ城，備後の糸井大塚が全国レベルの古墳なのだということになると思います。

39頁の第１図の古墳と照らし合わせながら話をしていきたいと思います。右に300，400，500，600年と書いてありまして，300年代と400年代の間のところに線を１本引いてあります。そして500年くらいのところに，線をもう１本引いています。古墳時代はだいたい３つの段階に分けてあるのですね。前・中・後期と分けるときはだいたいこのように分けるわけです。前・中・後期それぞれの段階で古墳が築かれるパターンが非常に大きく変化している。これが歴史の流れを大きく変えている。邪馬台国と律令国家の時代をつなぐ約300年間が古墳時代ですが、その300年間にものすごく大きな時代の変化があった。その変化というものが古墳の築かれ方

第１表　後円部径からみた各地大形古墳の変遷（後円部径50m以上）

年代	250			400				500			600
段階	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
						仁徳陵					
300m											
250m						応神陵					
					履中陵						
					造山						
200m											
				神功皇后陵							
									河内大塚		
						作山					
	箸墓	崇神陵	景行陵 メスリ山		仲津媛陵						
150m					平城陵		にさんざい			見瀬丸山	
	西殿塚				宮山		允恭陵	仲哀陵			
					成務陵 墓山 （男狭穂塚）	太田茶臼山					
				日葉酢媛陵 津堂城山 摩湯山 五色塚	垂仁陵 渋山 神明山	ウワナベ コナベ 磐之媛陵 太田天神山					
	桜井茶臼山			金蔵山	西陵 久津川車塚 網野銚子山 御墓山	新木山	宇度墓 両宮山				
100m				巣山 蛭子山 （小盛山）	（秋常山） 浅間山		河合大塚山 鑵子塚	白鳥陵	今城塚 （丸墓山）		
			西山 安土瓢箪山	櫛山 島の山 乳の岡 昼飯大塚 甲斐銚子塚 太田茶臼山	（乙女山） 古室山 百舌鳥大塚山 いたすけ 女狭穂塚 常隆寺天山 白石稲荷山 名取雷神山	百舌鳥御廟山	舟塚山	狐井城山 馬塚			
	浦間茶臼山	東殿塚	尾上車山	東大寺山 （富雄丸山） 貝吹山 （甲斐丸山塚）	壇場山 佐古田堂山 富田茶臼山 （児塚） （免鳥長山） （女体山）	雲部車塚 （八幡山） 内裏塚		宣化陵 七夕山	石上大塚 断夫山	別所大塚	（岩屋）
	中山大塚 黒塚 椿井大　塚山 弁天山Ａ１号 豊前石塚山	アンド山 平尾城　山	青塚茶臼山 手縄ヶ城山 前橋八幡山	二ツ塚 玉手山７号 松岳山 石山 坊の塚 守山白鳥塚 六呂瀬山 前橋天神山	野中宮山 玉丘 神宮寺山 北山１号 宝塚１号 （野毛大塚） 愛宕山 大鳥巻	屋敷山 大鳥塚 池田 石人山 （女良塚） 御富士山	黒姫山 御所山 （白鳥塚） 井出二子山	西乗鞍 反正陵 九条塚 摩利支天塚	安閑陵 岩戸山 慈恵塚 慶瀬二子塚 前二子	こうもり塚 前橋二子山	（千駄塚） 八幡観音塚
	久里双水	下池山 中山茶臼山	フサギ塚 新山 花光寺山 鶴山丸山 柳井茶臼山 一貫山銚子塚 松林山	燈籠山 佐味田宝塚 （温江丸山） （月の輪） 天神山 上仲塚 稲荷森	ナガレ山 鳳凰山 恵解山 白鳥 渋野丸山 亀塚 長目塚 唐仁１号 （明舎） 甲斐天神山	はさみ山 船塚 宝塚２号 琴塚 室山 三之分目 岩鼻二子山	横瀬 笹塚	郡山新木山 平塚	仁賢陵 清寧陵 宇治二子塚 中二子	ウワナリ塚 笹森稲荷	欽明陵 （獣ノ塚）
	馬口山 森１号 元稲荷 西求女塚 丁瓢塚 網浜茶臼山 那珂八幡	天神山 玉手山３号 五塚原	波多子塚 玉手山１号 寺戸大塚 白米山 馬の山４号 金立銚子塚 藤本観音山	和泉黄金塚 天皇ノ杜 垣内 法王寺 和歌大塚山 能狭野王塚 松峰山 寺谷銚子塚 矢場乗師塚 亀ヶ森	風吹山 （豊中大塚） （聖塚） （鳴谷東１号） （産土山） （椿山） 長浜茶臼山 殿塚 （伊勢塚） 上ノ塚 （公卿塚）	（新宮） 三ツ城 岩原双子塚 南宮 妙蓮寺	（糸井大塚） 登越 舟山 不動山 鶴山	埼玉稲荷山 保渡田八幡塚 （丸塚山）	埼玉二子山 三条塚 府中愛宕山 筑波八幡塚	山代二子塚 鳴真観音山	（石舞台） 金鈴塚 （宝塚山）

古墳名の文字色は所在地域を表す…黒：大和（下線はオオヤマト古墳群），紫：河内・和泉，紺：摂津・山城，赤：吉備，
緑：大和・河内・和泉・摂津・吉備以外の西日本，黄：東日本（近江・伊賀・若狭を含む）
古墳名のカッコ入りは前方部が短小か，もたないことを示す（帆立貝形古墳・円墳・方墳）
古墳名の斜体は主丘部が方形であることを示す（前方後方墳・方墳）

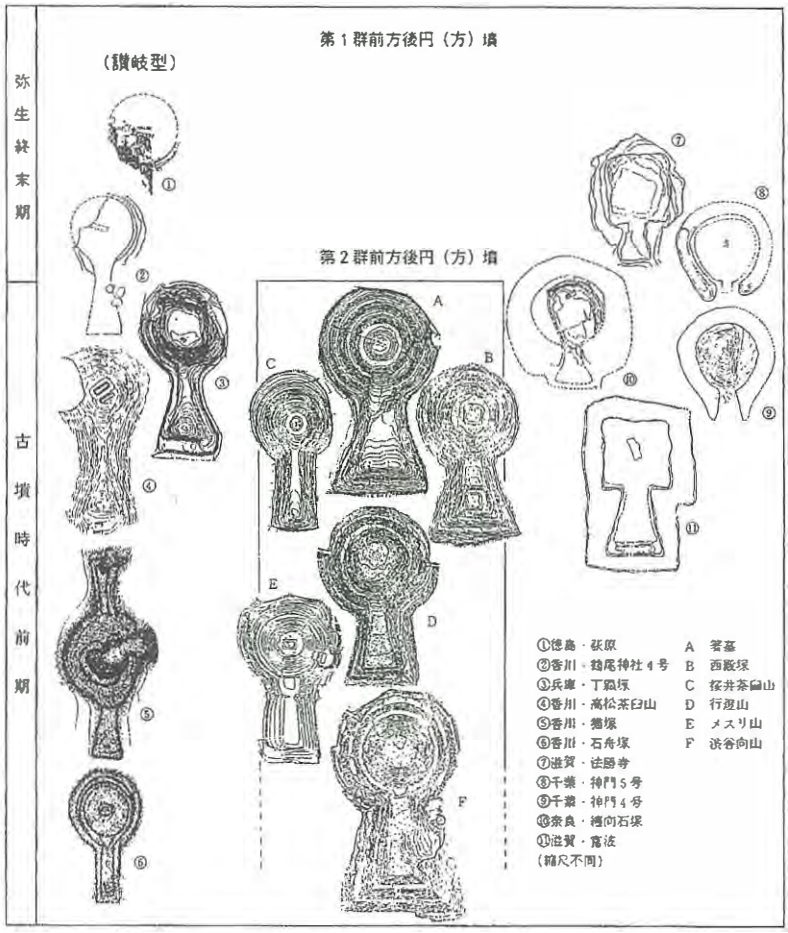
のパターンの変化に現れてきている。そのへんの話を具体的にしていきたいと思います。

きょうの話の本題になりますのは，古墳時代中期の５世紀の話になりますが，その前触れとして，それに先立つ古墳時代前期，だいたい西暦250年前後から300年代の古墳がどのようだったかお話をしたいと思います。

３　地域色豊かな４世紀の古墳

39頁の第１図を見ていただきますと，250年前後から300年代の古墳時代前期というのは，特に美作とか備中北部には如実に現れるのですが，地域ごとにそれぞれ小さいながらもほぼまんべんなく古墳が築かれている，地域には地域のボスがいて古墳を築いている，そういう社会なのですね。安芸をみても広島にも西条にもある，長門や周防にもそれぞれあります。けれどもなぜか三次・庄原地域にはない。これはあとでちょっと問題にしたいと思います。しかしそういう空白地域があるのですが，基本的には各地にそれぞれボスがいて古墳を造っている。そういう社会が４世紀の古墳時代前期の段階といえるわけです。

どういう古墳が造られているかというと，42頁の第２図は東海大学の北條芳隆さんという考古学の研究者が作ったものですが，一言でいえばそれらの古墳は地域ごとにかなりバラエティーがある。同じ前方後円墳なんだけれども，この真ん中にあるのは畿内の前方後円墳ですね，後円部は基本３段で台形の前方部を造っている。ところが讃岐に目を転じますと，讃岐の



北條芳隆2001「前方後円墳と倭政権」北條芳隆・村上恭通・溝口孝司編『古墳時代像を見なおす-成立過程と社会変革-』青木書店　より（一部改変）

第２図　地域色を残す前期古墳

古墳の一番大きな特色は，土ではなくて全体を石積みで造っている。だいたい手のひらに載る大きさから，大人の頭くらいの石を集めてきて，それで墳丘を造っている。古墳はふつう土で造る，外側に石で葺くのですが，讃岐の古墳は芯から石で造るところから始めます。

第３図　香川県善通寺市の野田院古墳
（復元整備された古墳）

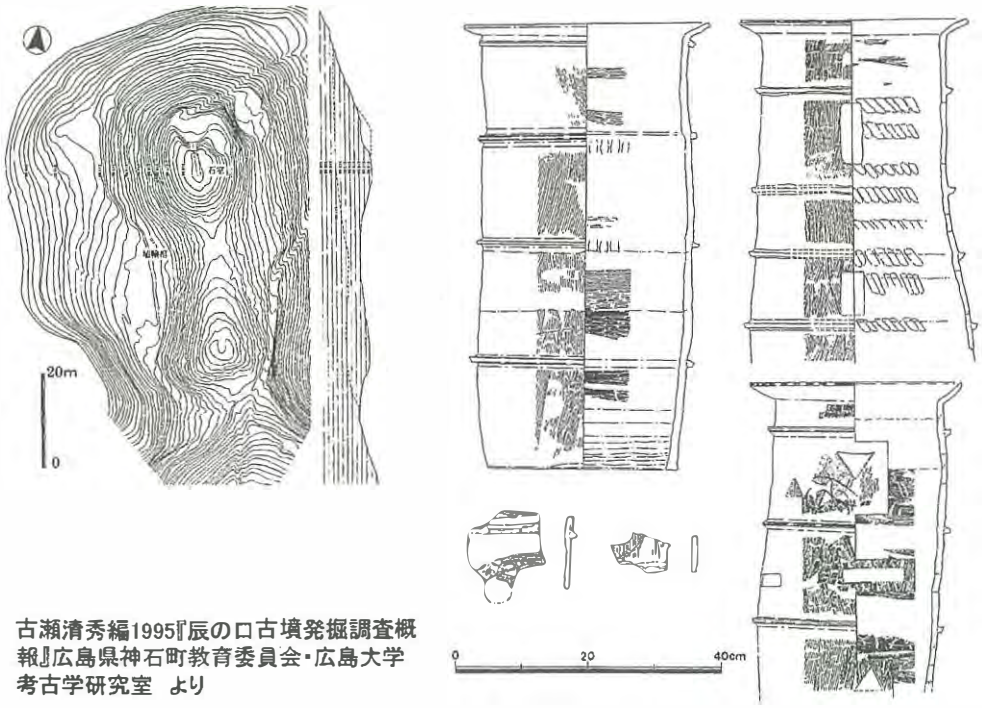
前方部の形も低くて細長いところから開いていく形をしています。善通寺市に野田院古墳という復元された古墳があります（第３図）。この古墳の場合，前方部は土で造っているのですが，ふつうは前方部も石で造ります。また，讃岐の４世紀の古墳というのは，墳丘の主軸に対して斜めに石室を置いています。このように，いくつか非常に強い個性があるのです。北條さんが讃岐の古墳について指摘していますが，多かれ少なかれ４世紀代の古墳は地域差が激しい，ローカルなバラエティーがあるのだということは，私は安芸・備後にも当てはまると考えています。

この後シンポジウムで司会をしてくださる古瀬先生は讃岐のご出身ですけれども，備後でも辰ノ口古墳（44頁・第５図）や，お手元の資料に墳丘図がある同じ東城地域の大迫山１号古墳（43頁・第４図）の調査をされています。辰ノ口古墳を見ますと，畿内の前方後円墳に比べるとどことなく形が少し違う。辰ノ口，大迫山は備後ですが，中国山地の山間部の古墳は美作の古墳を含めて，周りにこういう平坦地が見られることが多い。だから土の切り盛りの仕方も，非常に個性があるというように考えています。讃岐ほど色濃くはないのですが，やはり畿内とは違います。それから第４図の右は辰ノ口古墳から出てきた埴輪の実測図です。古瀬先生は畿内からの影響と言っておられますが，たしかに埴輪をもつこと自体は畿内の大きな影響力だと思うのですが，ふつうの埴輪は上部がこんなに湾曲していません。ローカル色が強いと思っています。

それから吉備の一番典型的な地域の４世紀の古墳ですが，44頁の第６図の左が中山茶臼山古墳，右が卑弥呼の墓ではないかという説もある箸墓古墳です。中山茶臼山古墳は去年，宮内庁から新しい測量図が発表されましたときに，箸墓とそっくりな型だと古墳時代の研究者を驚かせました。平面形はたしかに箸墓と似ています。でも日本の研究者というのは，あまりにも平面にこだわりすぎているのではないかと私は思います。なぜかというと中山茶臼山古墳というのは，わずかに２段で，墳丘の後円部の平坦面がものすごく広いのですね。

第４図　大迫山１号古墳

実際の箸墓は中山茶臼山古墳の２倍以上

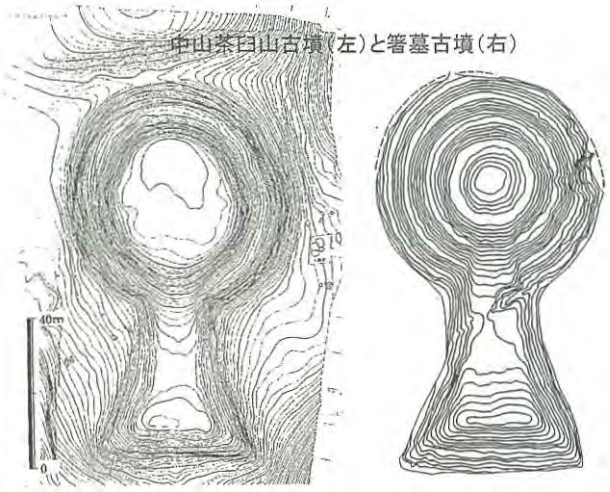


古瀬清秀編1995『辰の口古墳発掘調査概報』広島県神石町教育委員会・広島大学考古学研究室　より

第５図　辰ノ口古墳の墳丘（左）と埴輪（右）

あって，１段・２段・３段・４段・５段あります。非常にたくさんの段でできていまして，後円部差し渡しの広さでいうと，平坦面というのは，まあ一番上の段面は特殊なものと思いますので，２段目の平坦面がもともとの後円部の平坦面だと思うのですが，これが後円部全体のうちでは高くて比較的狭い。中山茶臼山古墳の場合は，後円部は低くて上がものすごく広い。それから前方部の平面形は一見よく似ていますが，箸墓古墳は平地にあるのですね。だから三味線のバチに似ていまして，バチ形前方部と考古学でいうのですが，この裾が真っすぐ広がりながら伸びていく様子が現地に行くとよく分かります。

けれども中山茶臼山古墳の場合，バチ形に見えるのですが，ものすごい傾斜地なのです。だからここが平坦面にモワーと広がってくるというより，山の斜面に沿ってキューと降りている感じなのです。見た目がまったく違うのです。だから中山茶臼山古墳にしても畿内の古墳とは違う。そもそも畿内の大和の前方後円墳というのは，平地に築いているものがほとんどなのですね。ところが吉備では山の上に築く。このことをとってみても，前期４世紀までの古墳というのは，ローカルな個性が強いということがいえると思います。



第６図　中山茶臼山古墳と箸墓古墳

それから出雲のほうはですね。前方

後円墳でも円墳でもなく，方墳が４世紀の間ずっと造り続けられるということで，これは讃岐の前方後円墳どころか，もっと地域色の濃い前期の古墳なのです（45頁の第７図）。それから東日本のほうでは前方後方墳が発達するというように，４世紀までの古墳というのは非常にローカル色が強い。

もう一度39頁の第１図に戻りますと，各地域で地域のボスが築いている前方後円墳はあるのだけれども，それらはローカル色が強いものです。そして出雲のように畿内にはない方墳の系列があり，美作の津山のあたりでは円墳の系列が少し出てまいります。津山からずっと東の勝央とか美作あたりに行きますと，前方後方墳の系列がある。各地域でボスが非常にローカル色の濃い古墳を築いているというのが４世紀の段階です。

出雲の方墳

渡邊貞幸・金山尚志1999『島根県安来市大成古墳第4・5次発掘調査報告書』島根大学考古学研究室・安来市教育委員会 より(一部改変)

第７図　出雲の前期方墳

４　後円部径150mが大王墓の基準

さらに４世紀までの特徴を全国的にみるために，また41頁の第１表を見ていただきたいと思います。これは先ほど申しましたように後円部，実際に埋葬があるところの大きさで全国の古墳で50m以上のものをここに集めたわけですけれども，これを見ますと，ちょうど後円部径が150m前後のところに，１期から６世紀後半の10期あたりまで古墳がずっと並んでくるのがお分かりだと思います。

私はこの150mというのが一つの基準だったと考えております。具体的に言いますと，これが大王墓じゃないかというように考えておるわけです。ですから大王墓は，箸墓，西殿塚，崇神陵，景行陵，メスリ山，神功皇后陵，それから５世紀に大きくなって，仁徳陵，応神陵，履中陵，それから吉備の造山（ぞうざん），作山（さくざん），これは実際には二つとも「つくりやま」と呼ぶのですが，紛らわしいのでそう呼び分けていますけれども，仲津媛陵，平城陵，宮山，ニサンザイ，允恭陵，仲哀陵，河内大塚，見瀬丸山と，150mのラインというのがずっと一貫してあって，これよりも大きく造られるのが大王墓だと基本的には理解しております。

崇神陵だの，景行陵だの，仁徳陵だの，履中陵だの，いま天皇の名前で古墳を呼ぶことは考古学ではしなくなっています。でも私があえてこうしているのは，こう呼ぶべきだと主張しているのではなくて，宮内庁が比定している天皇陵と，そのほかの古墳の大きさと，どんな関係があるのかということをよく理解していただくために，あえて宮内庁の呼び方をしているということを申し添えたいと思います。

それで元に戻りますと，西暦250年から400年以前，１段階・２段階・３段階というのは，大王墓とその他の古墳の格差がものすごく大きい時期なのですね。150mのところに，箸墓，西殿塚，それから２期になりますと崇神陵，３期には景行陵，メスリ山と並びますけれども，その下のところが桜井茶臼山がぽつんとある以外は，大きな空白になって，後円部径が80mあたりから下はまたずっと詰まってきているということで，大王墓とその他の古墳の格差があった時期というのが，４世紀までの古墳の特徴というわけです。しかももう一つ特徴があって，それ

は箸墓，西殿塚，崇神陵，景行陵，メスリ山はいずれも奈良盆地の東南部，いまの天理市から桜井市のあたりに集中しているということです。

5　備北の長も大和（おおやまと）に古墳を築いた可能性

天理市から桜井市あたりの古墳が集中する古墳群の名前は，大和（おおやまと）古墳群というように呼びならわしておりますけれども，その大和古墳群に所属する古墳には，下にアンダーラインを引いております。それで見ますと，箸墓，西殿塚，崇神，景行，メスリ山の五つの大王墓のほか，ちょうど中間にある桜井茶臼山，それから１期でいいますとその下の中山大塚，黒塚，馬口山（ばくちやま），これは全部大和の古墳ですね。２期だと東殿塚，行燈山，下池山，天神山。下池山は前方後方墳です。ちなみに前方後方墳は斜めの文字で表しています。３期になると，西山，フサギ塚，波多子塚。このように奈良盆地の大和（おおやまと）の非常に限られた一角に150m級の大王墓の系列と，それから地方にいけばすごく大きな規模になる50mから70m級の系列が，いくつも並び立っているわけですね。

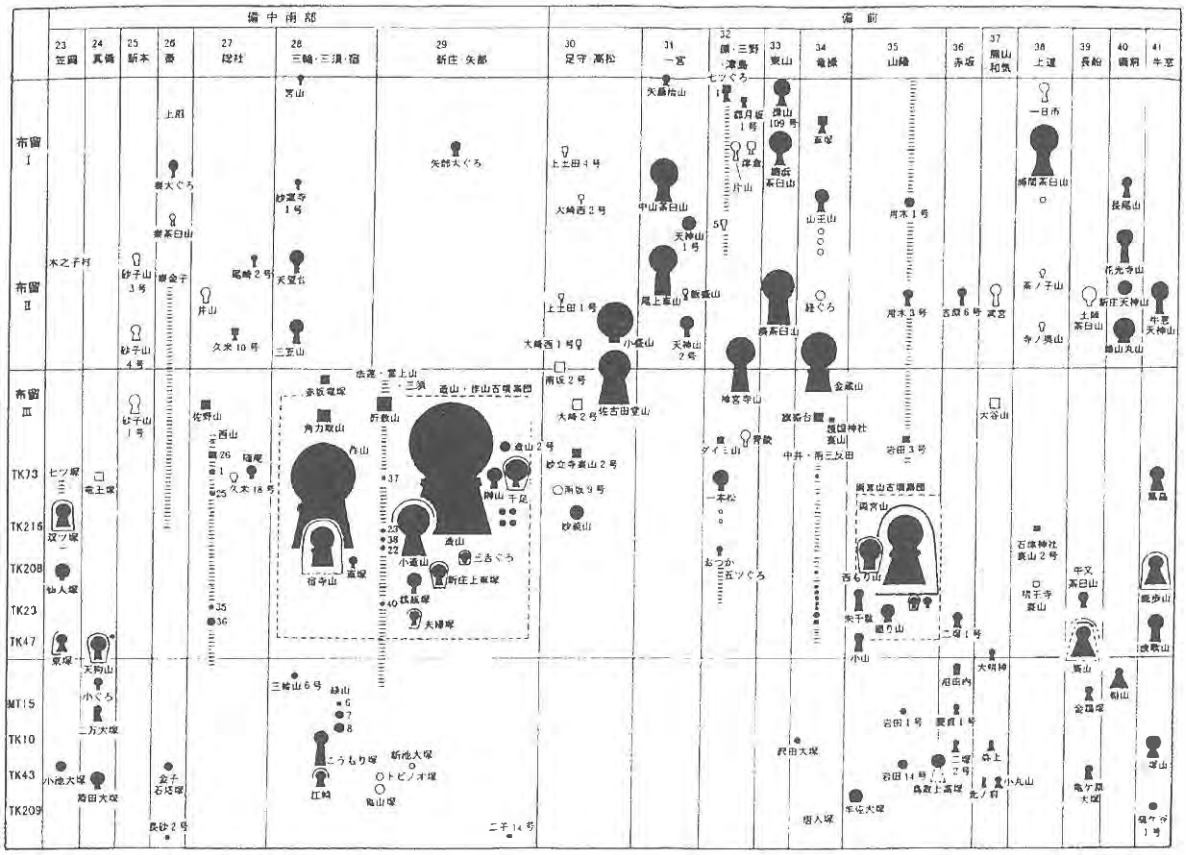
今の天理市と桜井市というのは，たしかに奈良盆地の中枢部で纒向遺跡なんかがあるところですけれども，面積としては非常に狭いです。そんなところに大王墓を含む何本もの首長系列があるというのは，少し不自然だと。しかし，河内とか，山城とか，大阪とか京都のあたりに目を拡げても，めぼしい古墳があまりないのですね。ですからいま国立歴史民俗博物館におられる広瀬和雄先生なんかは，おそらく大和盆地のほかの場所の長（おさ）たちも大和（おおやまと）に集まってきて，一緒のところに古墳を築いていたんだとおっしゃっています。

ですから私は広瀬説をもっと拡大して，河内とか山城とか弥生時代から大きな集落があって，それから５世紀以降も大きな古墳が出てくるところの長たちは，全部この大和に墳墓を集めていたんだというように考えます。

そしてさらにですね，この吉備，これは47頁の第８図に示しましたが，だいたい岡山市とか総社市とか備前とか備中の南部に当たる吉備の中枢部の様子で，図の原則は39頁の第１図と同じですけれども，横に三分割された一番上が前期です。前期は先ほど申しましたように，吉備の中枢部でも各地域で地域のボスが古墳を築いている。先ほど箸墓と比べた中山茶臼山というのが中央の上の方「31一宮」の地域にありますけれども，やはり前期に特徴的なあり方を示しているわけです。

５世紀になって墳丘の長さ350mの日本で第４位という大古墳・造山古墳を築造するのが新庄，矢部という地域です。そして西隣にもう一つの「つくりやま（作山）」古墳を出す地域があります。しかしこの両地域には前期のめぼしい古墳はないんですね。私はここの首長も，前期には大和（おおやまと）に墳墓を築いていた可能性があると考えています。

これを考え始めたのは私が最初ではなくて，岡山大学でかつてたくさんの古墳を掘って研究された近藤義郎先生が，やはりそのようなことを考えておられました。それで見ますと，この三次盆地の空白というのはどうなんだろうか。ここの長たちもひょっとすると大和（おおやまと）に出向いて，大和の一角に墳墓を築いていたんじゃないかという疑いを私はもっています。しかし，造山や作山に比べると，後から出てくる古墳も糸井大塚は全国大会に出られる古墳ですけれども少し小さい。ですから大和の中には，41頁の第１表に50m以上のものがありますけれども，それよりも小さいものもたくさん集まっていますので，ひょっとしたらそのうちのいくつかが，備後北部出身の首長だった可能性もあるんじゃないかと思っています。



第８図　吉備の古墳の変遷

というのは備後北部というのは，弥生時代は非常に盛んに墳丘墓を築くところですね。ですから私はよけいに，３世紀後半から４世紀の空白の意味が気になって仕方がないのです。これは実証なんかできるわけではありませんけれど，吉備の中枢部，造山と作山のあるあたりと，この備後の一つの中枢部である三次，庄原のあたりの首長というのは，ひょっとすると初期大和政権に参画してですね，奈良盆地の一角に墳墓の地を求めた可能性があるのではないかと考えるわけです。ここまでが前期のお話です。

６　大古墳造営に力を傾注した５世紀

そろそろ中期の話に行かないと時間がありませんが，中期の５世紀の話がきょうの主眼となります。４世紀から５世紀に入るころに，古墳が築造されるパターンに非常に大きな変化が生じます。どういう変化かというと，ある特定の個所に大古墳が現れて，それとタイミングを合わせるように，それまで４世紀にずっと古墳を築いてきた地域に，大きな古墳が築かれなくなるという変化ですね。これはもちろん安芸や備後にもみられます。

39頁の第１図で見ますと，５世紀でも安芸の三ッ城古墳というのは出現が５世紀半ば過ぎまで遅れるんですけれど，三ッ城古墳が出てきたときには，広島とか高屋とかこのあたりの地域に大きな古墳がなくなります。それから周防では，白鳥古墳が出てきたときに周りから古墳が希薄になるという同じような現象がみられます。美作では月の輪古墳，これも実は全国大会に出ているんですけれど，これが出てくるときに，それまでたくさん林立していた美作や備中北部の古墳が希薄になる状態があります。こういう状態をどのように解釈するのか。なぜそれま

で造られていた古墳の系列が消えて，ある特定の箇所にどんと１箇所大きな古墳が出てくるのか。この動きを解釈する説は２つあります。

一つは，それまで古墳をずっと築いてきた勢力が没落してしまう。政治的に衰退するというか，大和政権の中での位置付けが，失脚するというとあまりにも生々しいのですが，衰退する。そして代わりに畿内の政権から新たな場所にてこ入れがあって，そこに大きな古墳が築かれる。要するに，中央の大和あるいは河内との関係で，政治変動を背景に古墳の衰退というものを考えるということで，おそらく古瀬先生はそういう考え方に近いんじゃないかと思います。

それも非常に魅力的な考え方ですけれども，隣の大学の先生と同じ考え方をするというのもなんですので，私はちょっと別の考え方をしてみました。それはどんな考え方なのかというと，それまで古墳を地域それぞれに築いてきたけれども，５世紀の段階に衰退とか失脚じゃなくて，力を一つの大古墳に集中させる，具体的に言うと地域の長の中で代表者を選んで，彼の古墳をひときわ大きく造るために力を傾注する，寄せ集める。つまり地方がそれまでばらばらだったのが一つにまとまる，地方に国（クニ）というべきものを造る動きを反映しているのではないかという考え方です。これが第二の考え方で，私はこの考え方をとっております。

そういうことを念頭においていただいて，さらに中期の巨大古墳の内実がどんなものかというところに話を進めたいと思います。岡山市内なら造山古墳，作山古墳の話をするのですけど，今日は安芸に来ていますので三ツ城古墳の話を進めていきたいと思います。しかし，そうはいっても吉備の盟主である作山，造山の話から入りたいと思います。

その話に入る前にもう一度41頁の第１表で，４世紀から５世紀に入ったところで古墳の大きなパターンの変動がどう表れているかということを確認します。西暦400年の４段階と，右側の５段階ですね，５世紀の初頭から前半にかけての時期を見ていきますと，一言で言いますと，大王墓とその他の古墳との差が一挙に縮まっている。しかもその他の古墳の中には，この吉備の造山を筆頭として，宮崎の日向のですね，西都原古墳群の男狭穂塚（おさほづか）であるとか，丹後の神明山（しんめいやま），これはちょうど５段階のところの後円部の径が120mのところに神明山というのがあります。

その右側の６期になりますと，太田天神山という，これは群馬県の古墳ですが，逆に４期のところには五色塚というものがあって，これは神戸の一番西の端，ちょうど明石海峡大橋が淡路島から本土に渡ってきた，その付け根あたりにこの古墳はあります。地方の古墳も含めて，大王墓に迫るようなものが築かれる。つまり巨大古墳が４世紀までの間は奈良盆地の一角に限られていたのが，畿内およびその周辺，ないし日向とか関東とかとも含めて，日本の広い範囲に林立するようになる。要するに古墳を築く力というのが一つのある政治経済的なパワーだとしたら，そのパワーの極が畿内だけではなくて，吉備だとか九州だとか，関東だとか方々に分立してくる時期です。

だから私はそういうようなあり方を，先ほど説明した４世紀に大和（おおやまと）に大王墓が隔絶した規模で集中する時期と比べますと，これは逆に地方分権化が進んだととらえるしかないんじゃないかと思います。では地方がばらばらになってしまったかというと，実はそうでもないというのが複雑なところでして，そのへんが次の話になってくるわけです。

7　古墳技術者の派遣や設計図交換

49頁の第９図は，畿内の５世紀の大王墓群である羽曳野市の古市古墳群の空中写真と地図です。中央にある大きな古墳は，墳丘の長さも後円部の径も日本で２番目に大きい応神陵，誉田御廟山古墳と最近では言われますが，ほかに仲津媛陵，允恭陵，仲哀陵というように，ここに見えているだけでも５つ６つの大王墓といわれる古墳が含まれております。同じように49頁の第10図は堺市にある百舌鳥古墳群で，中央やや右よりにあるのは仁徳陵，その左斜め下の方が履中陵ですが，履中陵は吉備の造山と同じ設計で同じ大きさに築かれたのではないかといわれている古墳です。仁徳陵を中心とする古墳群が百舌鳥古墳群，応神陵を中心とする古墳群が古市古墳群といわれておりまして，その特徴は，大きな古墳もたくさんあるんだけども，大きな古墳の周りに小さな古墳が衛星のように取り巻いて非常に階層的な構造を見せているというのが，５世紀の古墳の特徴です。

藤井寺市教育委員会編1961『古市古墳群』藤井寺の遺跡ガイドブックN0.1より

第９図　畿内の大王墓（古市古墳群）

第10図　畿内の大王墓（百舌鳥古墳群）

49頁の第11図は応神陵ですけども，前方部，後方部とも３段にきれいに築かれています。前方部の西側がちょっと崩れていますけれど，周りに堀を巡らせて，もともとさらにもう一重堀がありました。そしてその周りに，前方部東側の堀にくい込んだ前方後円墳は応神陵より先にあったものですが，その他の円墳とか方墳とか，少し離れると帆立貝式古墳（前方部が小さな前方後円墳）が，衛星のように巨大な前方後円墳を取り巻く姿が見られる。

新納泉1992「Ⅴ古墳時代　1時代概説」日本第四紀学会/小野昭/春成秀爾/小田静夫『図解・日本人類遺跡』東京大学出版会　より

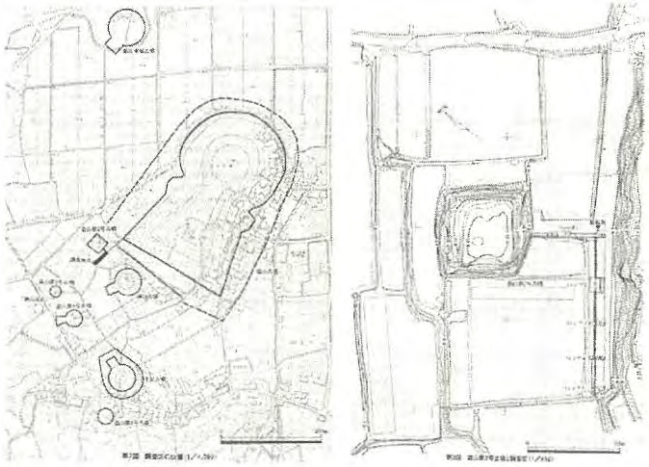
第11図　応神陵（誉田御廟山）

50頁の第12図は吉備の造山古墳ですけども，同じように円墳，方墳，帆立貝式古墳があります。

こういう衛星のように取り巻く古墳を陪塚といいます。周りにたくさんの古墳をはべらせることが，５世紀の大古墳の特徴でもあります。これは４世紀の大きな古墳にはあまり見られないことですね。だからこの点でも古墳の築き方が少し変わったということがいえるわけです。

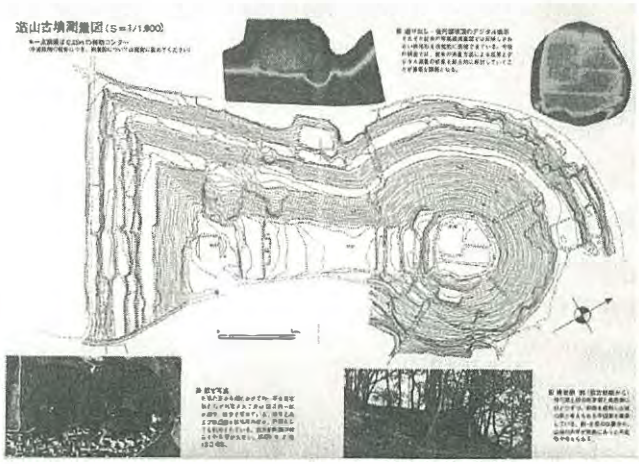
そして造山古墳は現在，岡山大学で調査を進めています。実際に調査を進めているのは，私の同僚の新納泉先生です。３月にまた調査をしますので，ぜひ見に来ていただければと思います。ただしこの墳丘は国史跡になっていますので，ちょっとやそっとでは掘れないんですね。今やっているのは，この造山古墳に畿内の大王墓のような周濠があったかどうかということを調べていまして，去年どうやら堀があるらしいことが分かったんですね。今回は堀の広がりとか，より詳しい状況を調べていますので，ぜひご期待いただきたいと思います。このような測量図も，もともとは航空写真から起こした測量図があっただけで，ちゃんと地上から最新のデジタル技術を使って測量した50頁の第13図のような図があるということで，多少岡山大学の宣伝になってしまいました。

造山古墳　安川満2000『造山第2号古墳 付 伝・千足古墳出土遺物』岡山市教育委員会 より



第12図　造山古墳

造山古墳　新納泉・石坂泰士編2006『造山古墳 第1次測量調査報告』岡山大学考古学研究室 より

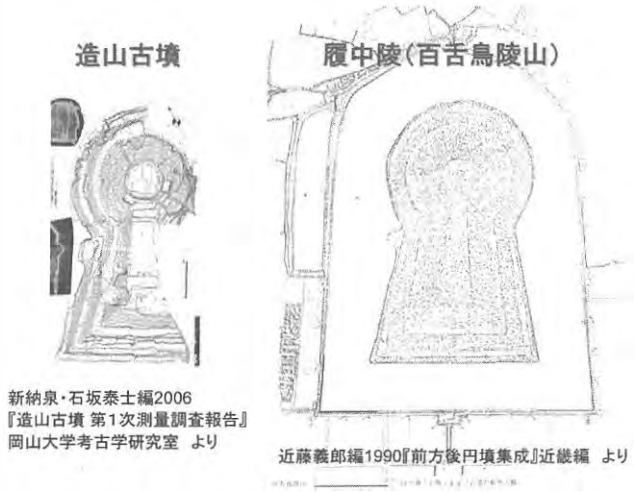


第13図　造山古墳データ

この造山古墳ですが，51頁の第14図の左は，先ほどの図（第13図）をちゃんと縦にしたものですが，右は先ほど少し話を出した仁徳陵のすぐ南側にある，仁徳陵よりも古い履中陵という大王墓です。両者はほぼ同形同大，ちゃんと３段に築かれて，３段目の墳丘のプロポーションがほぼ一致するので，おそらくこれだけの巨大なものをこれだけの類似度で築くためには，共通の設計図があり，そしておそらく両方の古墳の築造に携わる技術者がいたんだろうというように考えています。この造山古墳と履中陵は，どちらが古いのか今議論中ですけども，古墳というのはおそらく10年以上の年月をかけて築くと思われますので，施工期間は重なっているんだろうと思います。

そうしますと技術協力というか，技術者の派遣とか，設計図の交換とか，密接な関係がないとここまで似たものを同じ形に築くことはできないです。４世紀には畿内の古墳と地方の古墳とでこんなことはなかったんですね。

それから埴輪ですね。ここで取上げるのは，形象埴輪のうちでも，蓋形埴輪，蓋は普通に読むとフタですが，キヌガサと呼んでいます。蓋形埴輪というのは，貴人にさしかけるパラソルを象ったものと，貴人の王座の上にある天蓋を象ったものと２つのタイプがありますが，51頁

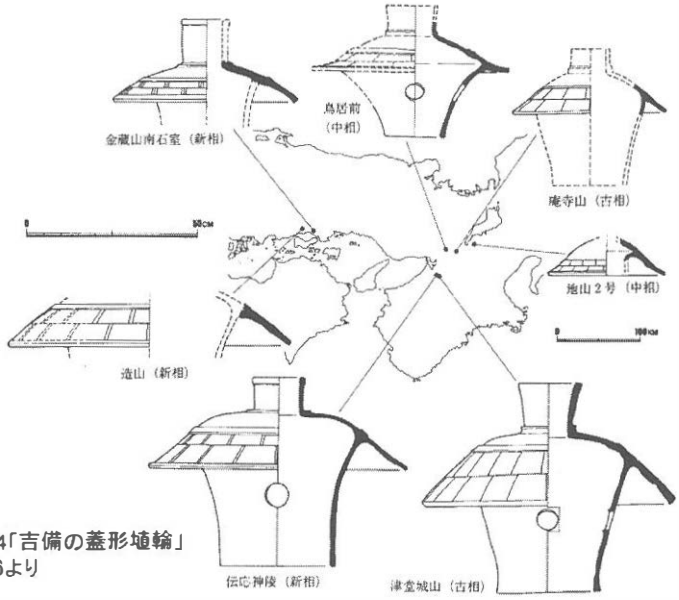


第14図　造山古墳と履中陵（百舌鳥陵山）

（大阪府津堂城山古墳）
藤井寺市教育委員会編
1961『古市古墳群』藤井寺
の遺跡ガイドブックN0.1より

第15図　蓋形埴輪

の第15図はパラソルのタイプです。パラソルのタイプの方が普遍的によく出ます。下の部分は台ですが，上は立ち飾りで，上から見ると十文字形の飾り板が付きます。実は学生時代に蓋形埴輪の研究をしていましたが，実際に粘土で造ってみて，この傘を下の方に向けて粘土の紐ないし帯を何回も貼り付けて，傘を下の方に拡張させて，長く垂れ下がった傘を作っているんですけれども，これがものすごく難しい。51頁の第15図は畿内の蓋形埴輪です。これを作るにはものすごく高度な技術がいるということが分かりました。そこで各地のパラソルタイプのキヌガサ形埴輪を全部集成して調べました。51頁の第16図の右下が，第15図の写真のものです。最大径が70cmぐらいありますから，傘部の垂れ下がりが20cmくらいあると思います。畿内の古市古墳群や百舌鳥古墳群でつくられたものは非常に上手にといいますか，この垂れ下がりがものすごく見事に大きな傘にも付くように仕上げられるのです。しかし畿内からちょっと離れると，同じ畿内

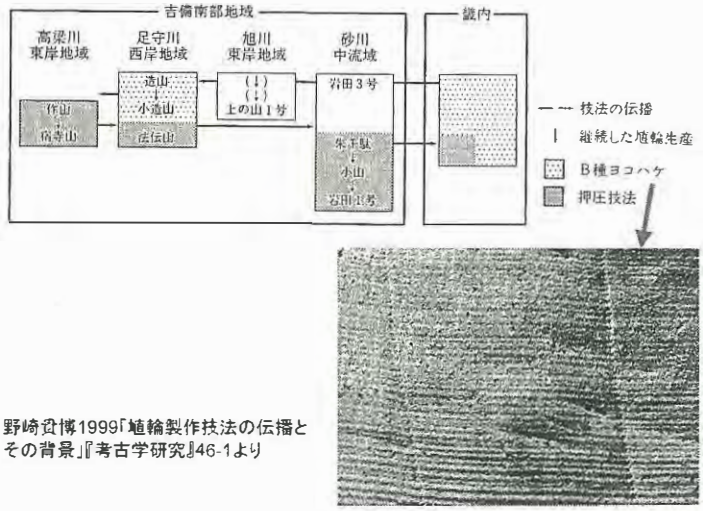


松木武彦1994「吉備の蓋形埴輪」
『古代吉備』16より

第16図　蓋形埴輪の形態

でも山城の方に行くと，51頁の第16図の上部中央の鳥居前古墳のものは，私が調査した古墳ですが，そこのところの技術がうまく伝わっていないのか，非常に短い傘しかつけられないんですね。あるいは全体が小さなものしか作れない。地方の古墳の蓋形埴輪というのは技術が伝道されていない。こんな小さい傘しかできない。

ところがこの造山古墳の蓋形埴輪というのは，古市や百舌鳥と同じ技法で作られているので，おそらく古市や百舌鳥の埴輪の職人が吉備に派遣されて作ったということが明確になってきました。同じことが普通の円筒埴輪，まあ埴輪の90%以上は土管のような形で，お宮の玉垣みたいにずっと墳丘の周りに巡らせていく何の造形もない埴輪で，これを何千本も大きな古墳に立てますけども，その技法についても同じことがあります。



野崎貴博1999「埴輪製作技法の伝播とその背景」『考古学研究』46-1より

第17図　円筒埴輪のB種ヨコハケ技法

私の同僚の埴輪の専門家，岡山大学埋蔵文化財調査センターの助教をしている野崎貴博さんの研究によりますと，52頁の第17図の埴輪の表面の拡大写真をよく見ますと，表面に仕上げの跡が見えます。この筋は仕上げの跡です。これを刷毛目といいますが，刷毛でつけたものではなくて板ですね。板切れというのは年輪があります。年輪は木の硬い部分と軟らかい部分が交互に並んでいますので，粘土で造った埴輪の表面を最後に板切れでなでつけてきれいにすると，だんだん年輪の軟らかい部分がとれてきて，こまかい櫛の歯みたいになるんですね。だからこれはそういう痕跡がついていますが，その刷毛目の施し方が線で残ります。これは板切れをさーっと動かしているんじゃなくて，キュッキュッと動かして止めながら動かす技法（B種ヨコハケ技法）です。実はこれはやってみると簡単そうで難しいですね。この技法がもともと古市や百舌鳥で生み出されて造山古墳にも見られます。逆に吉備で生み出された技法が畿内に行ったりしているんで，埴輪の職人が行き来している。こういうことも分かって来ています。

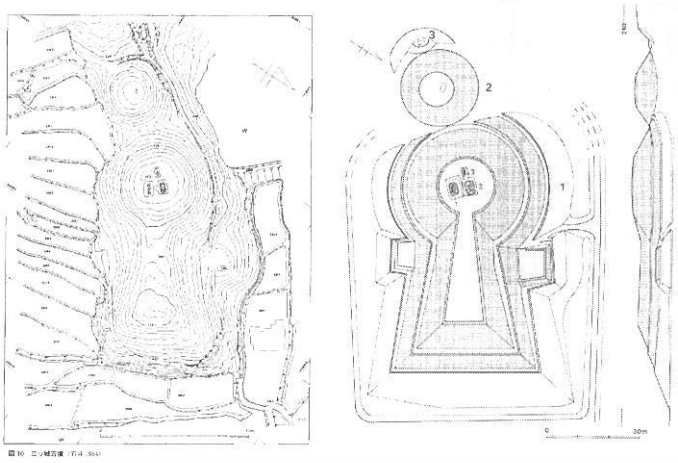
8　三ッ城古墳と畿内の結びつき

それで三ッ城古墳の話になっていくわけですけども，今までの話を少しまとめますと，５世紀になると主要な各地に大型古墳ができる。つまり古墳を築くだけの政治的経済的パワーでいいますと，逆に地方分権化する。地域地域に彼らの代表者の大きな古墳を造っている。けれどもそれは個別ばらばらに完全に分権化したわけではなくて，造山と古市の大王墓との間には，先ほど見たような密接な協力関係が認められるということなんです。それをどのようにとらえるかというのが，５世紀の社会の構造を追求していくうえで重要になっていくわけです。

三ッ城古墳は53頁の第18図のような形ですね。いま整備されて葺石も葺かれ，埴輪も並べられてきれいな姿になっていますが，もともと整備の前はこんな感じで畑のようになっていた。いまこの辺はきれいな公園になっていますけども，実は三ツ城古墳も復元しますと，畿内の大

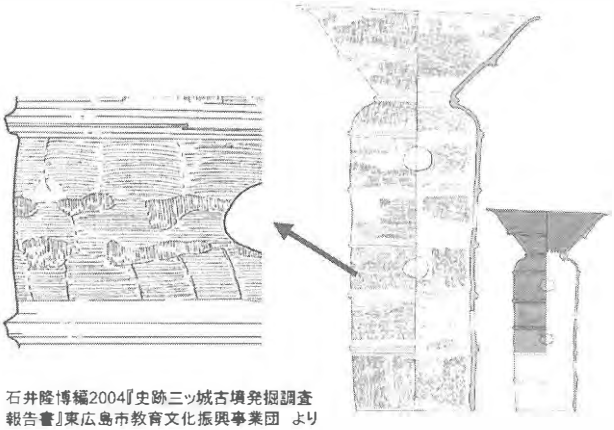
きな古墳と同じように前方部・後円部とも３段に造られています。埴輪をずらっと並べています。周りに数は少ないですけども陪塚があるということで，畿内の様式で造られた安芸の大古墳なんですね。

その埴輪（53頁の第19図）を見ますと，さきほどと同じように畿内で生み出された，工具をキュッキュッと止めていく技法（Ｂ種ヨコハケ技法）が見られるということで，三ッ城の埴輪には明らかに地元で造られているような埴輪もある一方で，畿内の技術が波及して造られた，私はおそらく畿内の工人が来ていたのではないかと思うのですが，こういうような埴輪があるということは，造山ほどではないけれど畿内との結びつきが見られるというような状況があります。



石井隆博1994『史跡三ッ城古墳整備事業報告書』東広島市教育委員会 より

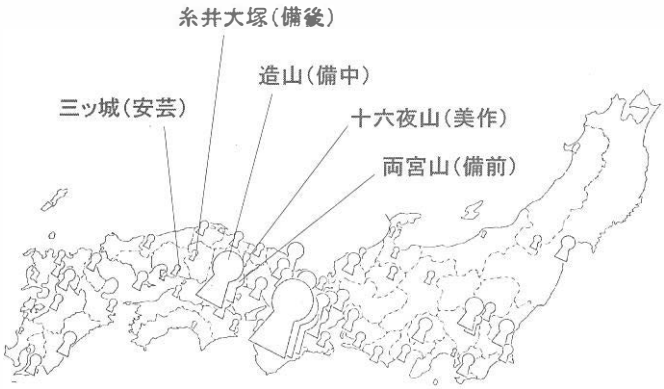
第18図　三ツ城古墳



石井隆博編2004『史跡三ッ城古墳発掘調査報告書』東広島市教育文化振興事業団 より

第19図　三ツ城古墳の円筒埴輪

いま申し上げましたように，４世紀と５世紀の間には非常に大きな古墳の築き方の違いがある。４世紀は各地域で地元のボスが，そこまでいうと言い過ぎなんですが，とりあえず適当に好き勝手に造っているような状況で，ローカルな色合いも濃かった。ところが５世紀になりますと，各地の長を代表する盟主的な長が現れて大古墳を造っていくということです。周防では白鳥，安芸では三ッ城，備後ではおそらく糸井大塚，美作では月の輪から５世紀になりますとどうも津山盆地に移っていて十六夜山があります。



新納泉1989「王と王の交渉」都出比呂志編『古代史復元6 古墳時代の王と民衆』講談社 より

第20図　旧国別最大規模の前方後（方）円墳（新納1989より）

それを地図でまとめたものが53頁の第20図です。これは新納先生が作られたものですが，旧国別最大規模の前方後円墳です。この図は旧国ごとに大きな古墳があるということを表したものではないのですが，先ほどのように周防に白鳥，安芸に三ッ城，備後に糸井大塚，備中には造山と，だいたい旧国

ぐらいの広さの単位ごとに大古墳が築かれるというような状況が５世紀に見られるわけです。私はこれを，４世紀から５世紀に起こった非常に大きな変化ととらえています。それらを地域の主だとしますと，畿内の大王と地域の主との間には密接な関係が出てきている。地域の主というのは，地域で大きな古墳を築くのを認められながらも，畿内の大王と結びついているということです。独立性はあるけれども，背後に何といいますか，全国的なシステムというものも出来始めているということで，これは後の律令国家の旧国につながっていくような政治単位が生まれつつあるような状況だととらえております。

その内実については，これはもう古墳だけのものではなくて，きょう午前中にいろいろお話があったような，鉄生産とか祭祀とかをもう一度こまかく踏まえながら実態を解明していく必要があるということですけれども，きょうのところは４世紀から５世紀への動きを一つのハイライトとしてとらえてみました。

９　大古墳近くに国分寺・国府

最後に６世紀の様子を確認して終わるようにしたいと思います。５世紀に後の旧国の種になるような政治的まとまりというようなものが地方地方に出来てくるという話をしました。だいたい６世紀にもそういう状況が受け継がれておりまして，ただし安芸の場合はちょうど西条の三ッ城が最後の大古墳で，このまま６世紀に突入していき，三ッ城と同じ西条の地域に最初の国分寺や，国府が造られるわけですね。

そして備後の場合は，最終的には福山・府中の地域に国府が造られるのですけども，その時期になりますと三次・庄原あたりの古墳があまり築かれなくなって，福山に二子塚という大きな古墳が築かれるということです。美作の場合は，津山盆地に十六夜山古墳が出現しますけども，この近くに美作の国府が築かれています。備中の場合は造山・作山という，この作山の場合は近くに備中国分寺があります。備中国府の跡ははっきりとは分からないのですけども，どの説をとっても作山からそう遠くないようになります。それから備前の場合は両宮山という古墳があって，両宮山の隣に備前の国分寺があって，ひと山超えたごく近いところに備前の国府がきます。

ですから５世紀には，後の国になるような地域のまとまりが現れて，一時分権化する。しかしながら完全に国がばらばらになったのではなくて，その背後には大和と地方，地方同士の密接な関係が保たれている。これが６世紀・７世紀になるにつれて，徐々に中央にまとめられていくというように，歴史の流れをたどることができるのではないかと思います。

最後に言いたいことは，41頁の第１表で，赤字で示した吉備です。ただ三ッ城は安芸ですけど，安芸と吉備の古墳で全国レベルのものはこれだけだということです。どうも吉備というと岡山中心の話にしてしまうので，私なんかその点について責められるべきですが，ともすれば安芸や備後には大きな古墳がなかったかのような話になってしまうわけです。６段階のところを見ますと，仁徳陵，応神陵の時代ですね。第３位が吉備の作山です。この時期になると西日本からは大きな古墳はあんまりなくなっていきます。そのかなり上位のところに三ッ城古墳が入ってくる。ですから西日本の中では，この安芸の地域は５世紀の中ごろには非常に重要な位置を占めていただろうと思います。

次の５世紀後半の７期になりますと，ニサンザイ，允恭陵あたりが大王墓になり，それに次ぐ位置に吉備の両宮山があります。その下の方にいくと，あまり地方に大きな古墳がない時代

に，糸井大塚が備後を代表する古墳として来ています。特にきょう備後北部の糸井大塚あたりの鉄生産の話がありましたが，安芸や備後はそういうような産業を基軸にして，律令国家に向けて国家の体制が整っていくうえで，きわめて重要な地域ではないかということをこの講演のための仕事から再確認することができたということを最後に申し上げて終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

シンポジウム「古墳時代の暮らしと心」

《コーディネーター》

広島大学大学院教授　　古瀬　清秀さん

《パネラー》

岡山大学大学院教授　　松木　武彦さん

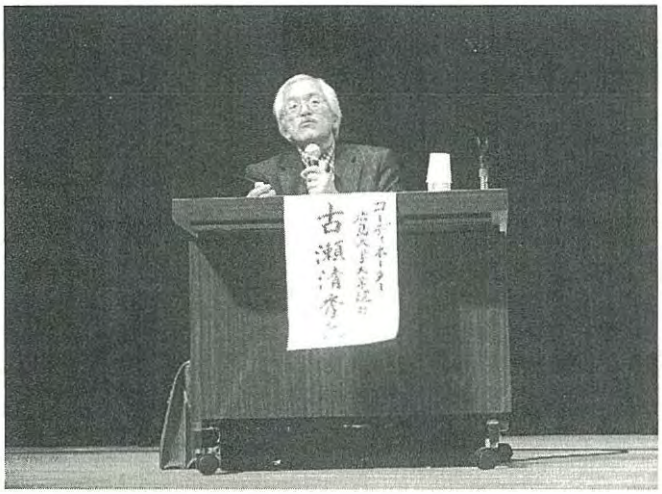
広島県教育事業団　埋蔵文化財調査室

岩本　芳幸・山田　繁樹

梅本　健治・山澤　直樹（司会）

山澤　ただいまから再開いたします。それではシンポジウム「古墳時代の暮らしと心」を始めます。コーディネーターは広島大学大学院の古瀬清秀先生にお願いしています。古瀬先生は東アジアにおける古代の鉄や鉄生産について，技術史的視点から解明し，東アジア全域の鉄文化を体系的に研究されています。また帝釈峡遺跡群の調査に30年近く携わっておられるほか，広島県の古墳にも精通しておられます。パネラーは，講演された松木武彦先生と，研究発表した当埋蔵文化財調査室調査研究員の岩本芳幸，山田繁樹，梅本健治です。それでは古瀬先生，よろしくお願いします。

古瀬　ただいまご紹介いただきました古瀬でございます。皆さんにはきょう一日お集まりいただきましてありがとうございます。広島県埋蔵文化財調査室は毎年「ひろしまの遺跡を語る」を開催しておりまして，だんだんと工夫を凝らして企画してもらい，おいでになる皆さんにも満足していただける内容になっていると思います。



コーディネーター・古瀬さん

例年ですと，その年度に発掘調査した遺跡または遺物等に関して事例報告的にやり，こういうものがございました，議論もしましょうというようなことでした。今年はずいぶん準備していただきまして，研究発表という形でやってみたいという話がございました。きょうは広島の「古墳時代の暮らしと心」というテー

マで，岩本さん，山田さん，梅本さんがそれぞれこれまでに蓄積された資料をもとに，日頃考えておられることを発表したいということでありました。考古学は物が対象で，その物を分析することで人間の歴史を解明していこうという学問です。心の世界のお話が，山田さん，梅本さんの２人からありまして，これは考古学では非常に難しいのですね。

そうした中で，岡山大学の松木先生に今回おいでいただけることになりました。松木先生は認知考古学という新しいアプローチにより，考古学の世界に新風を吹き込んでいただいている先生です。認知というと，物事をどう判断するかという科学分野にあるわけですね。認知心理学というのが有名ですが，人間が全然知らないものをどのように理解していくか，子供が大きくなっていく過程で物事をどのように理解して認知していくか，これを科学的に解明していく，この方法を考古学に応用したわけですね。私たちにとってわけが分からないものを人間の心の働きでどのように解釈していけるのか。そういうふうなことを松木先生は専門でやっておられます。

きょうのシンポジウムは処理しきれないくらい質問が参っておりますけれども，質問の中にきょうの話の本質を突いたものがございますので，質問も含めて話を進めさせていただきたいと思っています。

その中に一つ私に関係するようなことがございまして，最初に少しだけ時間をいただきたいのですけれども，広島県安芸高田市甲田町の広い平野のところ，戦国大名毛利元就の娘婿の宍戸隆家の居城があったところです。そこで昨年，新たに甲立古墳という，墳長が80m近い大きな前方後円墳が見つかったのですね。通常の古墳は平坦なところに築かれ，前方部と後円部の高さの差は数mで，横から見ても分かりやすいのですが，この古墳は山の斜面に築かれていまして，後円部の墳頂と前方部の一番先の高さの差が13mもあります。そこに河原石で葺石を葺いている。墳丘には埴輪が立てられ，しかも前期の後半に位置づけられるものです。造った当時は下から見ると，石の山があったような，そういう風な古墳が見つかりまして，これを発掘調査しています。

発掘調査といっても埋葬施設を掘り下げてということではなくて，正確な大きさ，形を調べるための調査をしています。この12月の初めぐらいまでかかってやったのですが，来年度も引き続いて調査する予定ですので，これもぜひ昨年の成果の一つとして皆さんにご報告しておきたいと思います。

シンポジウムのパネラーのみなさん

松木先生にちょっとお知らせしておきたいのですが，三次に前期古墳がない，といわれてきた。ところが梅本さんがここ数年，宮の本第24号古墳という直径30mの大きな円墳を発掘調査されています。それが三次ではかなり古い。前期の終わり頃ですけれども，西暦でいうと300年代に遡る古墳が見つかりました。埴輪をたくさん使った古墳ですけれども，なぜ三次にこんな古墳があるのだろうとずっと疑問に思っていたのですが，その三次に近いところに非常に大きな，埴輪

をもつ前期の前方後円墳が見つかった。ようやく三次の近くにそういう古墳が出てきて疑問が解けたと感じているのですが，きょうのお話に関係ある三次の古墳を少し調査しているということで，今後も引き続き調査されるそうですので，ぜひ機会を作って見に行ってもらえたらと思います。

さて，きょう言い残したことがいっぱいあろうかと思うのですが，手短に，ほんの数分で岩本さんからお話いただけますか。

岩本　ちょっと時間がなくて，まとめをはしょって話をしましたが，その中で，遺跡から出土した鉄滓の科学分析を行うことが重要だということを強調しておきたいと思います。いろんな遺跡から鉄滓が出土していますが，分析によって，どのような工程でできた鉄滓か，砂鉄を使ったものか鉄鉱石を使ったものかということも分かりますし，砂鉄であればどこから採れた砂鉄か分かる場合があります。

また遺跡単独で考えるのでなく，周囲の遺跡との関係を考えることが重要だということです。遺跡の調査は一部分だけ掘るというのが一般的でして，遺跡全体を調査することはまれですけれども，三次市三良坂町の道ケ曽根遺跡は一つの遺跡だけではなくて周辺の遺跡も含めて調査されています。

またこうした製鉄遺跡というのは，原料の砂鉄，炭の原料となる木材だけでなく，国家体制の確立とも関係します。大化改新（645年）を経て律令国家体制が確立しますけれども，製鉄遺跡はそれともかかわりがあるのだということが説明できたらよかったのですが…。なお道ケ曽根遺跡は備北地域でも南部にありますが，同じく三次市甲奴町の善正平２号遺跡もそうですね。備後国府が府中市にありましたので，交通の関係もあって備北地域の北部ではなく南部に鉄とか鉄器を集積する遺跡がつくられたのではないかと思います。本来はここまで説明する予定だったのですが，十分それが説明できず申し訳ありません。

古瀬　ありがとうございました。続いて山田さん。

山田　時間が10分超過してしまい申し訳ございませんでした。最後のまとめのところですが，石製模造品にしても土製模造品にしても，集落を構成している竪穴住居とか土坑とかの個別の遺構から出てくる場合と，北広島町大朝の岡の段Ｃ地点遺跡のように端っこから出てくる場合，世羅町の宇山遺跡や東広島市の浄福寺遺跡のように単独でそこにある場合，東広島市の胡麻２号遺跡のように性格が分からない場合があり，出土のあり方で性格が変わってくるのではないかということです。宇山遺跡は峠ですし，胡麻２号遺跡は谷，岡の段Ｃ地点遺跡は谷川に面している集落の端っこという立地ですので，祭祀遺跡はそうした環境を踏まえて考える必要があると思います。

シンポジウムの会場のようす

また農耕儀礼にかかわるものかとよく聞かれるのですが，これは松木先生にお聞きできればと思いますが，遺跡の性格を考える場合，明らかに農具が出れば間違いないと思うのですが，石製や土製の模造品を使っているだけで，農耕儀礼が

行われたという考え方でいいのかどうか。

古瀬　その点につきましては，質問も多々来ているようです。後でまたお願いします。それでは梅本さん。

梅本　予定していて飛ばした話が１箇所あります。本筋には影響ないのですが，後半のところで，朝鮮半島南部の人々と倭国とのひんぱんな交流が死後観の変容につながったということの根拠となる話です。交易の話と，朝鮮半島からの渡来人が数次にわたってやってきたという話しかしていなかったですね。どちらかというと半島からやってきたという話がメインでした。

それに対して，日本列島からも半島に出向いていくというと変ですが，働きかけることもあった。そこはいろいろ議論のあるところですが，朝鮮半島南部の伽耶地域を中心に，日本製品と思われるものの一定程度の分布が４世紀から５世紀にかけてみられます。たとえば，楯の飾りとして使われていたのではないかといわれる巴形銅器，それから甲冑，それと交易のところでも言いました碧玉製の装飾品です。もう一つは，百済の南の方の栄山江（ヨンサンガン）流域に，朝鮮半島の他の地域には存在しない前方後円墳が分布します。このように朝鮮半島南部にも倭国の人々の足跡がみられるようです。

それと広島県に20例ほどある土器副葬の埋葬施設の話のときに，実は須恵器があまり割れていない状態で出土することが多いと言いました。これらの古墳の埋葬施設は，須恵器以外の副葬品があまりないのです。ただ20例のうち７例の埋葬施設で刀子が出ています。須恵器はいずれも棺外ですが，これらの刀子はどちらかといえば棺の中，死者の近くの頭のあたりとか，足のあたりとかに入れていたと思われます。そういう刀子が半数近く出ている。たかが刀子ではありません。刀子は古墳時代において何らかの祭祀的な意味合いがあるようです。今回はそこを突き止める途中段階での発表になってしまいました。

これは山田さんの話ともかかわりがありますが，石製模造品による祭祀は４世紀後半から５世紀にかけて盛んに行われます。６世紀になると完全にはストップしませんが，少なくなる。この石製模造品というのは，いろんなものを主に滑石で模造しているんですね。古墳の祭祀を石製模造品で行うときに，実はその中心になるのは刀子の模造品なのです。４世紀末から５世紀代です。

そういう点が一つと，鉄製の刀子を古墳の埋葬施設に納めるときに，他に鎌などのいわゆる農工具に，けっこう布の跡がついていることがあります。要するに布に包まれて出ていることがけっこうある。ということは，かなり大事に使われていて，貴重品というか，何らかの祭祀的な意味合いをもたせて葬られているのではないかと思います。古墳の副葬品としての刀子をもう少し調べてみたかったのですが，時間がありませんでした。

それともう一つ，４世紀以前の日本における埋葬の歴史にもう少し踏み込んで話したかったのですが，なかなか難しくて…。旧石器時代については明確な墓が出ていないのでよく分かりません。ヨーロッパではネアンデルタール人が最初に墓を造ったのではないかといわれていますけれども，日本では旧石器時代の墓ははっきり分かりません。縄文時代の最初のところから明確な墓が出てくるようです。日本人がどのように埋葬を行ってきたかということをもう少し踏み込んで話したかったのですが，その辺がかなえられませんでした。

古瀬　ありがとうございました。それではいろいろ話し合いをしてもらおうと思っているのですが，私が進めたいと思っている本質的な部分はたくさんの質問の中に入っておりますので，質問票から入って行きたいと思います。岩本さん，手短に話していただければいいのですが，

鉄鉱石と砂鉄を使って鉄製錬を行っている。鉄鉱石から砂鉄という大きな流れがあるけれども，技術的な変遷をみたときにどのようなことが考えられそうですか。

岩本　ちょっと技術的なことは分かりにくいのですけれど，５世紀までは朝鮮半島から鉄鋌など鉄素材が入ってきていたわけですけど，６世紀に朝鮮半島が政情不安定になりました。鉄素材をなかなか朝鮮半島から得ることができなくなり，国内で確保する必要があるということで，６世紀後半あたりから本格的な製鉄が始まったと考えられますけれども，やはりそこには朝鮮半島からやってきた渡来人が大きくかかわっているのではないかと思います。

今のところ朝鮮半島ではこの時代，砂鉄を使った製鉄というのは確認されていないということがあります。渡来人によって伝えられた製鉄というのは，鉄鉱石を使った製鉄というように考えられますけれども，しかしこの鉄鉱石にも限りがありますので，鉄鉱石を掘りつくした後は砂鉄を使うようになったと考えられます，その砂鉄を使った製鉄には，出雲の人たちがかかわっていた可能性が非常に高いのではないか，それは午前中に説明しましたように，製鉄を行っていた遺跡の近くに横穴墓がある。それは自然の流れでつくられたのではなくて，製鉄，鉄器生産と関係があるのではないかというふうに考えられます。

古瀬　そうしたときに道ケ曽根遺跡，これは製鉄，鉄器生産の専業集落ですね，鉄生産そのものは見つかっていないけれども，製鉄した粗鉄（あらかね）を持ち込んで，鍛冶屋さんの材料にして，そこで鉄器生産しているということでした。中国山地の鉄づくりで原料の鉄鉱石は，採掘した場所やどのように採掘したかについて考古学的に分かっているのでしょうか。

岩本　それは残念ながら分かっておりません。そんなに遠くから鉄鉱石を運んだとは考えられないので，中国山地で鉄鉱石が産出していたのだろうと考えられます。それから岡山県になりますけれども，６世紀後半の千引カナクロ谷製鉄遺跡とか，７世紀から８世紀になりますが，やはり総社市で62基という非常にたくさんの製鉄炉が発見された遺跡もありまして，この岡山県南部（吉備南部）では鉄鉱石を使った製鉄が広く行われていますので，やはり総社周辺で産出していた可能性があります。しかし総社周辺で鉄鉱石を使った製鉄が行われた後，製鉄の中心は中国山地に移って，砂鉄を中心とした製鉄に変わっていくのではないかと考えています。

古瀬　道ケ曽根遺跡というのはそういう鉄に関係する専業集落でありながら，８世紀の奈良時代に入るころに急激に衰退していく。これはどういう理由が考えられるのだろうかとの質問があるのですが，これは後でみなさんの議論の材料にしたいと思います。

同じように広島県北部で製鉄関連の遺跡と横穴墓ですね。山の斜面に掘る横穴墓は日本海側に多いから，鉄と横穴墓は関係が大きいだろうという面白い指摘なのですが，それがすぐに出雲と結びつくのだろうかということも質問にあります。製鉄をする場合，山間部の村が臨海地域より有利だった，それは原料獲得に大きな原因があるといわれましたが，そのほかに何か要因があったと考えておられますか。

岩本　他には要因はなかったと考えています。鉄の原料と，炭の原料となる木が基本になりまして，今でしたら沿岸部は開発により森林はありませんが，古墳時代後期あたりには森林はわりとあったと考えられるので，総社市あたりでは鉄鉱石を使った製鉄が盛んだったのではないかと思います。

古瀬　それから，俗に八つ目うなぎといっていますが，炭窯について伺います。横口付きの炭窯は太田川上流域では見つかっているのでしょうか。

岩本　今のところ太田川上流域では見つかっていないと思います。やはり製鉄と関係あると思

いますので，６世紀後半以降，製鉄が盛んになった江の川流域とか，高梁川流域で見つかっています。

古瀬　これは朝鮮半島が起源だと思いますし，実は朝鮮半島では日本の古墳時代前期，４世紀の頃から，こういうような焚口と煙出しのほかに横に穴が開いている炭窯がある。日本の場合も奈良・平安時代くらいまで残っているようです。太田川上流域ではまだ古い段階の製鉄遺跡は見つかっていないですね。

岩本　中世には豊平町（今の山県郡北広島町）で製鉄が盛んでして，豊平町では中世の製鉄炉が200基近く見つかっているということですから，この頃の炭窯はたくさん造られています。

古瀬　道ケ曽根遺跡の発表のときに，硯がいくつも出たから役所があったという話だったと思いますが，あんな急傾斜地であり，少し山に入ったような所に役所が存在する例はあるのでしょうか。

岩本　他の都道府県のことは分かりませんけれども，広島県内では急斜面に役所をつくることはなかったと思います。道ケ曽根遺跡ですが，硯がたくさん出土しており，当時文字が書ける人は限られていたということがありますので，一般的な集落ではなくて役所的な性格をもっていたと言いましたが，完全な役所ではないというように考えられます。役所としましては，三次市の下本谷遺跡，これは三次郡の郡衙（ぐんが）があった遺跡ですけれども，下本谷遺跡を見ましても丘陵上に造っていますが，急斜面に造るのではなく，平坦面を利用して造っていますので，役所は急傾斜地には造っていないと思います。

古瀬　硯を伴う遺構はいつごろのものですか。

岩本　７世紀後半から８世紀の可能性があると思っています。

古瀬　奈良の平城京で，三上郡いまの庄原市で作った鉄が税で納められた記述のある木簡が出ていますが，もっと早くから広島県北部で調が集められていたということが道ヶ曽根遺跡で確認できるというか，可能性の材料にできるのでしょうか。役所でなくてもそれに近い集落というか，ここでまとめて役所に出す集落という性格を考えた方がいいのでしょうか。

岩本　なかなか確証は得られないわけですけれども，墨を使って記録していたということがありますし，大規模な鍛冶関係の集落でして，周りから鉄を集めて，それを加工したり製品にしたりして，その集落だけでは使いきれないと思いますので，出荷するというか，そういう性格を持っていたと思います。

古瀬　次に山田さんにお伺いします。説明の中で手づくね土器というのがありました。これはどんな祭祀によく使われたのだろうか，という質問がきています。何か水辺に関係するのではないかと思っていたのだけれども，データを集められたりする中で，手づくね土器はどういう祭祀の場合に多いのだろうか知りたい，ということです。

山田　住居跡から他のものを伴わずに出てくる場合もありますが，祭祀遺跡とか祭祀遺構と呼ばれるものの中には，手づくね土器はもちろん一緒に入っています。手づくね土器は水に関係する祭祀だけに使われたのではなく，祭祀を行う道具の中の一つとして使われたのではないかと考えられます。

古瀬　丘陵地や住宅地から出て来るので，水辺には関係あるものではないだろうということですね。それから広島県内の祭祀遺跡で加茂岩倉遺跡（島根県）のようなもの，あのように大きな岩があって，それを神の居つくところとしてお祭りした遺跡はありますか。

山田　今回こういったものを集めたのは，古墳時代の遺跡，集落跡から出てきたものを中心に

したわけで，それ以外に広島市の木の宗山，ああいう大きな山の中腹に銅剣とか銅鐸が一緒に出たりしています。時代はもう少し新しくなりますが，昔でいうと大和町か久井町で遺跡の調査をしたときに，山のてっぺんに大きな石がたくさんあるのですが，このパネルの倍くらいの大きい石の下に隙間があって，その下に奈良時代ぐらいの須恵器が重ねて置いてある状態の調査をしたことがあります。それ以外は磐座（いわくら）のようなものはないと思います。

古瀬　私はいま宮島の考古学的調査をしていまして，弥山の頂上には巨岩が林立しているのですが，あのあたりに奈良時代・平安時代の須恵器などの遺物が点々と見つかることが分かってきました。また最近，中腹の方に６世紀段階の須恵器が大きな岩の周りから出てくることが分かってきたのです。宮島の祭祀が，少なくとも古墳時代にさかのぼるということが分かってきまして，磐座に近いようなものも見つかっています。他府県には祭祀遺跡の磐座があるようですが，広島ではあまり数がないということですね。今回作られたデータですけれども，住居跡出土といっても何軒あって，そのうち何軒から出たのか，１箇所から出るのと全住居跡から出るのとでは意味合いが違ってきます。どこからいくつ出たというデータはありますか。

山田　ほとんどが１軒からです。ただ例外的なのが三次市三良坂町の油免遺跡です。同じ中期ですが，３軒の住居からそれぞれ小玉，あるいは小玉と勾玉が出ています。

古瀬　そういう５世紀・６世紀段階の祭祀遺物を出すのは，複数の住居があっても１軒の場合が多いということですね。それが特に建て方が違うとか，後の神社に相当するものとか，そういうものではなく，ごく普通の住居ですね。

山田　そうですね。

古瀬　山田さん，祭祀遺跡から出土するものはなぜ模造品なのか，なぜ小さいのでしょうか。

山田　たとえば剣形石製品とか，勾玉とか，有孔円板とか代表的産物があり，本物がある。５世紀終わりからこういう製品が出始めているわけで，集落では模したものを使っています。集落から本物が出てくるのはごくまれです。本物の代用で使ったのだと思います。模しているから本物と同じ大きさでなくてもよく，小さいと早く作ることができます。

古瀬　それから遺跡の使用回数について。農耕祭祀の可能性があるといわれたが，農耕祭祀であれば毎年の祭りとか，旱魃（かんばつ）とか，そういったときに同じ場所でやるとすれば複数回になり，遺物も多いのだろうが，今回山田さんが示されたものは，１回限りと考えた方がいい量ですね，それでも農耕祭祀といえるのだろうか。それから瀬戸内海の遺跡で榎迫遺跡が挙げられているが，包含層出土というのは具体的にどんな状態の地層なのか，また製塩土器というのはどんなものだろうかという質問があります。

山田　包含層というのは，表土があり，その下のふかふかの層があり，山の斜面でいうと土器が流れて堆積している層があります。遺物が含まれている層を包含層と呼んでいます。製塩土器というのは弥生時代からあるのですが，ワイングラスを半分くらいにした形で，厚さは２㎜とか薄い焼き物で土器の表面にギザギザがついています。山間部で出る製塩土器は実際にそれを使って塩を作ったのではなく，焼けていないので，それに入れて流通に使ったのではないかと考えていいと思います。

古瀬　榎迫遺跡の時代は分かりますか。

山田　時代は明記してありません。

古瀬　製塩土器は時代によってタイプが違うので時代が分かるのですが，どうでしょうか。それから岩本さんに三原市の小丸遺跡についての質問です。

岩本　小丸遺跡はかつて弥生時代の製鉄炉ということで報道されたことがあるのですが，最近の研究では，弥生時代のものではなく７世紀の可能性が高いということです。

古瀬　ここでは弥生時代終わり頃の土器が，小さい破片ですが，炉の周りから何点か出ています。だいたいこういう生産遺跡では土器が出てこないので時代を決めにくいのですが，小丸遺跡というのは通常の製鉄炉と違って，岩本さんの映像に道ヶ曽根遺跡の鍛冶炉がありましたが，ああいうお椀のような半球形タイプのもので一見すると古そうなのですね。出てきた土器から弥生時代の製鉄炉だろうということで非常に注目されました。

年代を決めるもう一つの理化学的な方法で放射性炭素年代測定法というのがあります。ここでも年代測定しましたが，特定できるデータは得られていないので，決着がついたかどうかはっきりしていないのですね。私は自己消費という程度の鉄づくりであれば，古くてもいいと思っているのですが。先ほど岩本さんもおっしゃったように，日本は昔から危機管理能力が低くて，自前の鉄をつくろうと思えばつくれた，それだけの技術をもっていたのですが，やれていない。

私ども製鉄の実験をすると，炭や原料を調達しなければならない，1000度以上の温度を長時間にわたって維持しなければいけない，保温装置や除湿も必要です。送風装置も必要で大変なのですね。そうすると朝鮮半島の南の方から出来た鉄を輸入した方がコストパフォーマンス的にも有利で，長い間それに委ねていると，西暦532年，562年と続いて，窓口だった伽耶が滅亡してしまいます。窓口をなくしてしまうものですから，慌てて自分たちで鉄づくりを始める。吉備の千引カナクロ谷遺跡が今のところ一番古いもので，６世紀の中頃のものですね。それ以前につくろうと思えばつくれたのですが，ものすごく手間暇かかるので，大掛かりなものはしていなかった。小丸遺跡もそういうものであってもよかった。でもかなりな範囲に流通に乗せて鉄を動かそうと思うと，６世紀段階まで待たないといけない。小丸遺跡の位置づけには困っています。岩本さんのおっしゃるところが本当かもしれません。

それからこれは山田さんかもしれませんが，祭祀など必ず何らかの意味を探るのはなぜなのでしょうか。古代の人が遊びや娯楽で作った土製品でもいいと思うのですが。これはその通りです。私たちはおそらく，松木先生も発掘現場へ行くとそうなのだと思うのですが，わけが分からないものが出てくると，考古学をやっている者は，これは宗教的なものか祭祀にかかわるものではないかと，一旦逃げるのですね。逃げる道の一つが祭祀なのです。

だから遊びや娯楽で作った土人形があってもいいのですが，それが広島のある地方で１個２個出てくれば子供の手慰みだったのかもしれないのですが，全国各地で共通した遺跡，遺構，出土状況というのが重なってきますと，そこから，どういう思いでここに子供のおもちゃのようなものを残したのだろうというふうに類推していくと，祭りを行ったものだろうと判断するわけです。この質問は私たちの世界にきつい一言をいただいたと思います。

それから岩本さんが製鉄遺跡からよく製塩土器が出てくると話されましたね。製塩土器は海岸に行ったとき砂浜を見ていただきたいのです。煎餅のようなかわらけがあると製塩土器の可能性が高いわけです。岡山県の牛窓湾に師楽（しらく）というところがあります。このあたりで最初に確認され，師楽式土器といわれていました。亡くなられた岡山大学の近藤義郎先生と，広島県の府中高校の豊元国先生が1950年代の早い時期に，これは何だろうかということでともに研究を進め，いろいろ実験なんかもして，これは塩水を濃縮したものを熱によって蒸発させて塩を作る土器だと解明しました。出土したものに必ず何らかの意味をつけるのが私たち

の仕事ですので，祭祀遺物にしても，そういう研究の蓄積の中でわかってきたものです。

岩本　当時，塩は貴重なものでして，それを手に入れるのはなかなか大変でした。中国山地の備北地域で鉄を生産しており，鉄器があったからこそ塩を手に入れることができたといえると思います。中国山地と沿岸部と交易があったといわれていますが，鍛冶遺跡，製鉄遺跡から製塩土器が出てくるのはそのためだけではありません。塩は一般的には調味料として使うことを思い浮かべますが，食生活に使うだけでなく，鉄や鉄器を作るときに祭祀をやっています。製鉄の成功と安全を祈願して祭祀をする。そのときに塩を清めとして使ったのではないかと思います。近世におきましても金屋子神が祭られて，神社とか地蔵とかが造られています。

また可能性の一つですが，昨年度は猛暑が続いたわけですが，製鉄や鍛冶は暑いなかでの仕事になりますので，もしかしたら熱中症対策というか塩分補給，塩をなめながら作業していた可能性もあるわけですが，確証はありません。

古瀬　おそらく脱水症状を防ぐためと，もう一つはですね。越前鍛冶で有名なのですが，福井県の武生という町で刃物を作っていますが，そこでは加熱した鉄と鉄をくっつけるときに鍛接というのですが，武生では独自に鍛接剤を作っていて，その中で食塩を使っている。今は溶接とか，鍛冶屋さんはホウ砂という，温度が低くてもくっつく薬を持っていますが，古墳時代はなかったのです。ひょっとするとそういう鍛冶屋さん，製鉄遺跡でも鍛冶屋さんはいますので，作業のときに塩を使っている可能性もあります。

古瀬　松木先生にたくさん質問が来ています。松木先生にお話を聞く機会は，広島県では初めてだと思います。

松木　まず三次・庄原に前期古墳が少ない点につきましては，今後の調査で増えていく可能性はあります。しかし，岡山県の造山，作山あたりは，他の地域に比べて明らかに少ないので，前期にその地域にふさわしい古墳が造られなかったのは事実ですね。その説明として今日は大和（おおやまと）に造ったのだとやや大胆なことを言ったのですが。

５世紀に大型古墳が各地に造られるのは分権化じゃないのかということに対して，本当なのかという質問が来ています。そのことについて若干補足なのですが，５世紀に旧国単位で大きな古墳が出てくるのは，産業基盤が整ってくるという非常に大きな経済的要因があるのです。鉄器生産，窯業生産，地域によっては馬匹（ばひつ）生産。馬は耕すことにも使えるし，運搬にも使えるし，生産力はアップします。関東では農業生産と大型古墳が関係するという説が最近出ています。

そういう地元の殖産興業ということが５世紀にパッと出てくる。そこが味噌であって，備後北部の場合，これは明らかに鉄だと思います。鉄を機軸とした地場産業の確立というものが５世紀にある。当初はそれぞれを代表する首長のもとに，近くの首長が集まって地場産業をつくり，産業を振興させていくわけです。これが６世紀，７世紀と経つうちに，少しずつ中央政権にコントロールされていく。この過程が古墳にどのように反映されているのかということは，まだ課題だと思います。

最後に質問にお答えしながら補足をしておきます。先ほどから祭祀遺物，玩具の認定の話，それから祭祀が農業祭祀なのか，何の祭祀なのかという話，その認定はなかなか難しい話なのですね。祭祀遺物というとピンと来るものがなかなかないかもしれませんが，お札というものがあります。お札は私の実家では台所にもあるしトイレにもあります。台所にはお竈（くど）の神様がいるし，いろんなところにお札が貼ってあって，これは台所からお札がたくさん出て

くるから台所祭祀というものではありません。

祭祀遺物というのは，本当は多くがオールマイティであって，手づくね土器もそうだし，滑石製の玉もそうだし，いろんなところでその状況に応じて使えるものだというものですので，何祭祀のものがこれ，というのが認定は難しいんじゃなかろうかと。何のための祭祀遺物かということは，認知考古学をやっていたら分かるんじゃないかとよく言われるんだけど，認知考古学では分からないんですね。

認知考古学ではどんなことをするかというと，祭祀遺物を見ますと，粗末にたくさん作られるものと，華麗に大きく少数だけ作られるものがあったりする。パターンを見出して，どこから出土するかデータを集めて，これは日本だけでなく世界中集めて，手づくね土器はその典型ですが，世界的に物が粗末に小さくたくさん作られるものは，人の心にとってどんな意味があるのか。社会にとって普遍的な意味があるのか，調べて解きます。そして華麗に大きく作られるものはどんな場所で作られているのか，全部調べていきます。そして日本の弥生・古墳時代の遺跡から出てきた祭祀遺物というのはどんなものだったのかという位置づけをする。これが認知考古学の方法なのです。

ですから玩具について言えば，昔の玩具と確実に分かっているものは，ぬいぐるみにせよ，金魚の形をした水鉄砲にせよ，いろんな形をしているのだが色彩の共通性があるとか，デフォルメされているとか，絵でもそうですが，どんな形や色をしていても認知特性として一つの基準があるのです。考古資料にそういうものを見出していって，これは玩具ではないが，玩具の可能性が高い一群だと特定していくのが認知考古学ですが，なかなか実際には難しくて仕事は進んでいません。今日は興味深い話を午前中に聞いたので，これを刺激にして今後やってみようかなと思います。

４世紀に備後の首長とか吉備南部の首長とかが大和に古墳をなぜ築くことができたのかということですが，これは別に大和を支配しに行ったわけではなくて，大和には纒向という当時の都市がありますね。３世紀から４世紀というのは，５世紀に地場産業が出てくるのとは別の経済だと思うのです。

纒向に行くといろんな地域の土器が出てきます。北陸では玉，玉器を生産し，北部九州では高度な鉄器を生産するみたいな，原料が陸揚げされたり，取れたりするところで物づくりがされていて，それが遠距離交通のルートに乗って，吉備でいうと津寺という，そういう交易的都市の拠点に乗ってきます。だから交易市場都市みたいなところに出向いて物資を調達するのが，３世紀から４世紀の少なくとも一部の長の仕事だったと思います。おそらく纒向の出張首長みたいなのがいて，そういう人たちが纒向を共同運営したりして，死んでそこに葬られたということがあるのではないかと思います。

それが５世紀になると，市場流通経済から地場経済に変化することが，これは鉄器工房や須恵器窯の分布で，だいぶんトレースできるようになりました。そういう地場産業の確立と，今日お話しした旧国ごとに出てくる大型古墳の確立が，おそらく関係するのだろうということで，４世紀から５世紀への今日お話しした古墳の築かれ方の変化というのは，そういう産業構造，経済構造の変化に根ざしているという考えなのです。

三ッ城古墳の上側に小さくくっついている円墳は，さきほど古瀬先生に教えていただいたのですが，やはり質問でもありますが，前方後円墳よりは早く築かれています。ただし古市や百舌鳥の陪塚の中にも，おそらく主墳の主の前方後円墳のはべる位置に葬られるべき人が，早く

亡くなる場合があったと思うのですね。ですから陪塚の方が主墳より古いということはあってもおかしくないだろうと思います。

少し弥生時代にさかのぼった問題で塩町式土器の話が出てこなかったとあります。塩町式土器はたぶん紀元前１世紀から紀元前後の土器だと思います。今日の話はそれより300年以上後の話だったので出てこなかったのですけど，弥生時代にあれだけ華麗な独特の土器を出す地域というのは，古墳時代になっても頑張っているというか，文化的な中枢に典型的な土器，あの北部九州のスタイリッシュな土器，それから畿内の華麗な文様のついた土器，塩町のあの繁褥（はんじょく）なほど飾る土器，あれはなんとなく文化的な中心がそこに形成されたからだと思います。このへんも認知考古学の課題ですけれども。塩町式土器というのは私も好きな土器です。私はどちらかというとごちゃごちゃしたやつが好きです。

そういうところに四隅突出墓とか佐田峠墳墓のようなのが現れてきますが，弥生時代にやはりそこまでの，まあいわば中枢があった地域に，なぜ大きな前期古墳が現れないのか。今後考えていくか，あるいはもっと野山を歩き回ると，もっと大きなやつが発見されるかもしれませんけれども，今後の課題というかロマンになろうかと思います。

古瀬　それでは梅本さんにお願いしますが，梅本さんの土器の副葬がどこまで死後観を表現するのかといった質問があります。あの世で生活する時に食器もなければならないということが一番考えられるのですけれども，もう少し古い時期から，土師器が梅本さんのいうＡ類型はなくてもＢとかＣとかＤの形では出てくる場合がある。梅本さんのお考えを聞かせていただいた上で，松木先生からみるとどういうところに行き着くのかお願いしたいと思います。

梅本　今日お話ししたような形で，須恵器を副葬し始めてからも土師器が混じっていることもあります。また土師器だけの副葬というのもあると思います。この須恵器は死者が死後の世界で生活していくために使う，主には食器というように考えています。それと須恵器といいましても，一覧表を見ていただくとお分かりになると思いますけれども，杯というお皿が深くなったような器があるのですが，その杯の蓋と身がセットになった出土例が大半を占めています。それ以外の器形はあまりありません。32頁の第１表に広島県の土器副葬の一覧表を挙げているのですが，ほとんどが杯蓋・杯身の一対のセットが基本です。須恵器でもいろんな器種が入れられるわけではなく，杯がほとんどです。

確証はないのですが，須恵器副葬が出てくる時期というのは，日本に須恵器の焼成技術が伝わってちょっと後ですね。須恵器の焼成技術が伝わったときに渡来人が日本列島にやって来ているわけです。そのあたりも関係があるのではないかと思うのです。

それから４世紀以前の墓に土器が入っていることはあります。例は少ないのですが，それは弥生土器だったり，縄文土器だったりするわけですけれども，器形的に壺とか甕で，それは容器です。割れていたり，あるいは意図的に割っているのかもしれませんが，そういう入れられ方だったりします。これらは，死者が死後の生活で使うために入れたものではなく，古墳で埋葬に伴って行われる儀礼のためのものと考えています。つまり，埋葬儀礼のときに使ったものとか，そのときに使うものを入れていた容器であったりしたのではないかと考えています。

古瀬　杯，これは蓋のついたお椀のようなものですね，これが食器として象徴的にあの世での生活を維持できるようにいれているというのが梅本さんのお考えです。松木先生，心の科学からみるといかがでしょうか。

松木　梅本さんの仮説は非常に興味深くて，おそらく最初はそういう意味があった可能性は，

これは認知考古学ではなくて私の推測なのですが，あっていいのではないかと思います。ただこういう葬送儀礼にかかわるようなことはすぐに当初の意味が忘れられて，パターン化されて，不規則になっていくという特殊性が常について回ります。最初は，あの世でもご飯を食べろよという気持ちで入れたものであったのかもしれませんが，何十年も何百年もたって，海も渡りますと，単なる規則になっていた可能性もあるので，その点は無視できないのかなと思います。

岡山では6世紀の横穴式石室をもつ古墳から，須恵器がたくさん出てきます。横穴式石室が出ても土坑墓みたいな簡単な竪穴系の埋葬施設なんかもけっこうあるのですが，そういうものには小型の杯類が入れられています。提瓶だの横瓶だの平瓶だの大型の水筒のような器種は横穴式石室から出てくるので，たぶんランクによって，このランクだとこれを入れるというみたいな，なんとなく規則があったような気がします。

私も数年前に親父が亡くなって葬式を出したとき，50万円だとこれがこうあって，70万円だとこうなります，100万円だとこうなりますというものを見せられたことがあって，それは極端ですが，それに近いことがあったかもしれないなと思います。

ただきょう梅本さんが土器副葬の意味を追求されたのは，これは非常に重要なことで，横穴式石室の採用に先行してあるということは，今まで事実としては認識されていたのですけど，その意味がちゃんと追求されてこなかったんですね。岡山では津山盆地で早くに土器副葬，須恵器副葬が始まります。ですから横穴式石室になんでも文化の変化，思想の変化を一元化しているふしがあるのですけれども，きょうの梅本さんの研究発表で，そういうのが段階的に生活の中から来ているんだということが浮き彫りになって非常に面白かったと思います。

古瀬　そういうことで梅本さん，山田さん，岩本さんが発表されたところは大変革期に当たるのですね。5世紀段階というのは，それまでの古墳を見ますと，鏡，玉，剣といった威信財，これを持っていればそれだけで権威，権力の象徴になる。一番身近なところでは，今もテレビでありますが，これが目に入らぬか，え～ぃ，控えおろう，ですね。そういうものがお墓に入っています。5世紀というのが大きな境になって，古墳が家族のためのものに変わっていく。そうしたときに梅本さんの言われるような土器副葬というのが変化していく。私もものすごく興味深いお話だと思っていますので，これはぜひ論文にしていただいて，松木先生も言われたように，多くの研究者の方にも一度聞いてみる必要があるかなと思っています。

もう一点，出雲と鉄と横穴墓，これもやってみたかったのですが，時間もございませんので宿題にせざるを得ないと思います。ただ出雲といっても，出雲の中枢部は出雲市近辺です。出雲南部は山間部で，三次・庄原は今は広島県ですけれども，同様に山間にあります。先ほどの塩町式土器は南に下らず北に展開する。もともと日本海文化圏なのですね。ですからこれが出雲だ，これが備北だというのではなくて，行き来は十分にあって情報も行き来するということで，私はあまりこまかなことは考えなくても，人間とものは自由にいろいろ動き，同じ文化圏なのだろうと思っています。

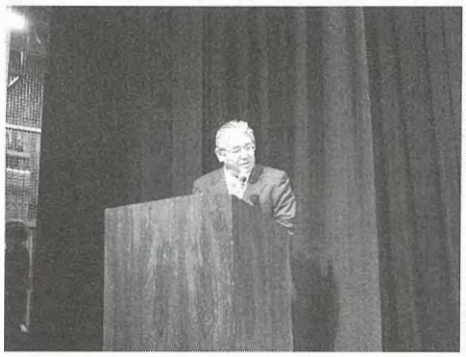
今年は少し趣向を変えて，テーマを一本に絞らなかったために「暮らし」本来のお話ができませんでしたが，「心」は松木先生にいろんなお話を伺ったので大正解だったと思います。祭祀と死後の世界という，これもみなさん非常に興味のあるテーマに真正面から取り組むこともできました。もう少し議論ができればよかったのですが，まとまりがつかないところで終わりになってしまって申し訳ありません。これでシンポジウムを閉じさせていただきたいと思いま

す。きょうはここに出ている人のほかに袖の方にスタッフがたくさん控えておりまして，このシンポジウムを運営していただいた。今後とも広島県埋蔵文化財調査室をもっともっと身近なものに感じていただいて，この前の宿題をもうちょっと聞かせてほしい，とかいう要望も出していただければいいと思っています。スタッフのみなさん，発表していただいたみなさん，会場のみなさん，ありがとうございました。

閉会あいさつ

財団法人広島県教育事業団
埋蔵文化財調査室長

植田　千佳穂



閉会にあたり一言ごあいさつを申し上げます。本日はお忙しい中を基調講演の講師とシンポジウムのパネラーを務めていただきました松木先生，シンポジウムのコーディネーターを務めていただきました古瀬先生には，準備段階からご指導ご協力いただきまして誠にありがとうございました。このように盛大な会を開催することができ，関係者一同，感謝しております。

今回は昨年までと違い，発掘調査の報告ではなく，研究発表とシンポジウムを取り入れた会とさせていただきました。新春ですので多少冒険・挑戦した感はあるのですが，県内で数多くの発掘調査を担当させていただいておりますので，少しでも解明できた歴史を皆さまに提供させていただく役割もあると思います。今回はそのよい機会になったのではないかと思います。

最後になりましたが，本日は早朝より長時間ご清聴いただきました皆さまに感謝申し上げ，閉会のごあいさつに代えさせていただきたいと思います。今後ともご支援ご協力とともに，こうした会へのご参加をよろしくお願いいたします。

平成23年１月８日

企画・運営スタッフ

総括（総合調整）……山田穂積（理事長）・植田千佳穂（室長）
指導（企画指導）……古瀬清秀（指導委員）
全体運営（企画・運営）……後藤研一（調査研究嘱託員）・尾崎光伸（調査研究員）
報告（研究発表）……梅本健治（主任調査研究員）・岩本芳幸（主任調査研究員）
山田繁樹（調査研究員）
進行（司会・進行管理）……山澤直樹（調査研究員）・後藤研一
会場運営（誘導・映像・記録）…河村靖宏（調査研究員）・川崎真二（調査研究員）
新井真吾（調査研究員）
展示（展示準備・展示・説明）…青山　透（事業調整監）・辻　満久（調査研究員）
島田朋之（調査研究員）
受付（受付・資料配付）……桐原敬文（専門員）・中川千奈美（主任）

受付　スタンバイ

受付　風景

出土品展示

出土品展示

出土品展示

出土品展示

【編集後記】

発掘調査機関の職員は一年中，心も体も休まるときはほとんどありません。発掘調査がない期間は，屋内で遺物整理，実測図作成から始まる報告書作成に追われています。そんな中でこつこつ蓄積した研究成果を公開したいと試みたのがこの語る会です。

職員の静かな思いが県民の皆様にいささかなりとも伝わり，発掘調査や保存活用へさらなるご支援をいただき，地域の歴史や考古学への関心が広がれば幸いです。語る会の開催と記録集への取り組みを励ましていただいた多くの皆様に感謝を申し上げ，調査室のすべての職員・整理作業員とともに，発行の喜びを分かち合いたいと思います。（後藤研一）

これまでの『ひろしまの遺跡を語る』開催の歩み

昭和62年７月19日	【広島県立社会教育センター】	『ひろしまの遺跡を語る－最近の発掘調査成果報告－』
	（記念講演）	『広島県の考古学』潮見浩（広島大学教授）
平成２年２月４日	【広島県立生涯学習センター】	『ひろしまの遺跡を語る－昭和63年度発掘調査の概要－』
平成２年９月１日	【広島県情報プラザ】	『ひろしまの遺跡を語る－平成元年度発掘調査報告会－』
平成３年２月１日	【広島県情報プラザ】	『ひろしまの遺跡を語る－平成２年度発掘調査報告会－』
平成４年10月30日	【三次市文化会館】	第１回『ひろしまの遺跡を語る－平成３年度発掘調査報告会－』
平成５年２月６日	【広島県民文化センター】	第２回『ひろしまの遺跡を語る－平成３年度発掘調査報告会－』
平成５年11月20日	【広島県立歴史博物館】	第１回『ひろしまの遺跡を語る－平成４年度発掘調査報告会－』
平成６年２月５日	【広島県民文化センター】	第２回『ひろしまの遺跡を語る－平成４年度発掘調査報告会－』
平成６年７月23日	【三次市文化会館】	第１回『ひろしまの遺跡を語る－平成５年度発掘調査報告会－』
平成６年９月24日	【広島県民文化センター】	第２回『ひろしまの遺跡を語る－平成５年度発掘調査報告会－』
平成７年８月20日	【広島市南区民文化センター】	第１回『ひろしまの遺跡を語る－平成６年度発掘調査報告会－』
平成７年９月30日	【広島県立歴史博物館】	第２回『ひろしまの遺跡を語る－平成６年度発掘調査報告会－』
平成７年11月11日	【広島県立歴史民俗資料館】	第３回『ひろしまの遺跡を語る－平成６年度発掘調査報告会－』
平成８年10月19日	【三次ロイヤルホテル】	第１回『ひろしまの遺跡を語る－平成７年度発掘調査報告会－』
平成８年11月10日	【広島県民文化センター】	第２回『ひろしまの遺跡を語る－平成７年度発掘調査報告会－』
平成８年11月16日	【広島県立歴史博物館】	第３回『ひろしまの遺跡を語る－平成７年度発掘調査報告会－』
平成９年10月26日	【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る－平成８年度発掘調査報告会－』
	（基調講演）	『人骨が歴史を語る』松下孝幸（土井ヶ浜・人類学ミュージアム館長）
平成10年10月18日	【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る－設立20周年記念－』
	（基調講演）	『考古学からみた邪馬台国時代』石野博信（徳島文理大学教授）
平成11年11月21日	【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る』
	（特別講演）	『現代の科学から歴史が見えてくる』三辻利一（奈良教育大学教授）
平成12年11月19日	【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る』
	（特別講演）	『海のシルクロードと東西文化交流』櫻井清彦（早稲田大学名誉教授）
平成14年２月24日	【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る』
	（特別講演）	『前方後円墳のはなし』近藤義郎（岡山大学名誉教授）
平成14年11月３日	【広島県立生涯学習センター】	『ひろしまの遺跡を語る』
	（特別講演）	『宇那木山古墳群の発掘調査からわかったこと』
		古瀬清秀（広島大学大学院教授）
平成16年１月17日	【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る』
	（特別講演）	『文化財の保存と活用』河瀬正利（広島大学大学院教授）
平成16年12月26日	【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る』
	（講　　演）	『戦国時代史研究と遺跡調査』岸田裕之（広島大学大学院文学研究科長）
平成18年１月７日	【アステールプラザ】	４法人共同企画『新春放談　初夢ひろしまの城物語』
	（基調講演）	『ひろしまの城』三浦正幸（広島大学大学院教授）
	（シンポジウム）	『発掘されたひろしまの城を語る』
平成19年１月６日	【アステールプラザ】	４法人共同企画『新春放談　ぶらりひろしま江戸の旅』
	（基調講演）	『街道筋の暮らしぶりにみる「エコ」生活』石川英輔（作家）
	（シンポジウム）	『ひろしまの江戸時代を掘る』
平成20年１月12日	【アステールプラザ】	４法人共同企画『新春放談　飛鳥美人なに想ふ』
	（基調講演）	『ニューファッションへの道』増田美子（学習院女子大学教授）
	（シンポジウム）	『ひろしまの装・飾・美をさぐる』
平成21年１月10日	【広島県立生涯学習センター】	『平成20年度ひろしまの遺跡を語る』
	（講　　演）	『最近の発掘調査からみた広島県の古墳』古瀬清秀（広島大学大学院教授）
	（シンポジウム）	『ここまでわかった広島の古墳時代』
平成22年１月16日	【広島県立総合体育館】	『平成21年度ひろしまの遺跡を語る』
	（講　　演）	『卑弥呼と箸墓古墳』春成秀爾（国立歴史民俗博物館名誉教授）
平成23年１月８日	【広島県民文化センター】	『平成22年度ひろしまの遺跡を語る』
	（基調講演）	『安芸・備後の古墳と古代国家形成』松木武彦（岡山大学大学院教授）
	（シンポジウム）	『古墳時代の暮らしと心』

財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室　活動報告　第１集

平成22年度 ひろしまの遺跡を語る

古墳時代の暮らしと心　記録集

発行日　平成23（2011）年12月20日
編　集　財団法人　広島県教育事業団事務局　埋蔵文化財調査室
〒733－0036　広島市西区観音新町四丁目８番49号
TEL（082）295－5751　FAX（082）291－3951
発　行　財団法人　広島県教育事業団
印刷所　鯉城印刷株式会社

財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室 活動報告 第１集